ISSN 1345-4323

常磐短期大学研究紀要

第　43　号（2014年度）

目　　次

研究ノート

骨格筋の評価における拡散パラメーターの有用性……　森　慎太郎　1

「＜恨＞をめぐる韓国的な精神構造」に向けての下準備

―日韓間の誤誘導と誤解……　三宅　光一　7

星野徹の未刊詩集『天の蠍』……　菅野　弘久　58

報告

保育士養成課程における実習指導の在り方

―施設実習事前指導における実践と課題―……　室谷　直子　59

翻訳

小説と言語の関係をめぐって

――フランク・トゥーイの場合……　村松　俊子　75

業績一覧……　93

常磐短期大学

平成27（2015）年３月

研究ノート

骨格筋の評価における拡散パラメーターの有用性

森　慎太郎

1　背景

1－1　はじめに

運動によって生じた傷害の診断を行う際、その根拠となる材料として、X線や超音波、Computed Tomography（CT）を用いた検査などが行われている。これらの検査は、表面から見ることが出来ない体の内部の情報を画像として示すことができ、正確かつ客観的なデータであり、診断の一助となる。これら画像診断に用いられるツールの中でMagnetic Resonance Imaging（MRI）は、骨格筋や軟部組織等の状態を知る方法として多く活用されている。

MRIは、撮像条件によりさまざまなコントラストの画像が生成できる。骨格筋を評価するためにはT1強調画像とT2強調画像が多く用いられてきた。T1強調画像は主に筋断面積や筋体積などの筋形態の評価に用いられ、トレーニングの効果などを見ることができる。T2強調画像では、筋内の水分レベルを反映するため、肉離れなどの損傷の評価に用いることができる。しかし、最近、拡散強調画像や拡散テンソル画像、そしてそれらから得られる拡散パラメーターなどを用いて骨格筋の評価を行う例が見られるようになった。

1－2　拡散パラメーターとは

MRIによって得られる拡散テンソル画像（Diffusion tensor imaging：DTI）は水分子の拡散のしやすさ、及びその方向性の情報を得ることができる。生体内では、細胞や組織の配列の影響によって水分子が拡散しやすい方向と拡散しにくい方向が存在する。例えば、脳あるいは脊髄の白質神経線維においては、軸索・ミエリン鞘の細胞膜が水分子の透過を制限するために、白質線維の走行と平行する方向に拡散しやすい。このように拡散に一定の方向性がある状態を拡散異方性があるといい、DTIはこの拡散異方性を評価することができる。DTIでは固有値である3つのλが算出され、これらはその固有値の大きさから$\lambda 1$、$\lambda 2$、$\lambda 3$（$\lambda 1 \geqq \lambda 2 \geqq \lambda 3$）とされる。したがっ

2014年12月8日受付
MORI Shintaro　幼児教育保育学科・助教（幼児と運動）

て、前述の神経線維で例えると、λ1の方向が最も拡散しやすいことから、λ1が神経線維に沿った方向の拡散係数を、λ2、λ3は神経線維と直交する方向の拡散係数を表わしている。これらの固有値から、下記の式より、拡散の異方性の強さを表すFractional anisotropy（FA）、および拡散の方向とは無関係に拡散の大きさそのものを表すApparent diffusion coefficient（ADC）が求められる。したがって、これらの拡散パラメーターを測定することで、人体の様々な異方性組織の微小な構造特性を非侵襲的に評価することが可能である。

$$\mathbf{ADC} = \frac{\boldsymbol{\lambda 1 + \lambda 2 + \lambda 3}}{\mathbf{3}} \qquad \mathbf{FA} = \sqrt{\frac{\mathbf{3}}{\mathbf{2}}}\sqrt{\frac{(\boldsymbol{\lambda 1 - \langle ADC \rangle})^{\mathbf{2}} + (\boldsymbol{\lambda 2 - \langle ADC \rangle})^{\mathbf{2}} + (\boldsymbol{\lambda 3 - \langle ADC \rangle})^{\mathbf{2}}}{(\boldsymbol{\lambda 1}^{\mathbf{2}} + \boldsymbol{\lambda 2}^{\mathbf{2}} + \boldsymbol{\lambda 3}^{\mathbf{2}})}}$$

このDTIは脳・神経領域で臨床や研究などで用いられてきたが、2001年頃より、筋を対象とした研究が行われている。ZaraiskayaらはDTIを用いて損傷した腓腹筋と健常人の腓腹筋を比較したところ、損傷した筋のFAが低く、ADC及びλが高かったと報告しており[1)]、DTIは筋の損傷を評価することができることを示している。

１－３　運動誘発性筋損傷とは

不慣れで高強度の運動を行うと微細な筋損傷が生じる。これは肉離れや打撲などによる骨格筋の外傷ではなく、運動が原因となって引き起こされる損傷であり、これを運動誘発性筋損傷という。この運動誘発性筋損傷は、伸張性の運動を行うことで筋に物理的なストレスが加わり、筋の微細構造に変形や乱れなどが生じることで引き起こされると報告されている[2)]。運動誘発性筋損傷が生じると、筋力の低下、関節可動域の減少、周径囲の増大、クレアチンキナーゼなどに代表される筋タンパクの放出の増大などを伴うため、これらの影響により筋のパフォーマンスの低下や遅発性筋痛をも引き起こす。そのため、運動後の筋の状態を適切に評価することはコンディションを維持するためだけでなく、新たな慢性障害を生じさせないためにも非常に重要である。

１－４　本研究の目的

運動誘発性筋損傷のような微細な筋損傷は、これまで行われてきたMRIから得られるT2強調画像などでの評価が難しい。そこで本研究では、運動誘発性筋損傷による筋組織の変化を、異方性組織の微小な構造特性の評価が可能な拡散パラメーターを用いて評価できるかを検討することとした。

２　方法

２－１対象

対象は上腕に既往がなく、運動習慣のない健常男性5名（年齢：24.8±1.5歳、身長173.9±6.2 cm、体重69.0±11.7 kg）とした。被験筋は上腕二頭筋とし、利き腕、非利き腕は無作為に選んだ。また実験１週間前より激しい運動を禁止し、さらに実験期間中は運動及び筋に対するストレッチングなどの様々な処置を禁止した。

２－２　実験プロトコル

Pre-MRIの撮像直後、上腕二頭筋に対し運動負荷を課した。その後１時間後、24時間後、48時間後、そして１ヶ月後にPost-MRIの撮像を行った。また筋損傷の指標としてクレアチンキナーゼ、アルドラーゼ、ミオグロビンを測定するために、運動負荷前、1時間後、24時間後、48時間後、72時間後、96時間後、120時間後、１週間後に採血を行った。

２－３　運動負荷

上腕二頭筋に対する運動負荷はEvansらが用いた方法を参考にし[3)]、BIODEX system4を使用して行った。肘関節伸展位から屈曲120°の可動範囲で、concentric contraction（60deg/sec）による負荷の直後にeccentric contraction（120deg/sec）による負荷を1回とし、それを10回行った。この運動負荷を10秒のレストを与え、５セット行った。

２－４　MRI

本研究では、3.0 T MR（Philips Achieva）を使用した。DTIの撮像は　TR / TE = 4000 / 67 msec, b value= 500 sec/mm2, MPG = 6軸, FOV = 150 mm, Matrix size 128×128, NSA 6, Slice thickness 6 mm, Number of slice 12, の条件で撮像し、Total scan time は5:16であった。

撮像肢位は、仰臥位にて、上腕を床面と平行に置き、肩関節0°、肘関節屈曲30°、前腕回外90°とした。この肘関節屈曲位での撮像は、運動負荷により肘関節の可動域が減少してしまう影響を考慮したためである。撮像中心位置は、肩峰から上腕骨外側上顆までの長さの70％遠位部とした。

２－５　解析

拡散パラメーターの算出には、MR拡散テンソル解析ソフトウェアdTV（東京大学医学部附属病院放射線科開発）を用いた。手動にて脂肪や血管、骨を慎重に除き、上腕二頭筋全体を関心領域として選択し、FA、ADCを算出した。

そして、得られた拡散パラメーターはそれぞれ繰り返しのある一元配置分散分析を用い、その

後多重比較にて運動負荷前の測定値を基準とし、運動後の変化をDunnettの方法を用いて比較した。なお、有意水準は5％未満とした。

３　結果及び考察

３－１　血液指標

各血液指標の値をTable1に示した。伸張性の運動は筋線維にメカニカルストレスを与え、このメカニカルストレスにより、筋線維は損傷されると報告されている[4)]。また、クレアチンキナーゼ、アルドラーゼなどの筋逸脱酵素やミオグロビンなどのタンパクは筋損傷が生じると血中で高値を示すことが知られている[5) 6)]。本研究では全ての指標が運動負荷後72時間前後で基準値よりも大幅な上昇を示しており、上腕に対する伸張性の運動が筋損傷を引き起こしたことを示している。

Table 1 Changes in serum biological index

	pre	post1h	post24h	post48h	post72h	post96h	post120h	post1w
Creatine Kinase ♯(60～270)	169.4 ± 83.4	131.2 ± 18.5	2887.6 ± 4104.8	17833.6 ± 22762.4	25464.2 ± 22453.7	19965.8 ± 11686.8	13791.6 ± 6588.4	3657.6 ± 2822.2
Aldolase ♯(2.7～5.9)	5.4 ± 1.4	4.7 ± 0.9	22.0 ± 26.2	151.5 ± 219.1	228.0 ± 248.6	189.3 ± 141.6	120.2 ± 65.0	40.9 ± 16.3
Myoglobin ♯(28～72)	78.8 ± 117.5	42.6 ± 16.1	478.4 ± 732.2	1766.6 ± 1678.1	1043.0 ± 399.2	467.0 ± 118.2	373.2 ± 369.3	66.8 ± 8.4

Unit : Creatine kinase and Aldlase(IU/ℓ), Myoglobin(ng/mℓ)　(mean ± SD)
♯ : Standard value

３－２　拡散パラメーター

FAの結果をFigure1に示した。FAは運動負荷前の値と比較し、運動負荷後24時間後及び48時間後に有意に低下を示した。

次に、ADCの結果をFigure2に示した。ADCは運動負荷前の値と比較し、運動負荷後１時間後には上昇を示し、24時間後には１時間後の値よりもやや低下したが、48時間後には再度上昇を示した。しかし、有意な差は見られなかった。

骨格筋は約1μm の太さの筋原線維、そしてその筋原線維が束になり細胞膜に包まれた数10μmの筋線維、さらにその筋線維が束になって形成している。DTIの評価分解能は、10μm程度であり[7)]、そのため筋を対象としたDTIでは、筋線維の状態、つまり筋線維内の水分子の拡散異方性を評価していると言われている。ADCの増加は水分子の拡散する方向に関わらず、拡散性が上昇したことを示している。また、FAの減少は異方性が低下したことを示しているため、筋線

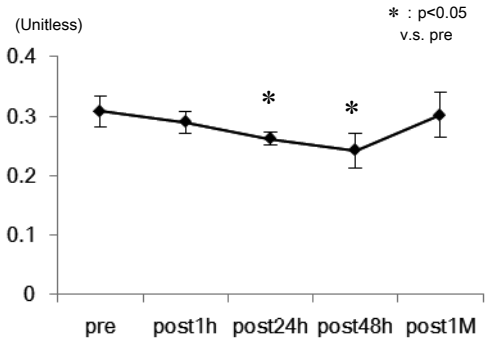

Figure 1　Changes in FA

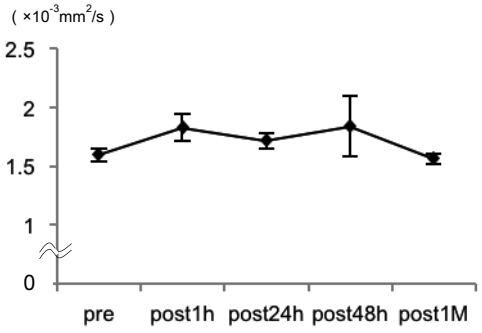

Figure 2　Changes in ADC

維の長軸に直交する方向の水分子の拡散性が上昇した、もしくは長軸方向の拡散性が低下したと考えられる。ADCが上昇したことを踏まえると、運動負荷によって筋線維の長軸に直交する方向の水分子の拡散性が上昇したと推察できる。これは筋線維が微細な断裂を起こすことで、細胞膜である筋鞘の完全性が失われ、細胞内の水が細胞外に広がったために生じたと考えることができる。

４　結論

本研究では、拡散パラメーターを用いることで、運動誘発性筋損傷による筋組織の変化を捉えることができることが明らかとなった。しかし、本研究では被験者が少ないため、今後、被験者及び測定項目を加え、さらなる検討を行う必要がある。

筋の状態の評価として拡散パラメーターを用いた方法を確立することができれば、筋疲労や筋損傷後の回復過程をリアルタイムで知ることができるため、スポーツ選手が筋のケアを目的として行っている、アイシングやストレッチングがそれらに有効であるのか、その回復手段の検討などに用いることができると考える。

５　参考文献

1）　Zaraiskaya T, Kumbhare D, and Noseworthy M D. Diffusion tensor imaging in evaluation of human skeletal muscle injury. J Magn Reson Imaging. 2006; 24(2): 402-8.

2）　Clarkson PM, Hubal MJ. Exercise-induced muscle damage in humans. Am J Phys Med Rehabil. 2002; 81(11Suppl): S52-69

3）　Evans R K, Knight K L, Draper D O, and Parcell A C. Effects of warm-up before eccentric exercise on indirect markers of muscle damage. Med Sci Sports Exerc. 2002; 34(12): 1892-9.

4）　Friden J, Sjostrom M, and Ekblom B. Myofibrillar damage following intense eccentric exercise in man. Int J Sports Med. 1983; 4(3): 170-6.

5）　Brown S, Day S, and Donnelly A. Indirect evidence of human skeletal muscle damage and collagen breakdown after eccentric muscle actions. J Sports Sci. 1999; 17(5): 397-402.

6）　Lavender A P and Nosaka K. Changes in markers of muscle damage of middle-aged and young men following eccentric exercise of the elbow flexors. J Sci Med Sport. 2008; 11(2): 124-31.

7）　Marks PM. Cerebral ischemia and infarction. Magnetic Resonance Imaging of the Brain and Spine.3rd ed. Vol.1 Chapter18. Philadelphia: Lippincott, Williams & Wilkins, 2002; 919-79

※本研究は、2013年度常磐短期大学課題研究助成を受けたものです。

研究ノート

「＜恨＞をめぐる韓国的な精神構造」に向けての下準備
―日韓間の誤誘導と誤解

三宅　光一

1．まえがきに代えて

なぜ個人的な体験をまずもって重視するかといえば、日韓間の問題になると、情報に何か奇妙な感情が入り混じりがちだからである。「奇妙な感情」とは例えば、ソウル・オリンピック大会の直前に韓国に注目が集まり、さまざまな情報が流れてきた。前景気を煽ることもあったのだろう、日本のマスコミ界では韓国人は日本を応援するなど、好感度が高いといった情報が盛んに流された。それは論者が接する韓国人の意識や韓国社会を多少ながら理解している知見とは相容れなかった。柔道競技では会場全体が大観衆の声に包まれ、さながら日本選手はヒール役を演じさせられた。事前の情報では、多くの人が日本選手を応援するというアンケート結果が出ていたのに、韓国全体が日本選手の敵になったような様相を呈していた。日本のマスコミの側が意図的に日本の世論操作をしたと思われる。こうした例は数多くあるので、韓国に関するマスコミ報道や書物は疑ってかかる必要がある。有意義な本、真相を衝いた本もないことはないが、稀だった。最近は韓国をその本来の姿で記述した出版が盛んになったようでもある。こうした状況なので、論者の判断はとに角、個人的な直接体験を根底に据えて理解を深めていくやり方によって固めていくことにした。

韓国人の生き方や人生観が非常に魅力的に映ることは事実である。それは自分に欠けている部分の魅力といったものであろうか。もっとも、そのような生き方は、日本の風土で生育した自分にとって真似はできないし、結局は真似したいとも思わない。「他山の石とする」といった格言がある。その普通の用法とは全く違う意味で、つまり良い意味で他山の石として、しかも距離を置いてただ眺めやるだけである。さらに比喩的に言うと、雲海の向こう側に聳える山容を意識しながら、絵画を眺めるように佇むといった風情であろうか。双方の住む世界は、対馬と半島南端との距離よりも隔たりが大きい。いわば心理的な溝は埋めがたいものがある。日韓の関係を表現する時に安直に使われる「一衣帯水の仲」という言葉は、虚しく響くだけである。欧米の文化と東アジアの文化との違いに驚かされるが、それに輪をかけて、島国日本と東アジアの大陸国との

2014年12月5日受付
MIYAKE Mitsukazu　現代教養講座・非常勤講師（思索と思潮）

懸絶には、正直驚かされる。岡倉天心の「アジアは一つなり」は、白人の世界支配において人種差別に苦しんだ明治時代の理想像ではあるが、随分現実からかけ離れている。アジアは西欧世界のように文化的、歴史的な纏まりを付けることが不可能なのである。とりわけ中国や韓国との関係においては、類似点以上に異質なものが際立って感じられ、異なると言えば全くの正反対の地点に立つ。日本人はこうしたズレをないがしろにする限り、いつでも韓国人との関わり合いや交渉でボタンのかけ違いが起こり、ギクシャクした問題に発展する可能性は絶えない。

２．東アジア共同体幻想

ここで再び卑近な例を持ち出そう。テレビをつけると、韓流ドラマや映画、歌謡番組が画面に映り、韓国人俳優や歌手の人気は留まるところを知らないかのようであった。市街地には韓国人の経営する焼き肉店が見受けられ、大久保にコリアタウンが出来て、連日日本人客で賑わいを呈していた。両国の溝や亀裂は、日本における韓流ブームで埋められ、韓国人の心にも日本との連携や和解が頓に高まった、と錯覚した日本人は多かった。韓国国内では、チャイナタウンはソウルや仁川などにできているが、日本人街を作ることには猛反対である。大使館さえ建て替え申請を却下している。東京の韓国大使館は最近、新たに建設し直したのに、ソウルでは認めない。議事堂での認可を巡る審議に日本大使館員が傍聴しようとしたが、これも拒否された。以前は傍聴を許していたにもかかわらず、突然に法的根拠もなく変更される。法治主義は韓国の場合、建前だけである。早とちりの日本人、例えば鳩山由紀夫元首相はEUの出現に刺激を受けたのか、あるいは中国人や韓国人に諭されたのか、東アジア共同体を唱え出した。愚かという他ない。論者の知る限り、中国人がそうしたことを言い始めたのは、ユーゴ紛争で米軍機が中国大使館を誤爆した後である。つまり米国の圧倒的な力に中国が怯えていた時に、日本に共同体構想を呼びかけてきた。一方は法治主義による民主主義国、他方は人治主義による一党独裁の共産主義国の政治体制、もう一方は李朝的な政治習慣を残し、情治主義による未熟な民主主義の政体[1)]である。この違いひとつを取ってみても、共同体など無理であることは一目瞭然である。しかし物事を広く捉えられない日本人は、日中友好の延長上で盛んに言い出した。識者の間で流行したポストモダンの思想に被れたことも大きいように見える。EUの成立を念頭に、今後は国家の壁や民族意識などはグローバルな展開の中ではあまり意味がないと考えた。得意げにEUの学者は、人類の21世紀型の理想としてポストモダンの将来図を描いて見せた。ヨーロッパがそうなら、世界中がそうなると、日本人は受け止めた。

ところが、日本を取り巻く環境はヨーロッパと同じ状況にはないのであって、むしろ現在は逆行して、19世紀半ばの政治情勢が、東アジアに出現している。当時と異なる点は、中国の国力の上昇機運と朝鮮半島の依頼心混じりの圧倒的な対日的反発心である。EUとの連想を引き合いに出せば、共同体への機運が生じる前に、三十年戦争、ナポレオン戦争、普仏戦争、第一次および第二次世界大戦を英独仏その他の国は戦い、否と言うほど戦争の災禍を体験した上で、ようやく

知恵が働き始めた。その轍を踏むとすれば、東アジアであと２回ぐらいは戦争をしなければならない勘定になる。しかも日本が敗れ、日本国民がひどい災厄を被り、屈辱を受け、第一次、第二次世界大戦後にポーランドに東方の領土を削り取られ、フランスにアルザス・ロレーヌ地方を譲り渡したように、謝罪して沖縄と対馬ぐらいを中韓に譲渡する。戦時賠償金も第一次世界大戦後のドイツ並みに支払い能力いっぱいに課せられる。こうした状況下で中韓両国が自尊心を満足させられれば、ようやく3番目の地位を与えられて共同体なるものの成就も夢ではないかもしれない。しかし、それでは華夷の秩序に入ることを意味する。秀吉の唐入りは名誉ある孤立から脱して、華夷の秩序に入れてもらうことが目的であった、と滑稽な解釈が最近出回っている。太閤秀吉は、スペインに先立って華夷の秩序を破壊しようとしたが、そこに参入しようとしたのではない。明国の使者が秀吉を日本国王に冊封するといった伝達に対して、激怒した秀吉が再び慶長の役の軍を興したからである。日本という国家が国民の生命と財産の保全より中韓への追従を優先しない限り、共同体は不可能というものである。尖閣の争いが起き、中国側が警備艦を繰り出してきた時、気の早いヨーロッパの新聞は中国の復讐戦争が始まったと報じた。

共同体の構築ではなく、経済の連携ならむろん、より緊密化の可能性を秘めている。現在でも相互依存の度合いは高い。日本の対中輸出入量は国別で米国を抜いて第一位である。韓国は日本や米国よりも対中依存が顕著であり、外貨準備高も何と30％が人民元である。反日運動と軍事面での米国からの離反によって中国への傾斜を強めている。さらに経済の緊密化が進むかもしれないが、それが韓国の不幸の第一歩、つまり中国への再度の属国化となる恐れがある。周囲の大国間でバランサーになるという政策は、盧武鉉大統領が実行した構想である[2)]が、うまくいかない。韓国の立場は伝統的に従属的地位を免れ得ないのである。盧武鉉大統領が、戦時の指揮権を米軍司令部の手から韓国軍に移譲するように迫った。米国への嫌がらせのような効果を狙って、つまりは米国に密着過ぎの関係からバランスを取ろうとしたのだが、米国はあっさりと受諾した。韓国駐留を無益な負担と感じている米国は、日本列島ないしはグアム島の線まで下がろうとしていたところなので、渡りに船だった。韓国は慌てたが、後の祭りだった。李明博大統領はその委譲期限の延期を申し出た。次の朴槿恵大統領も委譲延期を要請した。韓国軍に統合指揮などは出来ないし、自国防衛の能力すら欠けている。全般的に周辺の大国への調整機能を持つなどは、自己の能力の限界を超えている。

強気の習近平体制の下でも、中国は日本抜きでは経済が成り立たない。ただし、目下のところ中韓は、これ見よがしに日本を除け者にして、FTAを締結した。中国は韓国を日本から離反させたい、あわよくば米国からも離反させたいと働きかけている。政治的にも世界中で反日共同キャンペーンを張っている。だが、これは、中国が下関条約で朝鮮の独立を認めて以来、初めて手にする韓国の属国化への第一歩である。朴槿恵大統領は盧武鉉大統領と同じように、欧米中各国の首脳と会談を持てば、謝罪せず、歴史認識を改めない日本の現状を非難する「告げ口外交」を遂行中である。相手国が辟易するぐらいに対日非難を繰り返す。当事者の二国間問題はほんの僅か

触れられるだけである。相手の首脳は自分たちの懸案問題を度外視して、会談を開くことに不満が噴出する。韓国は日本に対する外交的切り札を使用しているつもりなのである。大きく言えば、気持ちの上ではバランサーの実践を行っているつもりである。韓国の自立は、反日のみで達成されると、思い込んでいるからである。実際、それで心が満足するし、大統領の支持率も上昇する。

韓国ツアーに日本人が参加すると、独立記念館をはじめ日本人の残虐さを示す展示物や観光地を見せられて、旅行の楽しみというより懺悔と反省を強いられているようで、心が沈み陰鬱な旅になるという。展示は虚偽情報で相当固められている。現に修学旅行の日本の高校生は、偏向した教師の引率の下にパゴダ公園に行き、泣きながら当地のお年寄りの前で謝罪させられる出来事まで起きている。この引率教師は人道主義的行為に自己満足していることであろう。80年代に「対馬船上会談」という事件が起きた。反日的で親韓国的と目された映画界の大島渚監督と韓国の関係者が、洋上で話し合いを持った。冒頭で植民地支配の謝罪を要求されて、大島監督は拒否したために紛糾した。彼の見解からすれば、日本国家と対峙しているから、謝罪する立場にはないとの認識であった。上述の引率教師と同じ気持ちで、謝罪するのは自分以外の日本人と日本国家である。自分は糾弾する側にあると思っていた。韓国人は国民と国家を一体化するのを当然視した。激しい言い争いが始まった。国連人権委員会で慰安婦の問題を上程させ、「性奴隷」と認知させたのは日本人の人権派弁護士だったが、彼も大島監督のような心境なのだろう。

韓国海軍は対日戦争を意識して、イージス艦を将来6隻体制にする予定である。現状は強襲揚陸艦「独島」と潜水艦「金佐鎮」「安重根」、またイージス艦「世宗大王」など反日を前面に打ち出す軍艦を建造した。この調子だと、まさか「対馬」の艦名はなかろうが、「東海」と命名した軍艦は誕生するのではなかろうか。金左鎮とは日本軍と戦った独立運動家の名前であり、安重根は初代韓国統監で日本の国父と称される伊藤博文を暗殺した人物である。世宗はハングル文字を制定し、「応永の外寇」で対馬を攻めて屈服、服属させたとされる李朝の優れた国王のことである。

ただし、事実は朝鮮軍のほうが惨めな敗北を喫した。朝鮮軍約1万7千名が対馬倭寇の軍勢が不在なのを狙って侵攻した。少数の対馬兵が、それに向かい討ったが、朝鮮軍は地理不案内と弱兵の集まりだったために２千5百人の死者を出した。朝鮮軍は対馬の交通の要所・船越に柵を巡らして軍営を設けて、対峙したものの、台風が来るから帰った方がいいぞとの対馬側の勧告に従ってほうほうの体で退却していった。あまりにも無様な戦いぶりに、当地で捕縛されていて現場を目撃した捕虜の中国人たちが、その情報を中国当局にもたらすことを恐れ、帰国が許されなかった。朝鮮軍は弓矢を放っても、命中精度が悪かった。対馬側からの攻勢を憂慮して、官位を与え貢物を定期的に贈り、貿易を許した。対馬は、征伐をした李朝に服属したと、そのうちに嘘を言いかねないので、事実を示しておく。今思い出したのだが、韓国のテレビ時代劇『世宗大王』では、事実に反した扱いになっていた。映像を観て騙された日本人が相当出たことだろう。

近い将来、日本が攻めてきたら、竹島（韓国名：独島）上空で従来の30分間の戦闘よりも60分余計に戦える空中給油機を導入の予定である。また自衛隊機をはるかに凌ぐ対地攻撃用ミサイル

や最大射程800キロに延長したミサイルを導入すると発表した。どこから見ても、対日敵視政策である。近年は毎年軍事費を倍増させている。李明博前大統領時代から、済州島に巨大な海軍基地を構築しており、完成の暁には、中国海軍の碇泊地にも活用されそうである。そうなると、九州北部と五島列島、対馬は脅威に直面する。元寇の再来となるのは必至である。韓国自慢の新造軍艦や新鋭兵器は、汚職と賄賂の横行で欠陥品が多く、まともに機能しない。宣伝ほどのことはなく、見かけ倒しである。従って過剰反応は必要ないが、それでも、乗じられる隙ができないように、備えはきちっと準備しておくことが肝要である。

こうした情勢から判断すれば、独りよがりの東アジア共同体提起は、東アジアの情勢や歴史に無頓着な人間のやることである。鳩山元首相はその最たる人物である。韓流映画やスターに夢中らしいから、無理ないことかもしれない。彼はベトナムに行って、政権の担当者に友愛をもって南シナ海を平和な海にすべきことを力説した。要するにお互いに話し合えばよい。話し合えば必ずよい結果が得られるだろうと諭したのである。では、お宅の尖閣諸島はどうなのだ、今まさに中国の侵略に曝されて、一触即発のような状況ではないのか。尖閣の心配でもしたらどうか。「領海法」で国内的には尖閣諸島やパラソル諸島（中国名:西沙諸島）は「核心的利益」の中国領で、そのことを根拠にすれば、特に理由付けは要らない。中国はいつでも攻撃を仕掛けられる態勢が法的に整っている。その決定は、例によって少数の中国共産党幹部が密室で行うわけだから、決定のプロセスは不透明極まりない。友愛でうまくいくのであれば、やってみたらどうか。その解決とは、友愛で結び合おうが、憎しみで反発し合うことになろうが、その領土はどちらか一方の所有に帰すことである。近代国民国家の領土とは、そのように明確な性格を帯びるのであり、国家は国民に対して領土を守る責任がある。ベトナムの有力者は外交儀礼もあり、これほど露骨に話さなかっただろうが、ベトナムの真意を言えば、こういうことである。

日本と違って海軍力の非力なベトナムは、中国のなすがままになっている。ベトナム戦争時に、中国は火事場泥棒のようにパラセル諸島のベトナム占領下の島を攻略した。今は、動く洋上の基地である空母「遼寧」を南シナ海に派遣して、ほぼ全域を支配しようとするほどに軍事的な勢いが増している。ベトナムにとって、漢帝国以来の中国は北方からの2千年にわたる重圧であり、恒常的な脅威の大国である。中国は弱みを見せれば、そこを衝いてくる。叶わないとみると、懐柔策に出る。ベトナムに対しては、ベトナム戦争後に懲罰を理由にベトナムに突然攻め込むといった暴挙に出た。戦後の統一ベトナムは、隣国カンボジアのポルポト政権を武力で打倒した。東京では弱者のベトナムが、カンボジア侵略を行ったというので、反米一辺倒のベトナム平和連合の運動がなんらの総括もせず、瞬く間に崩壊、消滅した。あれほど激しい運動を日本国内で（米国内ではない）したのだから、解散に当たり総括ぐらい公表するのが常識である。ポルポトのクメール・ルージュは文化大革命の忠実な実践者であった。彼らは都市を地上から抹殺し、都市住民やインテリ、医師などを中心に国民を農村に下放し、国民の1/3を虐殺した。中国は、ベトナムのカンボジア侵攻に対する報復を企てたのだった。当時は非近代的な組織の人民解放軍（階級区分

を極端に排した烏合の衆）が、数を頼りに押し寄せたが、世界最強の米軍組織を海の彼方に追い出した実戦的な高い能力がベトナム軍に備わっていたから、中国の意のままにならなかった。中国軍は国境地帯の村落に被害をもたらしただけで、撤退せざるを得なかった。現在の習近平主席は、広大な太平洋だから二分して支配しようと、オバマ政権に呼びかけている。弱腰オバマよりも、さらに米国の国力が弱体化した将来には、中国一国が太平洋を支配するとでも宣言することであろう。弱みを見せながら、話し合って解決できるなどと淡い期待をもつのは、戦後派日本人のセンチメンタリズムの特徴がよく出ている。そして何代も政治家を輩出する家系は、時に拙劣な政治センスの人間を生み出すことがある。それは歴史が証明する紛れもない事実である。

こうしたことを書きながら、思い出してくるのは、鳩山首相が初めて国会で方針演説をした時の馬鹿馬鹿しさである。国民の生活改善と国家の改革、戦後の制度疲労の立て直しが待ったなしの状態で控えていたのに、地球の命を救いたいなどと頓珍漢なことをやり始めた。極めつけは自己の敬愛するガンジーの言葉を採り入れて、自分のことは棚に上げて、「汗なき蓄財は罪である」と国民に訴えかけた。そのような主張は、世界的にも勤勉な国民に押し付けるよりも、自己が反省すべき事柄なのだろう。

それとは対照的に、安倍首相は対中包囲網の現実に根差した外交を展開している。国際関係論的に言えば、実効性を伴うもので、それは東南アジア諸国や豪州、インドなどに期待されている。この外交は何も力で中国に対抗しようというのではない。逆に中国に国際法遵守、平和志向、討議によって対外関係を進めることを促すものである。周辺諸国に連携して働き掛けて、傲慢で強圧的な中国の態度を改めさせることが狙いなのである。中国は不利だと思えば、懐柔策に転換する。弱い国だと思うと、一気に強圧的に叩き潰しにかかる。孫子の兵法や『戦国策』を見れば、よく分かる。中国人はこうした策謀や争乱が実に好きな国家集団である。多分、それが彼らの生き甲斐の域に達しているのだろう。安倍首相は、現代日本の政治家には珍しくきわめて戦略的に動いており、特に東南アジアに良い影響を与えている。東南アジア諸国は、経済的な結びつきの点で中国と密接な関係にあり、従って強大な中国の横暴に、なすすべもなく立ち尽くすような心境だった。それでも、各国が相互に連携協力関係を築くことで、中国の武力的威嚇を抑制する安全保障の手段もあるのだ。安倍首相の発言と行動はこの手段の有効性を気づかせた。彼も佐藤栄作首相、岸信介首相、吉田茂首相という戦後の大物政治家につながる家系の出である。こうした由緒ある家系から、時には立派な宰相が生み出される場合もあるということだろう。

友愛外交を掲げるような人間は一見、国際派のように振舞い、実は非国際派の島国根性を抜け切っていないのである。友愛外交は欧州の戦間期に出てきそうなスローガンである。だが、その当時ですら裏に回ると、醜い外交的な駆け引きが交錯し、平和は次の戦争への準備期間に見えてくる。譲歩の繰り返しは外国から見たら、決して国際人ではない。情勢を読めない甘い世間知らずである。江戸時代以前の儒家で名を成した藤原惺窩は、戦国乱世の混乱がいまだ治まり切らない時期に、今明軍に日本を征服してもらえば、中国のように聖人の国にしてもらえると言った。

それは、机上の空論から観念的に導き出した結論に過ぎない。第一、中国社会の実状を知らない。島国根性的な視野の狭さから書物を理解して、しばしば日本社会とか日本風な心情とかに適合するように解釈してしまいがちである。一体中国のどこに、いつそのような聖人の国があったのか。武力による覇権王朝の興亡だけではないのか。武力と権力のなくなった末期の周王朝は、覇王の武力で滅ぼされた。孔子が言った周の理想社会や礼楽政治が、周代に実現していたかどうかは定かではない。孔子は周の礼楽を詳細に述べているが、時代的な隔たりが大きく孔子には知るすべがない。それを平気で見てきたかのように語る。孔子が詐欺師か山師の類であるとの見解を取る人々がなくならないはずである。明の儒者で清の魔手から亡命してきた朱舜水は、水戸学の形成に多大な影響を及ぼした明国人であるが、易姓革命がない日本こそ、儒者の理想を樹立していると語った。当代随一の権勢は、天皇から関白とか征夷大将軍とかの位を賜り、各大名も形骸化した国司の職名を嬉々として受け容れた。それは取りも直さず、権威に屈することを意味する。権威だけで生き延びている存在は、強力な武力とそれを背景とする権力が徘徊する中国や韓国ではあり得ないことである。李朝を樹立した李成桂はもともと高麗の臣下であった[3)]。反乱を起こして、半島を支配した。高麗王族の名前である王の姓をもった人間をことごとく一掃して、根絶やしにした。まさに易姓革命である。というわけで聖人の国は、朝鮮はもとより過去の中国にあったかどうかは分からない。それは単に儒家が理想として掲げる目標に他ならない。それを藤原惺窩は、書物上の理解から現実化したことだと思い込んだ。藤原惺窩は典型的な理想主義者、視野狭窄症的非現実的な学者である。キリスト教徒やマルクス主義者がその理想世界を未来に希望的に投影したとすれば、儒教はその幻想を目撃したことのない過去に投影したと言えよう。ニーチェの言うように、ありもしないものに希望を託し、それに慰藉を求めるのは現実逃避の人間的な性向である。

アジア大陸と島国との根本的な差異以外にも、さらに大事な点を指摘しなければならない。EUの結成が可能となったのは、構成国のどこもがほぼ対等な規模と国力であったためである。英仏独伊が近代の列強であり、一頭抜きん出てはいるが、絶対的な超大国というわけではない。欧州大陸で超大国が出現しそうになると、必ず島国イギリスが介入して、それを阻止したからである。ナポレオン戦争、第一次並びに第二次世界大戦を顧慮すれば、明らかである。

他の一例を挙げると、それは第一次世界大戦後のソ連－ポーランド戦争である。大戦後、ウイルソンの提唱した民族自決の原理に基づいて、ポーランドは独立を回復したが、元の国土を取り戻せたわけではなかった。そのために、内戦と干渉戦争に掛かり切りのソ連に、失地回復の戦争を仕掛けた。そして白ロシア、ウクライナの首都キエフまで軍を進める。ソ連は猛反撃した。今度は反対に、ソ連軍がワルシャワの近郊まで攻め込んだ。すると急激な展開に英仏は驚き、このままではソ連の勢力が東欧圏深く入ってくるというので、物資援助を行った。ポーランドは盛り返したところで、膠着状態となり、停戦になった。その後、リガで講和会議を開き、結果的にポーランドは白ロシアとウクライナ西部を自国領とした。ヨーロッパにおける国境線はあってなきが

如くである。第二次大戦及びその戦後はポーランドの拡大領土は消えてしまう。なおかつ自国の東方の一部はソ連が削り取り、その代りに敗戦国ドイツの領土を部分的に占有した。英国はヒトラードイツの西欧支配を恐れて、イデオロギー的に完全に異質なソ連とさえ妥協して、当面の大敵を倒そうとしたのである。このように英国は絶えず大陸を牽制して、大国の出現を阻止した。

超大国・中国とその「野蛮な周辺諸国」との間には、比較を許さない差が歴然と存在する。欧州で英国が担った役割は、それを東アジアに比定すれば、島国日本が負うべきであろうが、大陸への干渉例が少なく、日本は孤立的で無関心な関係に甘んじた。大陸への干渉は、古代の朝鮮半島南部への進出と秀吉の派兵、近代の日清戦争以後の歩みのみである。秀吉の唐入りは、渡り廊下の朝鮮半島が障害になって、中国の分裂を誘うまでには至らなかった[4)]。けれども文禄慶長の役が一因となって、明国は急速に衰退していき、李自成の反乱で北京が占領されると、女真族の清が侵攻して、労せず政権を樹立した。李朝の支配者、両班と儒学者は、宗主国・中国を守護する「東壁」であることに誇りを持っていた。半島自体は、中国や北方民族から筆舌に尽くしがたい被害を蒙ってきたにもかかわらず、不思議にそれほど気にする様子もない。この数多くの被害は論者の見るところ、朝鮮民族の人種改造にまで至った。中韓で国交を結ぶ時、朝鮮戦争時の中国軍介入で韓国人が被害を受けた、謝罪してほしいと要求した。中国はそれを突っぱねた。すると、あっさりと要求を引っ込めて、国交を結んだ。韓国人の精神構造は抗議の声を上げるより、中国の威光を背に、自らの文化的、政治的地位の高さを自慢して、屈辱感を和らげる仕組みになっている。そしてその証として東の日本を野蛮国として貶め、自らの下位に置くことで満足感を得ている。EU諸国と違って均衡した国々で纏まりようがないというのが、東アジアの歴史である。ヨーロッパでは、平等精神を培ったキリスト教が共通の基盤であり得たことも、与って力となった。ウエストファリア条約で、どのような小国であろうと、一応の発言の機会が与えられ、他国はそれを尊重する取り決めがなされた。現実政治としては強国の意見が通るのであろうが、少なくとも対等に近い意識がどの国にも確立している。一方、東アジアでは、古代中国の冊封体制の残滓、中華思想を裏付ける過剰な人口と領土の広さ、一国のみ突出した地域大国の存在、朱子学の厳格な身分制の尊重、他国に対する優越感などが強く作用し、EUに匹敵できるような要素はいまだ存在しないのが現実である。

当拙論では、韓国事情を読んだり語ったり見聞を弘めたりして、長年にわたって自分なりに醸成した韓国観を披露している。それが切り開く地平において、「恨」の精神も問題の射程に入ってくると考えるからである。その趣旨から、浅薄な日本人が夢想しがちな「東アジア共同体」について上で若干触れておいたのである。

３．朴槿恵大統領の発言―＜恨＞の再脚光

「恨」の言葉に関する話題であるが、最近、言われなくなったようだ。知り合いの韓国人に言わせれば、それは女性が使う女性的な概念だという。李朝社会における女性の虐げられた扱いの

ことを考えれば、なるほどそれは正しい。「恨」の使用頻度が減ったのであれば、女性の境遇に良い方向で変化が生まれたということであろう。庶民の間で人口に膾炙した物語『春香伝』や姉弟愛を謳い上げた『西便制の物語』は、「恨」の精神を如何なく具現化したものである[5)]。次回の論文では、必ず取り上げるべき題材である。韓国の急激な社会変化によって女性の置かれた環境が改善されたといえるのか。果たして精神的に抑圧された時代から解放された生活状況によって、「恨」の心理的現象は消滅したのであろうか。社会というものは歴史的な必然の流れから言えば、100年も過ぎると、矛盾が噴出し、瓦解へと向かい、新たな社会システムに移行する。その尺度から推察すると、李朝社会は厳格な身分制の下で停滞し、「恨」を人々の骨の髄まで浸透させた。それ故、李朝500年の長い期間に育まれた精神が、そう簡単に消えるとも思えない。現在は、とりわけ反日要素とこの「恨」とは絡み合っている。抑圧された民族の心に、「恨」が屈辱のエネルギーとして蓄積されてきた、という歴史的経緯が、20世紀の100年間にうかがわれる。従って、対内的と同様に、対外的な関係において「恨」は韓国人の心を知る手がかりとなる。

日本と同様に韓国でも離婚が増えて、女性のほうが子供を引き取って育てる事例が多い。問題は、引き取った子供の名前が元夫の姓になっていることである。金大中大統領の時に戸籍法が改正され、女性が戸主になることが許されるようになった。しかし現実社会で生きていく上では、母親が戸主というのは、まだまだ認められない。不便だという理由で、子供には離婚した元夫の姓を名乗らせているのが実情である。女性が再婚しようとする時には、子供の籍を抜く必要が生じてきて、元夫の居所を捜しまわることになる。本人が米国にでも移住してしまっていると、全くの処置なしである。

日本の人権派弁護士や女権拡張運動家が、中韓のように夫婦別称になっていないのは、日本での女性蔑視の結果であると珍妙な意見を吹聴していた。中韓の実態を知らないのか、知ったうえで中韓よりも遅れていることを強調して、ミスリードしたいのか、首を傾げたくなるが、事実は正反対なのである。結婚しても差別されて、嫁ぎ先の家庭に入れてくれない。過去の李朝では儒教の教えに基づき、死別して未亡人になっても再婚は許されず、貞節な未亡人として国家表彰を受けた。自分の意思に反しても、一生涯亡き夫の喪に服した。中国では、纏足といった人権無視の風潮が社会の隅々まで広がっていた。中国本土ばかりか、本土の漢人が「化外の民」と蔑視した台湾の外省人にまで、その風習が持ち込まれていたのには恐れ入る。この奇習は知人の中国人女性によれば、美意識から発生したというが、性的快楽を得るためという説もある。孫文は、売買の対象である女性が逃げられないようにすることから、この悪習が弘まったというので、廃止した。この点でも、孫文は近代化の父として慕われている。将来、養い手になれる男の子はよろこばれるが、女の子の誕生は忌避され、今でも堕胎される。別称を余儀なくされるのは、女性の存在が認められたからではなくて、夫の家に実質的も形式的にも入れてもらえないからに他ならない。つまり夫婦別称とは、男系社会の埒外に放置されたという意味に過ぎない。欧米のように韓国の女性が自立して生活できる社会環境であればよいが、大半は離婚後、手に職なく苦しい生

活を送ることになる。

李朝独特の朱子学に基づく厳しい身分制と上下関係、過剰な血族主義、家族主義が女性ばかりではなく、等しく男性にも重圧を加えていたことは想像に難くない。「ハンプリ（恨を解く）」という精神療法は、今でも心理学療法士の重要な仕事である。表面的にやたらとこの観念を強調し、ひけらかす例はまれになったとしても、韓国人の心理の根底ではそれが基層をなしているように思えてならない。

具君という一橋大の留学生がいて、日本滞在中に懇意にしていた。彼は今、ソウルの大学で日本語や言語学を教えている。今夏、全州の南原を見学に行く時も、具君が同行してくれた。なおかつ南原出身で全州の役所に勤めている知り合いに連絡をつけて、一日中その人に車で案内してもらった。南原は「東便制」というパンソリ流派の本場であり、全州には朝鮮王朝の何人かの国王の肖像画が保存されている。この地方は田舎であるが、何か文化的な雰囲気を感じさせる。二人の案内の労には、今思い出しても感謝の念に堪えない。具君は、論者の親友である李教授の弟子という関係にある。ある日、恒例のように東京で話し合いの席を持った時のことである。その具君が次のようなエピソードを紹介してくれた。彼は当時、韓国社会の最新情報を教えてくれるありがたい存在であった。

韓国野党の代表的な国会議員が、「鬼胎」という言葉を使って、就任早々の日韓の政府のトップ、すなわち安倍首相と朴槿恵大統領を強く非難した。安倍首相の縁故につながる戦後の名だたる岸信介首相などと、朴現大統領の父親・朴正熙元大統領は親韓派、親日家としてともに緊密な関係を築いたと見られている。故朴正熙は日本陸軍の士官学校を出て、政界を引退したら日本の温泉地で逗留したいと希望を述べていたが、必ずしも親日家ではない。国交回復の道筋をつけながらも、愛国教育即ち反日教育を、ある意味で李承晩大統領より徹底させた人物である。日韓国交の開始にあたって、それだけ日本の潜在能力を高く評価し、脅威と危険性を嗅ぎ取っていたということだろうが、日本人に言わせれば、愛国教育はもっと視野の広いものであるべきだろう。というのは、愛国心の実質内容は反日意識なので、日本人の反応一つで、いつも自分たちの感情的な反応が左右される。日本が努力を完全に放棄しない限り、スポーツにせよ経済活動にせよ、百戦百勝で日本を打ち負かすことはできないからである。従って、韓国人はその都度、憤慨したり、怒ったり、ほくそ笑んだり、愉快になったり……を永久に繰り返す。それでは主体的な愛国心とは言えない。変にねじれた従属的な愛国心と言わざるを得ない。

日本人の中にはそれにまともに付き合う者がいる。女子バレーボールの日韓対決で永遠のライバルと持ち上げる。韓国人はその意識だろうが、わざわざ日本人が対抗心を燃やさせる必要はない。単なる他国との試合と思えばよい。アーチェリーなど韓国が世界のトップクラスに上り詰めている競技であればまだしも、韓国はオリンピックでメダルを取ったことがない。低迷女子バレーボールの時期に監督に就任した柳本前日本監督は、選手たちの合言葉が「韓国に勝とう」だと知って、それをやめさせ、世界に目を向けさせた。韓国人は何事につけ、日本を目標に、あるいは目

の敵にして頑張る。だからと言って、日本はそれに付き合う必要はないのである。それによって韓国が日本に親しみを増すわけでもない。つまり、当拙論の冒頭部で指摘したように、私たちの取るスタンスは感情的にのめり込むことなく、一定の距離感を保ちながら注視することである。福沢諭吉は韓国にのめり込み過ぎて、愛弟子の金玉均が暗殺されて、遺体は灰にして漢江にバラまかれた。それに激怒し、韓国の固陋頑迷さに一転、背をそむけて、「脱亜入欧」を唱えた。だが、どのような場合でも韓国に背を向けては物事が始まらない。その実態を冷静に見続けることが肝要である。

反日が徹底しているハングル世代は、日本の全共闘世代と似通っている。戦後日本でも愛国心が否定されて、その行き場がなくなり、代替物に親中ソ感情の裏返しである反米行動があった。それでいながら、米国文化に心酔した。象徴的だが、反日政策に突き進む朴槿恵大統領が日本製の運動靴を履いて、野球の始球式を行った。後で、マスコミの非難を浴びた。その一方で、韓国の身近なところでは日本式の料理店やビール、コンビニ、お握りなど日本のものであふれ、日本の社会や文化に憧れて、訪日客も途絶えるどころか、以前より増えている。一種の矛盾であるが、韓国人はその点についてはあまり頓着しない。全共闘世代とハングル世代、もしくは日教組と韓国教職員組合とは反日本国家で一致するので、長らく共闘を続けている。

朴槿恵大統領は就任時点では、反日的な政策を採るとは考えられなかった。現在の韓国は第二の経済危機に見舞われる瀬戸際にあり、日本からの資金援助やバックアップを必要としている。リーマンショックに際しても、経済破綻の秒読み段階だったのを、日本の財政力で支援した。その取り付けが李明博大統領の最初の仕事だった。未来志向を提唱して、訪日した。そして歓迎の宮中晩餐会に出席した。その背景の一つは、この難関を無事に潜り抜ける必要があったからである。韓国のGDPは世界16位近くには上がってきているので、先進国の入り口に差し掛かっている。しかしながら、金融関係でみると、慢性的な資金不足に見舞われている。金融界の常識として「先進国と後発国、それにアルゼンチンと日本」という言い方がなされる。アルゼンチンは20世紀初頭から農産物輸出で外貨を稼ぎ、世界一の債権国になったのだが、第二次大戦後からは徐々に債務国に転落していった。日本は高度成長期から90年代に国民が貯蓄に励んだ結果、長年の債務国から債権国（24年間世界一位）に転じた。80年代に韓国の関係者は、日本は黒字を貯め込んで何をする気なのか、黒字解消に輸入品を増やすべきだと世論に訴えかけた。韓国は儲けをすぐに浪費に使い、貯蓄意欲に乏しく、今でも借金を気にかけない。その浪費癖が過去に国家破綻を招き、IMFの資金援助を仰ぐことになった。現在はIMFによる韓国の経済構造への介入を推進した結果、外資や外国の株主に財閥が支配されており、利益の大部分は株主配当で持っていかれ、後はほぼ財閥の取り分となり、儲けはほとんど国民に還元されない。あらゆる経済活動を財閥が取り仕切る。その上、米国型の雇用形態が定着し、非正規労働者や失業者、正規社員の40歳退職などの暗雲が社会全体を覆っている。金大中大統領は経済破綻を3年間で脱却させたのだが、実を言うと、輸出振興による赤字克服策のために財閥強化が図られ、それに伴う外資の導入とその支配が韓国

内で定着した。国民は1人当たり年収の160％の借金を背負っている。米国のサブプライムローンのように担保がなくても、購入すべきマンションを担保に提供して、購入できる。だれもが借金で得たお金で浪費を繰り返し、学資を賄い、資産用のマンション購入に励んでいる。韓国のマスコミはかつて「外華内貧」という適切な表現を造語したが、まさしく韓国の実状をよく言い当てている。

当初、朴槿恵大統領が日本重視の政策を採ることも予想されたと述べたが、それに反発して、野党の代表者は「鬼胎」を持ち出して、両首脳を非難したのだった。この政治家は現在の日韓関係のことを考えれば、つまり攻勢を韓国のほうから仕掛けている現在では、両国の友好を演じる両政権は最悪だと感じたのだろう。そこで司馬遼太郎の「鬼胎」を持ち出したというわけである。両人は、この世に生まれてくるべき人間ではなかった。日本の司馬遼太郎は、このような誕生する資格のない人間のことを「鬼胎」と呼んでいると語ったそうだ。

中国では古来、「鬼」は死者を意味し、日本でも物故することを「鬼籍に入る」と表現する例はあっても、そのような言い方で人間を誹謗する発想はない。死んだ者に対してと同様に、誕生した人間に対しても、そうした鞭打つ言辞を弄することは日本人的ではないので、司馬が、ある種の人間のことをそのように言っているとすれば、その限りにおいて司馬は日本の典型ではない、決して日本人ではないと説明しておいた。この世に生まれるというのは、誰であれ、何らかの不思議な縁に結ばれて誕生するのであって、現実に誕生した以上は、お前は生まれるべきではなかったなどとは、本来の日本人ならそうは思わない。誕生したからには、何らかの大切な存在価値を認める。生存している人間を前に傲慢にも生まれるべきではなかったなどと言う人間は、自己のことを知らない不遜傲慢な人間である。日本の社会では、親鸞の「悪人正機」説や熊坂長範の生き方が広く支持されて、宗教や能楽などの芸能を通じて、実践的に子子孫孫に教えられてきた。

「鬼胎」は何か日本人らしからぬ考え方であるので、妙に引っかかるところがあった。手すきの時に調べてみると、その韓国の有力政治家は直接、司馬遼太郎の本を読んだわけではなかった。在日韓国人の姜尚中氏が執筆した本の翻訳本の中に、載っていたとのことだった。なあーんだ、そのようなことかとなって、一件落着した。司馬遼太郎の本に「鬼胎」の言葉が載っているかどうかは調べていない。載っていたとしても、どのような文脈で使われているのか、牽強付会の可能性もある。一考の余地があろうが、無意味なのでそこまで深入りは遠慮した。件の野党の有力者は、朴大統領には誹謗中傷を謝罪したが、安倍首相には何らの対応もしていない。一国の最高責任者を「鬼胎」などと呼ばわるのは、代表に選んだ国民を愚弄し、侮辱するものである。相手は独裁者ではないのだから、そういう表現を使うのは、実に品位の欠ける行為である。姜尚中氏は、かねてより在日の立場を有利にするために、共同体構想に賛意を表している。アジアの先進国として中韓に先駆けて、国境の壁を低くすべきだ、あるいは将来的に自由往来をできるようになくすべきだと、常々主張してきた。民主党政権誕生で外国人参政権やパスポート審査の廃止、外国人単純労働者の禁止解除などが、日本でいよいよ具体化されるとでも思っていたのであろう。「国

民」の代わりに「市民」と呼ぼうと提案した民主党が、政権から転落したことがよほど悔しいのかもしれない。

韓国の歴代大統領は就任すると、日本に対して未来志向で行きたい、過去のことはけじめをつけて、もう問題視しないとする。その代償に経済援助や技術移転、謝罪表明などさまざまな要求と条件を出してくる。そのたびに日本政府は騙されて、妥協し、これで過去と決別して、未来の協力や友好を手にできると考えた。しかし、日本との友好で始まった対日外交は、いつも反日で終わる。前大統領の李明博大統領も最後には反日カードを切った。係争地の竹島に韓国大統領として初めて上陸して、日本の面子を潰しにかかった。これはロシア大統領が北方領土を視察して、何ら手を打てなかった当時の菅直人首相のだらしなさを見ていて、日本は恐れるに足らず、という気持ちになったからである。菅首相は、駐ロシア大使を召還した。普通、これは国交断絶および開戦のシグナルとなるが、東京への召還は見え透いたただの抗議のポーズで、間をおかず再度大使はモスクワに戻った。諸外国に日本の政治家の能力が見抜かれた。李大統領はさらに罪人としての天皇の謝罪要求をした。訪韓したいのであれば、通り一遍の謝罪は要らない、独立闘争の志士たちの墓前で跪いて歩み寄り（韓国の罪人のポーズ）、謝罪すべきだと述べた。また日本を、つまり日本国民を我々は制圧したとも発信した。日本国民の住民基本台帳の1/3については、ソフトバンクと韓国の合弁会社がコンピュータ管理を請け負った事実を指している。それは最近、起こったベネッセの情報漏洩事件とは比較にならないほどの重大な問題だが、不思議に日本のマスコミはそれを無視している。北朝鮮による拉致事件を考えれば、外国の国家権力が日本国民を制圧しているというのである。国家権力の凄さ故にこの意味するところは重大だが、今は触れない。「綸言、汗の如し」である、李前大統領の言葉で一気に日本側の親韓ムードが冷え込むことになった。

菅首相は韓国人からの献金問題により国会で追及されて、あわや辞任というところまで追い込まれていた。その時に東日本大震災が起きて、その不適切対応の責任を問われて[6)]、やがて内閣が倒れたのは周知の事実である。民主党としても親韓政策を強く推進していた。韓国の要請により菅政権は、「朝鮮王室義軌」を引き渡すことにしたのは、その具体化の実現例である。要請された分量よりも余計に、要請されていないものを追加して引き渡したが、感謝の一言があるわけでもなかった。フランスの場合は、「朝鮮王室義軌」のすべてを実質上返還した。1866年の「丙寅洋攘」で仏艦隊が江華島に侵攻した折に、書庫から掠奪して、それを母国に持ち帰った。韓国の高速鉄道の敷設にフランス方式を採用する見返りに、フランスはそれを永久貸与という形で返還した。当時、日本も新幹線の売り込みを図ったが、最終的に日本のものは技術に欠陥があるというので、不採用になった。その理由を知らされて、日本の関係者は苦笑いをした。それはとも角、これで半島と北部九州との間に海底トンネルを通すという構想も立ち切れになった。それは、一部の日本人と韓国人とがかなり前から提唱していた。韓国側では巨済島まで掘り終わっていた。後は海底から日本本土に掘り進むだけである。ユーラシア大陸を横断して欧州までのルートが確

保されるとの触れ込みだが、実現して、何か気に喰わないことがあると、交通遮断の挙に出ることは目に見えている。韓国に、あるいは北朝鮮に、中国に、ロシアにいわば外交上の切り札を一つ与えることになる。日本はどこも海岸に接しているので、船を使ってすぐに外洋に出られる。別に無理して大陸との間に海底トンネルを通す必然性はない。逆にそうなると、ますます地域が廃れ、東京一極集中が一層加速するだけである。半島に日本の新幹線が走らなかったのは幸いだった。日本所有の「朝鮮王室義軌」は本物ではなくて模写物であり、ソウルの街頭で売っていたのを朝鮮総督府が購入した。日本の新聞報道ではこの点を明確にしないために、フランスと同じように掠奪と思いがちである。しかし、この引き渡しが先鞭となって、次々と日本にある韓国の文物を引き渡すように要求するのではと思っていたが、案の定そうなった[7)]。日本の政治家がこのような愚挙を演じるに当たって、ハニートラップやマネートラップに引っかかっていないとすれば、心底から愚かなのであろう。

裏マニフェストで目立たないように、民主党は中韓を中心とする移民を2千万人募る政策の実行を約束していた。政権に就いたとたん、裏マニフェストが意図的に表に出された。多くの国民には寝耳に水といった心境であったろう。そうした事態が実現に至ると、絶えず社会で混乱といがみ合い、心理的な不安と直面せざるを得ず、日本社会の良質な面と思われる穏健な平和と安定が失われるであろう。欧米の移民問題がよい例である。現在の日本では、賢明にも単純労働者は認めないが、技術者などは受け入れている。底辺層の外国人が流入してくると、必ず貧困に追いやり、絶望的な状態で不平不満が爆発する。

菅首相の側近議員が、韓国で竹島の韓国領宣言文に公の場で署名をした。帰国後、よく分からないまま勢いで署名したと弁解していたが、署名することの重さは借金の保証人のことを思えば、すぐ分かる。どうかすると保証人のほうが、自分の財産で他人の借金を肩代わりしなければならない。全財産を失うばかりか、悪くすると、自分に借金が残るかもしれない。法治国家で普通の市民生活を送っている人であれば、契約や署名の重大さを知っているはずである。いや、日々身をもって知らされ続けている。それを理解しないとは信じがたいほど世間知らずの議員である。親韓的に近づけば、相手もこちらに親しく接すると思うのは間違いである。政権の対応のまずさで日本は舐められたということである。日本絡みなら、何をやっても許されるという雰囲気を作ってしまった。李明博大統領は、野田首相の親書の受け取りも拒絶した。日米開戦前夜でさえ日本政府は、ルーズベルト大統領の親書を受け取った。論者は韓国人にこういったことを話すのだが、どうもピンとこないようだ。李大統領にしてみたら、盧武鉉大統領と同じく、外交戦争を仕掛けているつもりなのである。そういう言葉を韓国政府はよく使っていた。李大統領は少年期まで日本にいて、「現代」財閥で頭角を現した人物である。つまり実利重視の経済界から出た。だから、歴代大統領のように、「最初は融和政策、最後は反日政策」といった変節はもう起きないだろう、と判断する日本の関係者が多くいたが、それは甘い考えであった。

さて、現韓国大統領の朴槿恵のことであるが、この場合は最初から反日カードを切ってきた。

尹外相は筋金入りの強硬な反日家であり、政策決定に大きく関与しているという。だが、それだけではない、80年代の韓国人留学生の見立てによれば、日本人というのは反日教育の中で卑劣な極悪人で登場して、横暴で居丈高な粗っぽい人間だと想像していた。ところが、気の弱い女性のような人間である。初回は駄目でも何回でも要求していくと必ず折れてくるという。印象深く論者の耳に残っている日本人批評である。この事態を日本側から解釈すると、伝統的に問題解決の手段として痛み分け、譲り合いを当然視するので、ついつい相手の要求に従うようになる。日本人同士なら、謙虚にお互いに譲歩し合うのであるが、韓国側はそういうことはない。あの手この手を使いながら、とりわけ植民地支配の贖罪意識を強く刺激しながら、どこまでも要求し続けると、最終的には日本人は相手の要求を丸呑みするのである。野田首相もそのパターンに嵌るのではないかとハラハラして、動向を注視していた。あのまま政権が続いていれば、慰安婦問題について日本の完全譲歩で終わるはずであった。実際､事務レベルで交渉が妥結寸前までいっていた。国家間の賠償問題は決着していたので、民間のレベルで救済措置を行い、韓国以外は解決し、当時の金大中大統領もその措置に納得し、韓国でも60人ぐらいはお金を受け取った。それ以外は韓国の反日団体が阻止をして、そのままになっている。

今回は朝日新聞などの報道を受けて、日本の国家権力の関与を追及する挙に出た。しかしそれは嘘であった。嘘情報に基づく話を、政府が嘘と思いつつ認知し、不当に日本が貶められながら国家賠償をする。賠償行為は、嘘情報を真実と認めたことを意味する。それをきっかけに日韓基本条約の賠償決着済み条項を打ち破り、その後はいろいろな名目を立てて更なる賠償を求めてくることになる。親韓的な民主党が政権の座にいるあいだに、強引に要求してしまえ、と李大統領は考えた。日本側からすると、総選挙のための国会解散で野田政権は辞任し、事なきを得た。安倍首相は理不尽に譲歩しないので、改めて朴槿恵大統領やその他の韓国人は驚いているのではなかろうか。朴大統領は、毎月20万ウオン（日本円で2万円強であり、韓国の物価は現在、日本とほぼ同じである。）の保証年金を、すべての高齢者に配ること、多重債務者救済のために特赦令を出すことなどを公約して、当選した。いいろいろと日本からの償い金が取れれば、その原資に充てられる。反日強硬策を取りながら、中国とも連携して首脳会談開催の前提条件を呑ませることが、重要な外交案件なのである。

中国の習主席は、気骨のある安倍首相に戸惑って、彼はどういう人間なのだろうと日本の経済人に聞いているそうだから、すぐに筋を曲げて相手の意見に同意する日本人と違うことに驚いているはずである[8)]。欧米のテレビに安倍首相はたびたび出てくるようだ。それだけ存在感を示し、日本の国際的地位を高めている。河野洋平元官房長官が北京政府の首脳に会った時、台風で台湾の空港に緊急着陸しても、私は飛行機内から一歩も外へ出ませんでした、と自慢げに話したという。これなどは近年の典型的な日本人の言行といえる。以前から台湾と日本政府の交流はやめるべきだ、と強い要求が靖国参拝以上に、北京政府から出ているのを踏まえた河野氏の発言である。よくやったでしょうと言いたげだ。追従は一見、相手が喜びそうだが、その実は外交的には侮蔑

され、軽んじられる原因となる行為である。そのことが日本人には分からないのである。特に中韓などの大陸国はその思いを強くする。小沢一郎氏は、主席就任前の習近平に頼まれて、強引に天皇に引見させた。そこまでの関係であれば、もめている緊迫の尖閣問題で仲介の労をとれると思うが、結局は内弁慶で外では体よく利用されているだけの存在であり、国内向けには外でも実力者であるふりをする。菅元首相はAPEC横浜大会で胡主席と型通りの会談をしてもらうことに汲々としていた。その実現には、尖閣諸島で日本の警備艇に体当たりして逮捕された中国人船長の釈放が条件になっていた模様である。その成功に味をしめて、今でも条件を突き付けて、しかじかじかのことを受諾しなければ、会談はしてやらないといった姿勢に出る。日本の一部マスコミも、日本が孤立している、すぐ会談を開くべきだと騒ぐ。中韓に籠絡されているのか、マネートラップ、ハニートラップに陥っているのか、あるいは若いころの共産主義の信念に基づくものかどうか知らないが、会談をすること自体が目的のように、国民を教唆している。

朴大統領は、同じく従来の日本人観に基づく論法で頑として首脳会談を承諾しない。たとえ米国からの要請があろうとも、断り続けている。とうとう日本の植民地支配について、この「恨」は千年たってもなくならないと公言した。元寇ですら700年しか経っていない。では、日本人は後300年間も中国や韓国を恨み続けなければならないのか。そのような行為は自分を貶めるだけである。水に流して、もっと前向きに生きようとするのが日本人である。日本人にはそのようなことには耐えられないし、その気もない。秀吉の朝鮮出兵では、「元寇の仇を討て」が合言葉となったが、そこにどれだけ真剣味が込められていたかは疑問である。半ば出陣の景気づけといった意味があったのだろう。といっても、元寇からそれまでの間、恨み続けていたということはない。一般的に「恨み骨髄」の精神は、和辻哲郎の指摘するように淡白恬淡とした日本人には無縁である。「恨」という言葉は、韓国人に重要な観念である。今は韓国人の口からめったに出てこなくなった。だが、民族の刻印が消えたとも思えない。彼らの言動や振る舞いを仔細に観察していると、それが彼らの行動原理の一つとして強力に作用をしていることは否めない。

４．事例研究のサンプル―元寇の問題

すでに元軍と高麗軍の連合軍の来襲中から、日本の総大将の執権・北条時宗は、日本の戦死者のみならず、高麗と元の戦死者を弔う目的で、鎌倉に菩提寺を建立して、千体の仏像を彫らせた。そして日夜、位牌を前にその冥福を祈っていた。有名な志賀島では、漢王朝が奴国に下賜した金印が出土した。その場所から程遠からぬ所に、蒙古塚がある。台風の来襲で元の軍船が多数、荒波にのまれて沈み、破損した船は陸地に乗り上げた。何万もの兵士が海辺で船の修理に勤しんでいた時に、西国の鎌倉武士たちが馳せ参じて、殲滅戦を挑んだ。運に恵まれず、戦死した亡骸を地元の人たちが目にして、憐れみを感じ、その場で弔いに蒙古塚を築いたのであった。もちろん、対馬や壱岐では島民と防人の殉難の碑が築かれた。残虐の限りを尽くした元・高麗の将兵に対してまだその怒りも冷めやらぬうちに、このように寛容な態度を示した。宋の将兵は命を助けたが、

遠征を主導した元と高麗の捕虜はすべて打ち首に処せられた。そのことは、善悪いずれにせよ、仏教の因縁性起に基づくものであると、相対化して考えられたからである。人間は現世でのしがらみや地位、抜き差しならぬ立場、行きがかり上、逃れられない宿縁に陥る。各人の意思、行為行動はそのような所に立脚している。宿業ともいえよう。しかし現実界のけじめがつけば、すべて成仏すると考えるのである。この思想は、天台本覚思想の「死者悉皆成仏」から出ている。この思想は平和志向の教理を持つヒンズー教や仏教が発祥した国土、インドにも存在しない。日本特有の思想である。それ故、おそらくは仏教伝来よりももっと遡ることができよう。

日本にあっては、古くから凶暴な自然の猛威や荒ぶる神、鬼神も、鎮魂によって自分たちを守護してくれる存在、現世の利益をもたらしてくれる守り神に変貌を遂げるのである。岩木山の麓に広がる地域は、恐るべき異形の鬼が協力をしてくれて、田の灌漑施設を作り上げたという伝説が残り、神社が建てられている。あるいはまた学問に造詣の深かった有力政治家・菅原道真は冤罪で失脚し、大宰府に流された。死後、京の都では、疫病が流行り、天変地異が頻発し、田畑は凶作に見舞われた。恨みを残した道真の祟りだと考え、天満宮を造営し、その霊を鎮めた。現在は、道真の知力にあやかろうと、多くの受験生が全国の天満宮に参拝している。これらの事例は簡単に言うと、荒魂から和魂への転化を示している。

次に近代の類似した具体例を韓国絡みで挙げると、日本海海戦の直前のことを挙げざるを得ない。決戦が迫るなか、猛訓練を終了した連合艦隊は、鎮海湾で一日千秋のようにバルチック艦隊の到着を待っていた。その間に東郷元帥以下の幕僚が、朝鮮水軍の英傑・李舜臣の霊に敬意を表し、なおかつ戦勝の加護を祈念した。李将軍は秀吉の水軍を打ち破り、苦しめた韓国の英雄である。

最近、この李将軍が日本水軍を打ち破った戦闘をテーマにした映画『鳴梁』が、韓国で大ヒットを飛ばし、大袈裟だが国民の４人に１人が観たという。論者も今夏、ソウル東大門区にあるシネコンのような映画館で観賞した。今韓国は経済不況や就職難、失業者の増大、財閥支配の寡占化、お馴染みの政治腐敗、また貿易の利益は外国の株主に吸い取られ、直近の輸出は停滞するなど、国内は手詰まり状態であり、閉塞感を打破する英雄を待望する機運が映画をヒットさせている。つまり世直しの英雄の待望論がその背景にある。だが、政治権力が集中する大統領制だといっても、スーパーマンのような英雄が一挙に懸案を片づけてくれるわけでもない。発展途上国から先進国入りを遂げたとすると、そこからがまた、今までの数倍の努力と知恵を結集しなければならない。懸案の解決は、国民各自の心掛けにかかっているといえよう。それが近代の国民国家というものであろう。

そしてこれが反日映画であることもヒットの要因である。日本を打ち破って、気分爽快になる。後は何も残らないとしても……。ここに見られる事態は、朴槿恵大統領が日本に強硬な態度で臨むことで、支持率が上がり、韓国民が晴れやかな気分になっているのと同じ精神状態である。映画の冒頭を飾る場面は、生首を槍刺しにした映像で、日本人の残虐性をアピールするところから始まる[9)]。物語の結末は、李将軍が海戦で勝利して終わる。その後、場面が切り替わって、幕を

閉じる最後の場面は、大口径の鉄砲を肩に担いだ日本兵が霧の中から現われ、観客に向かい狙いを定めているところで終わる。今まさに韓国を狙っているぞ、警戒心と恐怖心をもって終わるように、構成されていた。日本関連の描写では、鉄砲隊の作法が実際とは違うこと、「放て」が「撃て」と近代日本語の用法になっていたこと、日本の武将が韓国語訛りの発音になっていたこと以外は、大体本当らしく作られていた。続編がつくられるようである。

李舜臣将軍は、日本軍によって祖国の土を占領された状態で戦い、勝利した英雄である。東郷司令長官は、英国のネルソン提督や自分よりも困難な状況に置かれて、立派に戦った点を高く評価した。ただ慶長の役で日本軍が引き上げる時に、李将軍はここぞとばかりに後方から攻めかけて、逆に日本軍の鉄砲に撃たれて死んだ。英雄というには無様な最期ではあったが、それはとも角、憎い日本の軍人が敬意を表し、戦没した方向の海に向かって鎮魂の儀式を執り行う。なおその上、日本海軍の勝利を李将軍に祈念する。およそ大陸の人間にはあり得ないことである。こうした行為は理解の外にある。私たちにとってはむしろ、この鎮魂の儀礼が大事なのである。大陸側では、敵はどこまでも敵である。千回の侵略を受けて、一回も侵略はしたことがない、と語る半島の人間にとって、そのような生ぬるい対応をしていたのでは、たちまち生存が危うくなる。敵と見なす相手には徹頭徹尾、憎悪を向けるのが中韓の民族性である。これとは反対に、かつての敵であっても、日本では事が一段落すれば、敵味方の関係が解消される。昨日の敵は今日の友である。「恩讐の彼方に」は韓国との関係ではなかなか通用しがたいことを、日本人は知っておくべきであろう。言い換えれば、対日関係に留まらず、広く韓国人の行動原理の根底には、その一つとして千年にわたる「恨」が伏在しているのである。

元寇の際、松浦党の根拠地は元と高麗の連合軍に壊滅させられた。松浦の軍勢は博多湾で防備の任に就いていて、不在だった。他の場所も同様だが、連合軍が上陸した所は残虐の限りを尽くして、地元民はひどい災厄に遭った。戦後、松浦党の関係者は、捕縛されて大陸に連行された親兄弟姉妹、子供を捜して、半島や大陸に赴いた。そうした捜索の頻繁な往来の中から海外への視野が広がり、14世紀の前期倭寇が生まれたともいう。近年、明らかになったことは、前期倭寇は対馬、松浦、五島列島などの日本人だが、16世紀の後期倭寇ともなると、必ずしもそうではない。明の海禁政策を犯して中国人が大挙、集団で海に出て、日本人になりすまして、海賊行為に及んだ。種子島に漂着して鉄砲を伝えたポルトガル船には、五島列島を根城にした中国人倭寇の大物親玉・王直が乗船していた。また社会に不平不満を抱く朝鮮人らが和服を着て倭寇に見せかけたことが、『朝鮮王朝実録』に報告されている。こうした勢力の実態は、中日韓の中央政府の威光が行き届かない辺境の海を股にかけた海洋族の活動といってよい。

統一新羅時代に対応する平安時代は、朝鮮半島からやってきた海賊が猛威を振るった。博多沖や九州一円、瀬戸内海に出没し、官給品や食糧、人を強奪して回った。藤原摂関家が支配する京の中央政府には、検非違使ぐらいで国軍というものがなかった。何か月もなす術がなく、荒らすに任せる他なかった。ついには河野水軍が瀬戸内海の海人族の名誉にかけて、必死に追い詰めて

討ち果たしたりもした。

海賊行為は日本倭寇の専売特許ではなかった。現在、高校の教科書は驚いたことに、世界史が必修で日本史は選択科目であるそうだ。そうした歴史教育からは、こうした真実は見逃され、放置しておくと、やがて想像もつかない出来事、この世に存在しなかった虚構となるであろう。教科書の検定条件には、鈴木内閣以来、「近隣諸国条項」が付帯規約となって強力に作用しているので、日本の悪業はどれだけ教え込んでもよいが、中韓の悪しき対日行為は教えてはならないことになっている。従って元寇のことは、韓国の教科書並みに高麗軍は何ら危害を加えることなく、海上で台風のために引き揚げたような扱いとなるかもしれない。

教科書検定事件が起こったのは、宮沢官房長官の時である。共同通信社の日本人記者が、文部省検定で「侵略」を「進出」に変更させていると、事実無根の情報を国内外に大々的に発信し、それが作為的なのか偶然の誤解なのかは明らかでないが、そのために中韓政府が騒ぎ出した。それであまり深く考えずに、善処を約束して、「近隣諸国条項」を設けた。これは廃止の方向だと、ついこの間の新聞に出ていたが、今後とも未来志向のためを口実に、それ式の扱いを求めてくる可能性が大である。中国との関係は、日本にとって経済的な実益が大きいので、経済が中国の外交上の切り札になっている。一方、韓国にとって、外交の切り札は過去の歴史認識しかない。いつでも、従ってこれからも「未来志向の日韓関係」と言いながら、過去のことにこだわって、日本を追い詰める。そして経済援助やら償い金やら技術援助やらを得ようとする。それで韓国人は道徳的な優越感に浸れる。また日本政府は誠実にそれに応えようとするから、歴史問題を歴史学者の場に移そうとせずに、ますます韓国の政治は歴史認識を握って離さない。毅然としない日本側の対応も問題をこじらせる一因である。

ソウルのサッカー場で「歴史を正しく認識しない者に未来はない」という垂れ幕が掲げられて、韓国の観客が気炎を挙げたことがあった。スポーツに政治を持ち込む神経はどうかと思うが、垂れ幕のスローガンは正しい。ただその歴史認識が曲者である。韓国人にとって都合のよい主張が正しい歴史認識なのである。「正しい」とは韓国人にとって道徳的な意味での正義であって、歴史の真実のことを指すのではない。その意味の歴史は、ハングル世代に教えられていないし、漢字が全く読めない世代なので、わずかに残る韓国の古文書すら読めない。現代語への翻訳家が韓国に不都合な部分を訳出しなければ、あるいはまたわざと捻じ曲げて誤訳すれば、今の韓国人にとってはその部分の真相が消えて、ないに等しくなる。伝統的に宗主国・中国の漢字が最高の文字なので、権威づけようと思ったら、漢文で書かれるのが長年のしきたりだった。世宗がハングル文字を普及させようとすると、両班の間で、宗主国の明が怒るかもしれない、と心配する発言が出た。従属的な意識を打破するものがハングル文字なのである。日本統治時代から戦後の80年代まではハングル文字混じりの漢字表記だった。80年代当時は、日本語のテニヲハに相当する文字を確認できれば、韓国語を知らない日本人にも内容がかなりの部分まで理解できたが、今では本や新聞、街頭の表記に至るまで表音機能のハングル文字だけで表現されるので、韓国語を知ら

ずには理解が不能となった。裏返すと、漢字が出てくると、ハングル世代には意味が分からないことを意味する。

知り合いの韓国人と議論になった時、論者は歴史の事実の追求という観点から発言し、真実の大切さについて、事あるごとに口を酸っぱくして主張した。また他の日本人からも盛んにそのことを指摘されるようだ。それでやっと理解したようだが、せいぜい日本人の心構えが分かった程度かもしれない。日本は悪行を重ねた、何事もこの明白な前提を出発点として踏まえることが、「正しい歴史認識」だと思い込んでしまう。それに反する事実や細かい歴史的な事実などは一切関係ない。日本人は些細なことばかりにこだわる。日本からすると、事実でないことを認めるわけにはいかない。朱子学のイデオロギー的な悪弊がこのような所にも出てくる。教科書の共同研究が何回か行われているようだが、韓国側は自分たちの見解をゴリ押ししようとするだけで、歴史の真実を究めるといった態度はとらない。従って共同研究にはならないらしい。歴史上の事実は何ら関係がないのだから、大体は想像がつく。それと日本のことを充分な知識として持っていないと聞く。近代になって「関東軍」という言葉が出てくるが、関東平野のどこにいた部隊ですか、宇都宮ですか水戸ですか。太平洋戦争では空軍がどこにいたのでしょう、所在が不明ですが、などと呆れ返るような初歩的な質問が出るようだ。参加者は実につらく無駄な議論となることだろう。そこでお座成りな対応をすると、向こうの思うツボである。「真実を求めて」を追究する姿勢の貫徹が求められる。

高麗軍８千名ほどが上陸して、元軍とともに博多の町を焼打ちにし、住民に暴虐を働いた。金方慶率いる高麗軍の上陸地点は百道原であり、現在はソフトバンクの球場が付近にある。韓国出身のプロ選手が活躍しているので、韓国人も試合の応援に駆け付けるが、この事実を知らない。日本の若者も知らない。

３年前に保育学会に参加して、九州北部の幼稚園関係の大学から来た先生と話す機会があった。とても有意義な時間で、向上心を満足させてくれるような話であふれていた。その中で、気になったことが一つあった。県の指導で、「桃太郎」の昔話は遠慮するようにとのお達しがあったというのである。そういえば、鬼が島の鬼退治は、韓国人にとって「倭寇」の掠奪を瞬間的に思い起こすらしい。赤ちゃんの成長する姿と子供の勇気がこの話に込められているので、是非とも子供たちには聞かせたい昔話である。おそらくいろいろな所で韓国人や彼らに寄り添うことを無上の喜びとする一部の日本人に抗議され説得させられて、あるいはトラブルを事前に避ける意味で「桃太郎」物語の語り聞かせはやめておくように、達しをだしたのであろう。それを聞きながら、日韓関係の問題ではないが、「グリム童話」が子供に残虐性を植え付けると見なされて、同じように厄介な扱いになっていることを思い出した。「グリム童話」の正当性については、「白雪姫」の話をめぐって詳述した所である[10)]。事は子供の成長に関わることなのだから、浅薄な考えで自粛的に対応しないことが望まれる。大阪の町を発展させ、繁栄に導いた豊臣秀吉を讃えて、毎年「太閤祭り」が催されている。在日韓国人はこれをやめさせようと、執拗な抗議を行っているのも、

同類の不当な働きかけである。「坊主、憎ければ袈裟まで憎い」のたぐいである。秀吉の朝鮮出兵が、彼の全業績を物語るものではない。日本における太閤秀吉の魅力と人気は、身分の不利を乗り越えて、才覚ひとつで天下人になった稀有の才能にある。

四国高松の沖合３キロぐらいの所に、女木島と男木島が接するように、瀬戸内海に浮かんでいる。女木島は昔から、伝説の桃太郎が退治をした鬼が島に比定されている。論者の生まれ故郷である高松の港からは連絡船が、といっても当時は小型のポンポン漁船と同じ規模のものであるが、鬼が島との間を行き来していた。夏にはキャンプ客や海水浴客で賑わいを見せていた。瀬戸内海の風景でよく見かけるように、一つの山がほとんど四方八方になだらかな稜線を描いて、急激に海辺になだれ込んでいる。その山頂に広い洞窟が築かれている。そこは海賊が住み着いた半ば人工の洞窟である。頂上からは周囲の瀬戸内海が一望に見渡せる。海賊にとって立地条件に恵まれた景勝地である。往時、通過する船をいち早く発見しては、漕ぎ寄せて、通行税と安全な航行料を名目に船の運搬荷からごく一部を貰い受けた。ＪＲ高松駅から数駅、西に行った場所に、「鬼無」という駅名があり、その地名は、桃太郎が鬼たちの逆襲に遭い、一人残らず返り討ちにしたことに由来する。雉や猿の墓もある。「桃太郎」伝説の一つの場所であることは確かである。

最近、週刊誌を読んでいると、この鬼が島の紹介記事が掲載されていたのを偶然見つけた。東南アジアからさらってきた女性がいたように書いてあった。そのような話は聞いたことがない。想像力たくましく海賊、すなわち倭寇、すなわち東南アジアと連想が及んだのであろう。記事の執筆者は倭寇の強烈な印象に毒されて、何となく気分で虚構を思いついたのであろう。この「何となく」が情報にとって曲者である。表現の自由とはいえ、この軽率ぶりは時節柄、感心できる行為ではない。対岸の吉備国は黍栽培と黍団子、桃栽培で有名である。そこの伝説によれば、この地方で暴れまわり、朝廷への供え物を横取りしていた温羅という朝鮮渡来の海賊（あるいは百済の王子とも言われる）を退治したという。地元の伝承にも載っている話であるが、退治した武将が吉備津彦、つまり桃太郎であるとする伝説が加わった。ここでは詳論を避けるが、吉備津神社、その「鳴釜神事」、鯉喰神社、血吸川、鬼ノ城、鬼ケ岳の渓谷など関連の伝説が、話を盛り上げてくれる。あるいは『播磨国風土記』には渡来の新羅人・天日矛の軍団が上陸し、在地の豪族と激しく戦闘を繰り返しながら、最終的には日本海側の但馬国に定住する様子が断片的に書き残されている。おそらくこれは、統一新羅の海賊よりももっと古い軍事集団であったろう。韓国人が瞬間的に思い込むのとは逆で、『桃太郎』の昔話は瀬戸内海沿岸を朝鮮由来の集団が村を襲い、それを在地の桃太郎が征伐した。そして強奪されていた宝物を奪い返す、といった内容にも読み取れる。

真実から遠ざかることは、決してよいことではない、教科書で教えればいいのだろうが、為政者や識者は友好発展のことを考えれば、真実追究よりも友好的な態度の醸成でいいと思っているのだろう。歴史軽視である。言うべきことも言わず、黙認することが、友好にとって一番大切だと、どうやら考えているようだ。しかし日本人の常識に反して、特に韓国人とは真剣に論争をす

ることが重要である。無視したり黙ったり深入りの論争をさけたりする場合、相手はそれこそ軽視され、見下され、悪くすると、馬鹿にされたような気分になってしまうのである。

以上、ノートやメモ類にしたためた内容を確認しながら、あるいは記憶の淵から取り出しながら、気の向くままに日韓関連の事柄を列挙していった。結果、判明することはいかに出鱈目な思い込みでお互いに向き合っていることか、といった驚きであろう。虚心坦懐になる前に、日韓と言えば、すぐに何か特別の感情を紛れ込ませている。サッカーのワールドカップ共催で日本の政治家や識者の間では、日本の成績が韓国を上回らなくてよかった、といった声が出た。そうでないと反日気分が一気に盛り上がっただろう、反日暴動に発展するかもしれなかった。このような遠慮気味な奇妙な意見が罷り通る。韓国が先に立候補したのに、日本が強引に横槍を入れていったなどと、事実に反することを身近な日本人が言いふらしていた。だれが口コミ操作をしているのか、事実は逆である。サッカーは韓国人にとって国技のような自負心があった。日本の立候補を聞きつけて、対抗心を燃やし、後追いで韓国が立候補した。立候補したはいいが、韓国は国内で賄うにはサッカー場の数がとても足らなかった。共催で半分のサッカー場でよくなった。それでも新設のサッカー場を作り始めたが､経済危機で資金不足に陥った。日本が資金を貸すことで、ようやく水原のサッカー場が間に合った。日本が立候補選挙に敗れても、韓国は早晩、大会開催を返上した。日本の親韓的な政治家は、韓国の恨みを残さなかったので、よかったと胸を撫でおろした。いいではないか、それで韓国人が怒ろうが反日暴動が起ころうが、日本大使館が襲われようが、姑息な対応をするよりは、余程ましである。一時の解決が、のちの火種になる。将来の若者がその事実を知らなければ、不当な日本人がゴリ押ししたという屈辱感を倍加することになりかねない。ここでも事実が何よりも大事である。このような例はたくさんある。日韓の誤解が埋まらないはずである。

例えば、こういう事例もある。2011年ＮＨＫエンタープライズ制作のＤＶＤ『日本と朝鮮半島2000年』の第６回「蒙古襲来の衝撃」を、大学の情報メディアセンター内で観ていると、日本侵攻をフビライに進言した人物がマルコ・ポーロだと決めつけていた。そうではなく高麗の王太子が、義兄であるフビライに「日本はいまだ陛下（フビライ）の聖なる感化を受けておらず……」と進言したことが元寇への決定的な要因となった。高麗は元から塗炭の苦しみを受けていた。日本侵攻を進言することによって、自国への圧力を軽減し、併せて自分が日本の支配を担当しようと思ったのではないか。中国の正史『元史』にも『高麗史』にも、他のどこにもマルコ・ポーロのことは書かれていない。イタリア・ヴェネチアの商工会議所には名前が残っているらしいが、中国にでかけたかどうかは分からない。単にイタリアで商人や旅行者たちの見分をまとめたのかもしれない。コロンブスなど欧州での影響力のあった旅行記だからと言って、著者の元訪問が本当だとは即断できない。その内容もマルコ・ポーロの目撃談とするには証拠がないのである。かりに元の都を訪れたとしても、一介の辺境のイタリア商人が宮廷内に入れるかどうか、ましてフビライに謁見できるかどうかは大いに疑う価値がある。いつか、だれかがこっそりと誤情報を流

し込んだのではあるまいか。とに角、謁見した証拠の記録がない。正史その他の記述がない以上、フビライの日本遠征決定への影響力云々は問題にできないと考える。この日韓のＤＶＤシリーズは韓国の都合の悪いことは触れず、何か事実を抜きに仲良くみたいな発想、従って、とに角日本が文化を授かりながら罪を犯した、という発想の強調のみが感じられて、またかという感情が湧いてくる。

５．結び

現在の韓国は、反日教育を徹底して受けた、日本無知のハングル世代が社会の実権を握り、その主流を占めるようになっている。80年代によく見られた日韓の美談は報道されなくなった。小泉内閣の時、韓国側は日本からの援助の打ち切りを通告されて、従来の援助に謝意を示し、今後は日本側と連携して、他国援助に踏み切る旨の発言があった。和気藹々としたそういう方向に向かう期待もあったが、結局はそうはならなかった。両国が協力すれば、かなりのことで世界に貢献できたが、そうした人々は現役を引退した今、日本への敵意を剥き出しにした世代が韓国を主導している。

「七〇年代から虚偽の『韓国史』（＝自律史）を重ねてきた彼らに、最早正解があろうはずがない。また日本から戦い取った独立でもないため主権の正当性がなく、唯一の正当性構築の可能性であった民主制もついには流産してしまった、と解釈すれば分かりやすいだろうか。今では、日本植民地時代の記憶自体を抹殺することだけが主体を支える動機となっている。そのような脆弱な国が未来永劫にわたって存続し、日本のパートナーになり得るとは到底おもわれない[11)]」。

韓国の立ち位置や中国の従属的な文化であることの意識が、韓国人の内面から忘却の彼方に消え去り、その結果として中国文化圏に入り込もうとしている、と古田博司氏は展望している。朴槿恵大統領は経済的には中華圏に埋没させていることから、中国の高官から再び朝貢貿易に立ち還ってはどうかと、誘われている。

一方、日本も歴史的なことを知識としても知らない世代、もちろん直近の過去の経験が分からない世代が大多数になった。年寄りの経験者からいろいろと訊いて学べばよいが、どうやらそのような気運にはなっていないようだ。現在、歳末選挙を控えて、若い女性がテレビ局の街頭インタビューを受けて、日韓関係をよくして、気軽に韓国観光に出かけられるようにして欲しい、と実に軽薄なことを語っていた。韓国の状況は以前と同じである。気兼ねは無用である。ただし、タクシー犯罪は日本では、乗客が引き起こすのに対して、韓国ではタクシー運転手が起こす。タクシーのぼったくりや日本語を話していると苛つくような運転手はいる。模範タクシーなら料金設定は高いが、安全である。以前と同じように、稀に日本人女性の行方不明が耳に入ってくるが、日本と同じような気分に浸っても、気を許さないことである。IMFの経済危機の時には、路上を歩いていた韓国の若い女性がいきなり乗用車で誘拐され、しかるべき場所に売られる事件が起きていた。とかく日本の女性は珍しい場所、観光客の行かない所に行きたがる。いつ経済の破綻が

来てもおかしくない状態なので、うっぷん晴らしの反日行動に遭うかもしれない。どんな場合でも、気を抜かないことは外国旅行の基本的な心構えである。ソウルの明洞に中国人観光客があふれ、中国人に限って3割引にする店も現れた。民族差別を厭わないのであれば、明洞にいれば安心である。

以上、日本人の韓国理解はこの程度のものである。韓国人の日本理解も怪しい。その狭間を縫ってデマ情報、嘘情報が忍び込む。それらの情報を突き崩し、真実の層にたどり着かねばならない。「恨」の内容を吟味するためには、同時に彼らの歴史や社会、文化に入り込むことが必要と思われる。心構えとしては率直に接すること、それによって理解を深めることが、何よりも大事である。それは何も追従を言い、おべっかを使うことではない。この四半世紀をはるかに越す歳月は、論者にとってそのことを知り、そのための体験期間であった、とこの原稿を書き終えるに当たって、強く感じられてくる。こうした作業は、次回の論文で取り上げる「恨」の究明に資するのだ、と思えてくる。

注

1）産経新聞のソウル支局長の記事が朴大統領を誹謗したというので、検察庁が逮捕･起訴した。東亜日報の記事をダイジェストして伝えただけである。当の韓国の新聞社はおとがめなし。謝罪すれば、不起訴処分になるところだったという。今現在、裁判所で審理中であり、半年以上にわたって本人は出国禁止の措置を受けている。言論の自由を無視する点は昔から進歩していない。これぐらいの言論は許されるのが、民主主義国家の最高指導者の度量というものである。

全大統領の時代までは、物凄い言論弾圧が続き、絶大な大統領権限の下で独裁制が敷かれていた。大統領がソウル市内を視察する段には、予定のルートにあたる道路の張り紙や店の看板を、有無を言わさず強制撤去させていた。新聞出版、民主化運動への弾圧と拷問もひどかった。大統領権限に群がって、不正を行う者は、現在でも相変わらずだが、この20年で少しは民主化が進んだと思っていた。けれども今後後戻りする可能性もうかがえる。

2）参照、竹内亘理／三宅光一「ハンチントンによる文明論と日本の21世紀戦略」（所収、『つくば国際大学研究紀要』15号　2009年）51頁。

3）李成桂は本貫地を全羅道北部の全州とするが、彼の二、三代前の事績は朝鮮半島東北部の咸鏡道にあり、成桂の父は元の支配下のこの地域の官吏だった。高麗の元攻略に大きな成果を上げ、この地域の女真族を支持基盤にして勢力を拡大した。そのようなことから李成桂女真族説が出ている。

4）明の皇帝は諸大臣と会議で「朝鮮はわが国の東端の守りである。いま、日本はここからわが国をねらおうとしている。これはわが国はじまって以来、未曽有のことだ。まず兵部から、朝鮮に命じて、詰問させよう」と言って、「日本の先導を引き受けて来襲を企てている」と朝鮮を問い質した［旧参謀本部編『朝鮮の役』（徳間文庫　1995年）139頁］。現代になって、朝鮮

戦争で鴨緑江に近づいた米軍が中国軍の反撃を受けたことも、秀吉の文禄・慶長の役と同じである。朝鮮半島は反発し合いながらも、中国と蜜月の関係がある。

5）以前、中韓の「怨恨」に関するテーマで科研費を貰い、報告をまとめたことがある。平成22年度科学研究費報告（課題番号：19520029）「東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究」（研究代表者：菅野孝彦）であるが、当時は別の研究計画に時間を割かれて、十分展開ができなかった。次回の拙論で、ニーチェのルサンチマン思想をも援用しながら、韓国の「恨」思想の解明を論述したいと考える。

6）菅元首相は、電源喪失の対応を具体的に指示せず、専門家と主要閣僚を官邸に呼んで「臨界」とは何かの説明を求めて、勉強会を開き、その間に時間の無駄を生じ、建屋の爆発を許した。公明党との党首会談に臨み、東工大出身の菅首相が専門家として安全を担保する最中に、原発建屋が水素爆発した。動力源である電源喪失が一番の基本であることは誰にもわかりそうだが、集団体制の日本でも、権力者のトップが誤れば、悲惨な影響を及ぼす点は、戦時中の「大和」の海上特攻の愚と同様である。

7）たとえば、日本もソウル大（旧京城帝大、ただし韓国ではその関係を認めない）の図書館や博物館に膨大な貴重品と蔵書、文化財を置いてきた。文化財の返還問題は、日韓基本条約で現状維持のままで、相互に返還請求権の放棄を取り決めた。

8）2万人のインド兵士はシンガポール陥落時に捕虜になった。彼らが英国からの独立を求めて、日本軍とともにビルマからインドのベンガル州に攻め込もうとした。日本の敗戦とともに、インド独立義勇軍の将兵が売国奴として裁判にかけられた。それに対して、当時のシンガポールの日本人領事館員が裁判所から証言を求められた。彼は収監されているところに出向き、日本軍に唆されて、仕方なく日本軍と行動を共にした、と証言すれば、命だけは助かるから、と好意で被告のインド人に助言した。だが、彼らは英国からの植民地解放が動機で出征した、あくまでも愛国心からの行動だったと頑として言い張った。その声がベンガル州の現地人の間にひろまり、激しい独立運動が起きてきた。そこで英国政府は彼らを無罪放免にせざるを得なかった。それをきっかけにして、独立運動のうねりがインド全土に拡大した。この例示は原理原則に信念を置かない日本人のいい加減な対応をよく表している。以前、この日本人を帝国軍人のように述べたことがあるが、外交官であった。ここで訂正しておきたい。軍人であれば、大体のところは潔さを信条にしているので、こうした姑息な発言をすることはほぼないであろう。

9）慶長の役の際に、秀吉から勝利を収めていることの証を求められ、敵の耳鼻を削ぎ塩漬けにして、送り届けた。その後、その証拠品は京のお寺に収められ、今に耳塚として残されている。江戸時代に寺の前の通りを、朝鮮通信使の一行が通過する時には、耳塚に覆いがかけられた。韓国人は戦勝の記念碑に築いたのだと見ているが、耳塚が五輪塔なので、死者の供養をするためのものである。

現代人からすると、非常に残酷であるが、耳鼻の削ぎ落としは中韓の刑罰にも欧州の戦場で

も存在した。戦後のチベット侵略の時､内モンゴル人兵士の証言によれば､人民解放軍はチベット兵の捕虜の耳や鼻、皮膚を削いで殺害していったという。日本の戦場では、手柄を立てた証拠に主だった武将の首級を持ち帰った。しかし乱戦になると、そのような悠長なことを言っておられないので、耳か鼻を削いで、後刻死体のその部分に戦利品を合わせて、検分する。そしてだれの手柄であるかを確定させた。もっと乱戦になると、例えば、信長の桶狭間の戦いの時は、今川軍の総帥である義元一人の首だけを狙うように、全軍に布告した。信長の奇襲作戦は総大将の討ち取りによって、今川2万5千の軍勢に心理的な打撃を与え、尾張地方から撤退させるためだけに集中した。首を取ったり、耳鼻を削いだり、残酷といえば残酷だが、それが戦場での万国共通の習いだった。英国のサッカーの起源は、捕虜の首をボール代わりに蹴り合ったことから始まり、北欧のスキージャンプは戦争捕虜の手を縛って滑走させて、突き落としたことがその最初だという。別に弁護するわけではないが、それが昔の風習であった。

10）拙論「グリム童話『白雪姫』－ひとつの成長物語」（所収、『童話のすすめ』大学教育出版2010年）153 ～ 198頁。

11）古田博司『日本文明圏の覚醒』（筑摩書房　2010年）276 ～ 277頁。

参考文献　（順不同）

○小倉紀蔵『韓国、ひき裂かれるコスモス』（平凡社　2001年）。
○同上『韓国は一個の哲学である』（講談社現代新書1998年）。
○加藤英明『「恨（ハン）」の韓国人 「畏まる」日本人』（講談社　1989年）。
○黒田勝弘『日韓新考』（扶桑社　1988年）。
○古田博司『朝鮮民族を読み解く』（ちくま文芸文庫　2001年）。
○吉川良三『神風がわく韓国』（白日社　2001年）。
○李御寧『韓国人の心（増補　恨の文化論）』裵康煥訳（学生社　1998年）。
○同上『＜縮み＞志向の日本人』（講談社文庫　1993年）。
○町田貢『日韓インテリジェンス戦争』（文藝春秋社　2011年）。
○蔡焜燦『台湾人と日本精神』（小学館　2013年）。
○黄文雄『韓国人の＜反日＞　台湾人の＜親日＞』（光文社　2000年）。
○加藤徹『本当は危ない「論語」』（NHK出版　2011年）。
○李圭泰『韓国人の情緒構造』（新潮社　1996年）。
○金永熙『韓国の悲劇　日本の誤解』（新森書房　1988年）。
○崔青林『韓国の自己批判』鶴眞輔訳（光文社　昭和61年）。
○崔基鍋『これで韓国は潰れる』（光文社　1999年）。
○洪思重『井戸の中の韓国人』金淳鍋訳（千早書房　1999年）。
○黒田健二『人治国家　中国のリアル』（玄冬舎　2011年）。

○原康史『激録・日本の大戦争　第八巻元寇と鎌倉武士』（東京スポーツ新聞社　昭和55年）。
○朴正熙『民族の力』金定漢訳（サンケイ新聞社　昭和48年）。
○崔達俊『韓国おりおりの記』（白帝社　1994年）。
○金両基『日本の文化　韓国の習俗』（明石書店　1999年）。
○在日本韓国文化院編『日韓文化論』（学生社　1994年）。
○山本武利編著『日韓新時代―韓国人の日本観』（同文館　平成6年）。
○宮脇淳子『韓流時代劇と朝鮮史の真実　朝鮮半島をめぐる歴史歪曲の舞台裏』（扶桑社　2013年）。
○室谷克実『日韓がタブーにする半島の歴史』（新潮社　2010年）。
○挙骨拓史『韓国に不都合な半島の歴史』（PHP研究所　2010年）。
○呉善花『韓国倫理崩壊　1995－2008』（三交社　2008年）。
○道上尚史『日本外交官、韓国奮闘記』（文藝春秋社　平成13年）。
○三品純『民主党＜裏＞マニフェストの正体』（彩図社　平成23年）。
○岡崎久彦『どこで日本人の歴史観は歪んだのか』（海竜社　平成15年）。
○勝岡寛次『日韓歴史共同研究のまぼろし　韓国と歴史は共有できない』（小学館　2002年）。
○楊海英『チベットに舞う日本刀―モンゴル騎兵の現代史』（文藝春秋　2014年）。

(3)武子和幸「星野徹の未刊詩集原稿『天の蠍』について」、『白亜紀』一三六号（二〇一一年）、二八－二九頁。
(4)鈴木満「『水脈』から『新樹』へ 2 ＊星野徹と五十嵐正一」、『白亜紀』八六号（一九九〇年）、三四－三五頁。
(5)同右、三四頁。
(6)星野徹「「新樹」時代の栗山薫」、栗山薫『詩歌集 水脈』（鈴木満編）（国文社、一九九六年）、付録。
(7)「編輯后記」、『紋章』三号（一九五二年）、一五頁。
(8)詩集にはまた、「一匹の羚羊に就いて」と「木たちは」の原稿と俳句六句がはさまっていた。「一匹の羚羊に就いて」は、題名の変更とともに詩句の一部修正を加え、「愛について」として『紋章』十一号に掲載された。俳句については、『新樹』には短歌や俳句の作品も寄せられていたから、歌人や俳人との交わりによる影響があったかもしれない。星野の俳句については、晩年に刊行された句集『聖痕』（国文社、二〇〇八年）がある。
(9)星野徹「詩的人生」、『星野徹の世界――神話的形而上詩』（沖積舎、一九九六年）、九四－九八頁。
(10)武子和幸「星野徹の未刊詩集原稿『天の蠍』について」『白亜紀』一三六号（二〇一一年）、一九頁。
(11)菅野弘久「『薔薇水その他』の余白に」、『薔薇水その他』（菅野弘久編）（国文社、二〇一四年）、四五一－四七八頁。
(12)星野徹『詩と神話』（思潮社、一九六五年）、二四〇－二四二頁。

参考文献

栗山薫『詩歌集 水脈』（鈴木満編）（国文社、一九九六年）
星野徹『詩と神話』（思潮社、一九六五年）
星野徹『詩の原型』（思潮社、一九六七年）
星野徹『詩の発生』（思潮社、一九六九年）
星野徹『PERSONAE』（国文社、一九七〇年）
星野徹『城その他』（思潮社、一九八七年）
星野徹『星野徹全詩集』（沖積舎、一九九〇年）
星野徹『星野徹の世界――神話的形而上詩』（沖積舎、一九九六年）
星野徹『聖痕』（国文社、二〇〇八年）
星野徹『薔薇水その他』（菅野弘久編）（国文社、二〇一四年）

短歌における）へと向かう。茶封筒の消印が昭和三十九年（一九六四年）であることから、『天の蠍』の編集は、概ね一九六四年を下限とした六〇年代前半と考えられるが、実際には一九六三、四年頃の可能性が高いように思われる。というのも、その時期には、『白亜紀』創刊以降、とくに一九六〇年に『無限』に発表された「蓑虫考――一つの原型的イメジとして」（四号）や「詩と神話」（五号）をはじめ、詩の批評理論と実作の方向性が明確になり、その延長上に一九六五年の『詩と神話』の刊行があり、さらに『詩の原型』（一九六七年）と『詩の発生』（一九六九年）が続いて批評三部作が完結したところで、一九七〇年に第一詩集『PERSONAE』が刊行されるという、星野の文学活動において、かなり具体的な文脈が浮かびあがってくるからである。

わたしは、この文脈を中心とする、一九七〇年前後の集中度の高い著作活動について、別のところで、[11]独自の神話／原型批評を構築し、その理論にもとづいて、意識の深層にひそむ原型的イメジを現代的文脈に変換した詩的創造、その形而上詩の樹立へ向かう方向性が明らかになった結果であると説明したが、『天の蠍』を編集することにもまた同じように、詩的創造の具体的な方向性が明らかになりつつあるときに、それまでの創造の軌跡を総括しておきたいという気持ちがあったのではないかと考える。

もちろん、これは推測の域を出るものではないし、また、実際そのような総括の意図があったにせよ、むしろ、それゆえに総括の作業が閉じた時点で、詩集そのものの公開は望んでいなかった、というべきかもしれない。しかしながら、『星野徹全詩集』の年譜には、どのような本を読んだとか、いつ詩集を買い求めたかなど、星野詩学を将来明らかにする者への慎ましい期待ともいえるような情報が、とくに一九五〇年代には、いくつも残されていることからすると、このような想像を簡単に封じ込めてしまうのは困難であるように思う。

『詩と神話』の「あとがき」で星野は、未知の読者、それもできれば同じ意志を共有しうる読者〈A君〉に向かって、こう語りかけている――〈この本をおおやけにすることで、途方もない負債を、ぼくは背負い込むことになる。だが、それをおおやけにすることで、たとえば、未知のあなたにも背負っていただけるなら〉。[12]そして、この〈おおやけにすることで、未知のあなたにも背負っていただけるなら〉という想いは、どのような内容であれ、それを文字で残すことを選んだ者には共通するものであろう。『天の蠍』の発見についても、そのような意味があるように感じられてならない。

注

＊『天の蠍』全文を掲載するにあたっては、ご遺族のご理解とご協力を得たことを記すとともに、ここに謝意を表します。

(1)菅野弘久「星野徹の未刊行論集」、『常磐短期大学紀要』第四二号（二〇一四年）。また、その三冊分の論集題目案をもとに、『薔薇水その他』（菅野弘久編）（国文社、二〇一四年）が編集されている。

(2)武子和幸「星野徹の未刊詩集原稿『天の蠍』について」、『白亜紀』一三六号（二〇一一年）、二八－二九頁、「故星野徹さんの未刊詩集　水戸の自宅で発見　にじむ青春期の苦悩」、『茨城新聞』（二〇一二年八月十三日）、「故星野徹さん未刊詩集　時越えた「天の蠍」浮かぶ創造の原点」、『茨城新聞』（二〇一二年八月十六日）。

る時期と重なっている。年譜によれば、イーディス・シットウェルの詩集を入手したのが一九五一年のことであり、大学を卒業して県立高校に奉職した一九五三年からは、T・S・エリオットの『荒地』を西脇順三郎と中桐雅夫の訳を見比べながら読み出し、イギリス詩の乱読、卒読も始まるという。一九五五年には、深瀬基寛の訳により、W・H・オーデンの詩集を急ぎ買い求めたことも記されている。こうしたイギリス文学の素養が増していったことは、創作にも少なからず影響をあたえたことは容易に想像できる。

たとえば「Façade」と「Prelude」からは、シットウェルやエリオットの同名の詩が連想されるし、シットウェルの影響ということでは、〈海の向ふから響いてくる／人類の墓地を用意するごとき／人類の十字架に釘打つごとき／あの不幸な槌音のためか〉（「黒い雨」）からは、「なおも雨は降る」（"Still Falls the Rain"）冒頭の〈十字架〉、〈無縁墓地〉、〈槌打つひびき〉の連続するイメジが想い起こされる。頻出する〈薔薇〉からは、ウィリアム・ブレイクやW・B・イェイツが感じられるだろう。「天の蠍」の冒頭部分、〈蜜柑をむくと／中にはもう／すつかり／秋が熟していた〉には、ジョン・キーツのオード「秋に寄せて」（"To Autumn"）の一節――"And fill all fruit with ripeness to the core; / To swell the gourd, and plump the hazel shells / With a sweet kernel"――を重ねて読むことができそうだ。題名からトマス・ハーディの詩篇を連想させる「Christmas Eve」のなかで、〈一本の両切のように燃えつきるもの　それが人生であるなら　苦悩を支へて立つ欅に　何を　僕は学ぶべきであるのか〉という、一本の煙草が燃え尽きる間に人生を感じ取るという一節には、"I have measured out my life with coffee spoons"と記したエリオット（「J・アルフレッド・プルフロックの恋唄」"The Love Song of J. Alfred Prufrock"）に通じるものが感じられる。

詩篇の主題は、文明批評的なものから恋愛とその挫折まであり、表現も象徴詩やシュールレアリズム、同時代の詩人の影響が感じられるが、それは自己のスタイルを確立するために誰しも通るべき道であるのだろう。星野は自身の〈詩的人生〉を振り返って、詩作の始まりに自分という存在への〈絶望〉があり、詩を書くことが〈敗戦後のおのれの中の大きな空洞〉を埋めるための〈補償作用〉であったと語っているが、[9] この時期に書かれた詩篇が形而上詩として成立するには、さらに時間を要する段階にあるとはいえ、〈詩という無辺際の可能性〉を模索し続けようとする姿勢とその詩の特徴は、〈内と外の鈍い悲しみに閉ざされて／いつか出口のない／円筒となる僕のこころ〉（「鉛の輪」）や〈海藻のからみついた一個の屍が／星のない／閉ざされた時間のなかを／あてもなく漂流してゆく〉（「漂流」）、あるいは〈雨の街路の／おお何と言ふ黒い風景／なぜ／ぼくらは喪服を着けなければならないのか〉（「黒い雨」）というように、孤独に正面から向かい合おうとする姿、その若さゆえの感傷という一言では片付けることのできない詩行から、はっきりと読み取れる。

ところで詩集『天の蠍』は、いつごろ編まれたのであろうか。その時期の推測には、武子もふれているように、[10]『天の蠍』が入っていた茶封筒が参考になる。封筒の表には発信先として、歌誌と思われる〈「喜望峰」〉の文字があり、宛名は星野を連絡先とした〈棘の会〉になっている。〈棘の会〉とは、一九六三年に歌人の大竹蓉子と小国勝男らによって結成された短歌グループであり、このとき合わせて歌誌『棘』が創刊されている（一九六九年、九号で終刊）。当時の茨城歌檀では、前衛短歌集団と目され、星野は独自の神話批評／原型的イメジの実作への援用（詩のみならず

（三号、一九五二年）、「童話」（四号、一九五二年）、「漂流」（五号、一九五二年）、「神話のための序章」（六号、一九五二年）、「穴のある屋根について」（七号、一九五三年）、「Prelude」「Christmas Eve」（九号、一九五五年）、「天の蠍」（十号、一九五五年）、「愛について」「顔」（十一号、一九五五年）、「ポジションⅠ」「ポジションⅡ」（十二号、一九五五年）、「その系の一方の端で」「その影がのびてきて」（十四号、一九五六年）。

初出時の詩篇と詩集のそれでは、テキストの異同がいくつも見られる。こうした変更は、初出から詩集編集までに、ある程度の時間的経過があったことをうかがわせるだけでなく、詩集を編むにあたっての意図をさぐる手がかりにもなる。「新樹」と「解纜」については、鈴木による断片的情報からの判断だが、内容にかかわる変更が（とくに後者で顕著に）あったようだ。「愛のおもひでのためのうた」は、詩集が見つかったときに、その間にはさまっていた「夕暮れと花とS・Zのためのうた」をもとにしている。[8] 原稿には、題名に続いて〈ほしの・とほる〉の署名があり、末尾に〈1951・3・25〉の日付がある。日付から見て、『新樹』に発表するために用意された原稿であったと考えられる。

「Nocturne」には〈1952・6・8〉の日付があり、旧仮名遣いや漢字表記での異同が見られる。「童話Ⅰ」と「童話Ⅱ」は、初出では「童話」として発表され、詩中のアステリスクで区切った体裁の前半部分と後半部分を独立させたものである。初出の〈ランプ〉、〈アルバム〉を〈らんぷ〉、〈あるばむ〉とするほか、若干の字句の異同が見られる。〈1952・7・16〉の日付も記されている。なお、通常、カタカナ表記が自然と感じられる箇所でのひらがな表記が詩集に散見されるが、この表現上の効果を意図したひらがな表記については、漢字表記についても同じく、詩集全体で見た場合に不統一性が感じられることもあるため、今後あらためて検討が必要になると思われる。

「序章」の初出時の題名は「神話のための序章」であり、〈1952・9・8〉の日付がある。〈出入する通路〉もなく、〈窓〉も〈退化して〉なくなった空間を思わせる、この閉塞感は後につながっていくイメジでもある。「漂流」では、感嘆符を省いたり、改行を変更するなど若干の異同が見られる。末尾には〈1952・8・3〉の日付がある。「穴のある屋根について」の初出の題名は、「屋根にある穴の位置から」となっている。漢字表記とダッシュの使用などの異同が見られる。「Prelude」では改行の仕方で異同がある。漢字表記の違いもあるが、上述したように、初出の漢字表記がひらがなに変更されている部分については、その詩的効果に不可避的な変更であったかどうかもふくめ、慎重に判断する必要がある。

「Christmas Eve」では、若干の漢字表記の変更のほかに、第六連で〈彼女達〉が〈少女たち〉に変更されているところが目を引く。「天の蠍」では、初出の最終行〈天のサソリ〉の〈天の蠍〉への変更と改行位置の変更がある。「佐原にて」のなかで〈古びた街〉を散策する〈三人〉とは、星野のほかに「紋章」同人の荒川法勝と山口惣司であったことが、『紋章』九号（一九五五年）の「紋章消息」欄で紹介されているエピソードからうかがえる――一九五四年の暮れに、星野が荒川をたずねたときに、同人を誘ったが集められず、〈やむなく三人で都市の暮を送り、更に深夜野良犬の如く佐原の街を放浪した〉。

『天の蠍』に収められた詩篇は、その多くが一九五〇年代に書かれたものだが、この時期は、星野が中学校助教諭を辞して茨城大学に編入学し（一九四九年）、イギリス文学を本格的に学び始め

稲敷市）柴崎で栗山薫（一九〇九－一九七八）を中心に発刊された文芸誌である。その巻頭言「新樹の言葉」には、〈われ等がその據り所としてゐる出船、水脈、香月、未完成を始め多くの小地域文芸集団はここに発展的解消を断行し広く常総一帯の文芸人と手を連ねてより高き香りとより美しき理想とをもった郷土文芸の花を期待したのもここに真意があったのである〉とあり、[5]戦後の表現の自由を享受するなかで次々に生まれた雑誌を統合し、質量ともに充実した文芸誌を作ろうとした意気込みがうかがえる。同人数は二十一人で、そのうち五人（栗山薫、五十嵐正一、星野徹、鈴木満、福田古山）が編集にあたった。

栗山薫と星野との関係は、星野が一九四七年から助教諭として勤務していた稲敷郡瑞穂中学校（現・河内町立河内中学校）に、一九四八年の秋、栗山が赴任してきたことに始まる。栗山との出会いと、さらに『新樹』の詩担当の編集同人として参加したことについて星野は、後に〈偶然からうまれた必然としか言いようがない〉と、その出会いと協働の大きさを述懐しているが、[6]清新な季節に芽吹く樹木のように誕生した文芸誌への期待をこめて、『新樹』創刊号の表紙見返しに掲載されたのが「新樹」である。初出時は「新樹讃」という題名で、テキストも本稿に収めたものとは違い、象徴的雰囲気を強調するように、〈光群　芽吹く新樹に鳴動き／蝶　花々の美酒に　酔ひ　狂ひ　開く／虹となり　生命ある　皐月の　虚像〉と漢字を多用した表現となっている。「解纜」については、初出時は「解纜――Poetical Fantasy」と題され、〈稲葉皓〉のペンネームで発表されている。鈴木によれば、星野は『新樹』以前に、『未完成』や『香月』に行分け詩を発表していたが、散文詩はこの「解纜」が初めてであったという。詩集に収めるにあたり、初出テキストにかなり手が加えられているだけでなく、詩集『城その他』（一九八七年）には「纜を解く」という詩篇も見られることから、その〈イマージュの舟〉が〈纜〉を解いた後の航跡をたどることには、星野の詩業を理解する上でたいへん興味深いものがあるが、この点の解明については、初出時の資料が入手できてからの課題となる。

『新樹』は、一九五四年に十一号まで出して終刊となる。星野自身の年譜によれば、『新樹』では〈詩、短歌、評論を書く〉とあるから、この時期に書かれた詩篇が『天の蠍』に収められた可能性は十分にあるが、現時点で『新樹』そのものを手にすることができないため、その詳細は不明である。年譜にはまた、『新樹』創刊の前年、すなわち一九四九年――歌誌『アララギ』に入会して短歌を詠んでいた時期でもある――に、〈千葉県佐原町の五喜田清志と詩誌「ＡＴＯＭ」創刊、二号にして止む〉とあるので、この『ＡＴＯＭ』と前出の『未完成』や『香月』に発表された詩篇も詩集に収載されたと想像されるが、この点についても残念ながら、資料不足のために未だ確認ができていない。

星野が一九五〇年代に繰り返し作品を発表した場として、『新樹』のほかに詩誌『紋章』があった。『紋章』は、その終刊後に、『白亜紀』創刊を導く一因になったという点でも重要な雑誌である。創刊は一九五二年で、年譜には〈五月、佐原町の荒川法勝、五喜田清志と詩誌「青銅」創刊。三号から「紋章」と改題〉とある。誌名変更は、すでに『青銅』という雑誌が発刊されていたからだった。[7]一九五六年まで、途中に一年の空白期間を置いた直後の十号を〈紋章復刊記念号〉としてはさみ、季刊を基本に十四号まで刊行された。そのうち三号から七号、九号から十二号、そして十四号について、その内容を確認することができた。詩集に収められている作品の初出は以下のとおりである――「Nocturne」

旅程がぼくにはある
君は君とぼくのために燐寸を擦つた
そのちひさく炎えるものが
コロナのやうに三人の顔をともして消えた

天の蠍

蜜柑をむくと
中にはもう
すつかり
秋が熟していた
ぎつしりと抱きあつて
みのるものを見ると
なぜか涙ぐましくなる

スキツチをひねると
チヤイコフスキーの音樂が
あふれ出した
泣き笑ひの人生だとは思はないが
ぼくの中から一人の
ぼく
を連れ出してくれる

下駄をつつかけて庭に立つと
裸木のこずゑに
蠍座がかがやいていた
毒をくわへた
尾を巻きつけて
射手座はまだどの方角にも見えてこない
こずゑのうへには勿論見えない
秋も音樂も去つてゆくだらう
この庭から
射落さねばならない
天の蠍

＊

原稿用紙を袋折りにして綴じた体裁の、ただ一冊しか存在しない手書きによる詩集『天の蠍』について、その書誌情報として確認しておかねばならないことは、詩集に収められたこれら三十篇の詩が、いつごろ書かれたものであるかという点であり、またそれらが詩集として、いつごろまとめられたのかという点である。

詩篇の創作時期について武子和幸――この詩集を『茨城新聞』と『白亜紀』において最初に紹介している[2]――は、「黙示」の〈この世に生を享けて二十五年／音楽を聴き詩を書いて／何といううかつな私でしたでせう〉と「貧乏物語」の〈母はせつなくなる。／でも手塩にかけた貧乏神もすでに三十／嫁をもらつてやらなければ〉に見られる年齢の記述と、『星野徹全詩集』の年譜に盛り込まれた情報を照らし合わせて、一九五〇年代前半に書かれたものと推測する。[3]

この推測を数少ない関連資料から補足すれば、巻頭を飾る「新樹」と「解纜」については、鈴木満の証言から、[4]『新樹』創刊号に発表されたことがわかる。『新樹』とは、一九五〇年、稲敷郡（現・

それらはすでに非情の〈物〉だ。
この狂暴な文明のギャップに投げこまれて
まるで祈りのやうに
身体をくの字に曲げたとき
急に母の眼のまへが明るくなつた。
おお　人よ
たとへば母の
夕暮れのような網膜のうへで
席を立つてくれたその娘さんに
一人息子のイメジが重なつたとしても
人よ　わらへるか

北斗がふたたび
逆さまに裸木のこずゑに凍るとき
すつかり鎧を始末して
身軽にかへる母のふところから
林檎が一個やさしく匂つた。
いくどか放射能の雨にあらはれたであらう
その林檎にも
ひそかにちいさな種子がめざめていなかつたと誰が保証
　できるか。
やがて明日の方に
みどりの枝葉を伸ばし
花々の白い泡を噴きあげるであらう
そのちひさな種子の一粒が。

佐原にて

夜空に降る星はなかつた
梢に鳴る枯葉もなかつた

幾筋もの水路を静脈のやうに通はせる
古びた街
闇の底を流れるその水路のひとつに沿つて
君と君とぼくとが歩いた
ちよつと一杯の屋台から流れて
アセチリンの光が暗い水路を切つた
その水路を支へる石垣を切つた
城下町には見られない
商人の悲哀と根づよさを思はせて
重く冷たく切石が切石を支へる三〇〇年の歴史を切つた
芥川賞の何某が潜伏していたと君が語る
何某病院の建物も
巨大な切石のやうに
生を主張するひとつの燈火さへかかげなかつた

闇の底に消える星はなかつた
梢を離れる枯葉もないのか

けれどやがて
上げ潮のやうに水路を溯流してくるであらう夜明けが
この古びた街の隅々にまで生をふたたびもたらすとき
十里の外を走つていなければならない

友よ
死滅した経験をあつめて流れるもの
それがひとつの川であるなら
川は何処へ流れこむのか

雨の街路の
おお　何と言ふ黒い風景
なぜ
ぼくらは喪服を着けなければならないのか
ぼくらが汚れた魚を葬るとき
たとへば
海の向ふから響いてくる
人類の墓地を用意するごとき
人類の十字架に釘打つごとき
あの不幸な槌音のためか

傘をつたひ柄をつたひ
指さきから絶え間なく
ぼくの内部に流れこむ黒い滴りよ
すでに死が流れる僕の腸も
ひとつの川だ

友よ
過去が未来へと流れていくように
やがて死滅するだらう経験をあつめて
川
の流れこむ未来は何処か

〈芯からくづれる一個の桃
　腐つていく地球の巨大な核〉

貧乏物語

母は今朝も出かけていつた
霜柱は足袋をうづめ
鎧のやうに身体に米を巻きつけて。
母にはセンセイをしながら詩を書く
息子がある。
センセイと詩と
この貧乏神のシノニムを背負つて
息子は
この空のどの星にあこがれているのか
まだ裸木のこずゑに凍つたままの星座をあおぐとき
母はせつなくなる。
でも手塩にかけた貧乏神もすでに三十
嫁をもらつてやらなければ
と母はちひさな希望を彈き出す
とがつた視線に小突かれながら通勤列車の中で。

まして省線の乗換駅。
押し合ひもみ合ひなだれ入る
手提鞄にハイヒール
らくだの外套に金縁眼鏡

首筋のあたりでは喘ぎ喘ぎ爆発している落下寸前の太陽があり
地球の縁を這ふようにして新聞を抱へた僕の黒いシルエットがあり　そのシルエットに重つて　蒼白の薔薇をかざす吊げ髪の少女の　その少女につづく彈帯を巻いた君と君の少女の　或ひはその少女に重る他の君達の　ああ　無限につづく黒いシルエットの流れが盲目の祭典に向ふとき
　それらいっさいを見下して
　　いっさいの結末を計量している
　　一対の冷酷な

綱の眼

Christmas Eve

今夜はクリスマス・イーヴ　せめて新しい兩切に火を点けて　僕はしづかに衡量しよう　その一本の燃えつきる時間を
硝子戸の外は空つ風　裸の梢から　つぎつぎに星屑が吹きとばされるので　あの欅は　苦悩の姿をして立つのだらうか
空つ風の中から響いてくる　少女たちの切れ切れのコーラスよ
　空つ風に堪へるには　余りにも傷つきやすい果実たちよ
彼女たちを乗せて暗夜に漂ふ船　それが彼女たちの祖國であるなら　船を襲ふこの黒い風は何処から吹いてくるのか　薔薇色の光が射してきて　その闇を切りひらいてくれるのは何時か
一本の兩切のように燃えつきるもの　それが人生であるなら　苦悩を支へて立つ欅に　何を　僕は学ぶべきであるのか
少女たちは歌ふ〈きよしこの夜〉と　少女たちは飾る　聖なるモミの木に　やがて踏みにじられるかも知れない切紙細工の星を
いま　無限の夜の重量を支へて　一枚の硝子戸があり　一枚の硝子に支へられて　六畳四方の僕の孤独と平和がある
今夜はクリスマス・イーヴ　せめて香り高い兩切に火を点けて
　僕はしづかに衡量しよう　指と指の間で燃えつきるだらう一つの人生と　その数だけの世界が消されるようにあの裸の梢から消えていく　幾つかの星の意味するものとを

黒い雨

雨の街路の
コウモリ傘の黒い流れ
かんまんに流れ光なく流れ
どの人も昨日の黒い幻影を背負つて
見ひらかれたどの瞳孔にも
六月の窓々をいろどる
いちりんの薔薇さへ映らない

軽い接吻と
温められた食器の音が湧くだらう

重油の匂ふ驟雨が降らなくなつてから
街角では
血の薔薇のかはりに
ちいさな友愛の金属が光る
赤い羽根が撒かれていつた
けれどやがて
時計のかはりに
放射能検知器が腕に捲かれないとは
誰が保証できるだらうか

愛する者同志の
痺れるやうな
献身のしるしの抱擁の瞬間にも
ひそかに用意されてゐた
憎しみの種子が芽ばえ
温い灯をかかげるそれぞれの窓にも
家守（やもり）のやうに待伏せてゐる
不孝の影が
あると言ふのだらうか

濡れてつづく石畳を踏んで
灰色の夕靄に溶けてゆく
盲目のひとりのやうに
教会の尖塔から打出される

創世紀の鉛の悲しみ
都市の夕空を廻転してゆく
その巨大な

鉛の環

Prelude

あれから七年
無限軌道が砲を曳いて轟いた　新しい祭典に　参加するかのやう
に　萌黄色に塗られて
それから一年
列島の脊染をしやぶつて台風第何号が過ぎた　その祭典の結末を
予告するかのやうに　黒い唾液を垂らして

今僕は歩いてゐる　電車道路を横切り　公衆便所の方角へと走つ
たり　鈴懸の下の吊げ髪の少女から夕刊を買ひ　或ひはその少
女に　僕の心臓の裏側にひらいた一輪の薔薇を手渡したり　熟
しきつて落下寸前の太陽の位置を　痛いほど首筋のあたりに確
めながら

そのとき何処から来たのか一羽の鳶　海底のやうに黄昏れてゆく
ビルの谷間の掌ほどの夕空に　ゆつくりと輪を描き　あの路次
のゴミ箱の中で虹のやうに輝いてゐた　あれが猫の死骸ででも
あつたのか　ゆつくりと輪を描き　貪婪な欲望の実現を一秒の
先にひきのばす　精密な計量でもしていると言ふのか

季節の星座が移り変る屋根のその部分よ
僕の現在が滴り落る母のそれのごとき暗黒の部分よ

ズボンの裾からは先刻曳きづつて歸つた舗道の黒い雨とともに、
反吐となつた麦酒や、安物の香水や、腸の中の林檎など、それら一切の有機物の分解してゆくさまざまな過程が匂つた。

鉛の環

紅い蔦に覆はれた鐘楼の傾きから
夕暮の空に拡つてゆく
巨大な環がある
おびただしい悲しみをこめた
鉛の環がある
すると空腹な僕の内部にも
漂へるように應へてひろがるひとつの環

内と外の鈍い悲しみに閉ざされて
いつか　出口のない
円筒となる僕のこころ

その時ありありと見たのだつた
創世紀の一節が刻まれている
胸壁につづく
石疊をあゆみながら

落葉した路樹の置く汚点(しみ)のような影と
その影にかさなる灰色の記憶
幻に見えて無形の君たちの
砂のうへに乾いた
血の薔薇の痕跡と
最后の君たちの瞳孔が映した
裂けた
地球の黒いイメージ

それら一切の影が有した
いくばくの重みを衡量しながら
それら一切の悲しみを孕んで
重く低く拡つてゆく鉛の環
閉ざされた円筒を支へながら
石疊を踏みしめるためではない
胸壁を這ふ蔦の葉の一枚一枚に
漆のような
夕日が余りにも美しいから

あのあたり
赤茶けた塗炭屋根の
るいるいたる屈辱のエピタフは拭ひ去られて
精巧な白亜の住居のうへの住居
間もなくそれらの窓々に
官能は追憶のやうに還つてきて
それぞれの
窓の大きさの灯をともし

蛇のやうに垂れさがる榕樹の気根
その幹に乾いている傷痕
牡蠣のからんだ水筒
傾いている砲塔
そして
砂に埋没している　裂けた
鉄帽
　　そうだ
おまへはぼくと同じ世代を生きたな
同じ瞬間に
同じ色の薔薇を咲かせたな
ぼくの頭蓋をゑぐつた　同じちひさな
金属の歯が
おまへをも罐詰のやうに引裂いたのだ
　　けれど
花のごとき　それら
喪章を撒きちらしていつたのは――

あの目
太陽のまんなかに氷つてゐるあの目
文明の美女の渇いてゐるあの目
絶望の額に砒素色の接吻を捺してゆく
あの目
あの目

ぶつぶつ黒い言葉を呟きながら
股や首のまはりに
海藻のからみついた一個の屍が
星のない
閉ざされた時間のなかを
あてもなく漂流してゆく

　　何時　何処から
　　そうして
　　何時まで　何処へ

穴のある屋根について

赤茶けた塗炭屋根は腕白どもの抛りあげる小石にもぽつかりと口を開いた。吹き通しとなったその部分では、独楽のやうに廻転する枯葉や、配偶者を見失つた燕や、ときには、野の硝烟が白い肉片で綴つた追憶の尾を曳いて、流星が消えていった。

赤茶けた屋根の下では僕の向ふ部厚な辞書のうへに裸電球が急に黒の形象を置いた。蚤の這ひまわる感觸が脇の下でとまつたりした。そして、膝のかたはらの洗面器に絶え間なく金属音を立てている針のやうなもの――

赤茶けた屋根の穴からは暗い不孝だけが明日への序奏の口笛を鳴らした。けれど、その瞬間にも短く光つて落下する〈現在〉の系列のごときもの――思考の指は肩のしこりの内部で腐蝕した穴の部分を恋人のやうに探つた。

ゆくふとつちよや　へどやふん尿にまみれたふとももや　両手に花のひかるげんじや　ばすゑの茶房にともるえすぱによーるのくちびるなど　とりかへしのつかぬ泣き笑ひや　とりかへしがついてもとりかへすすべを知らない馬鹿笑ひなどであります　ですからなほのこと愛しくなつてめつたやたらに吸ひついたり　ひざ小僧をすりむいたり　おし合ひもみ合ひへし合つてぶつかり合つたとどのつまりは　夕涼みの花火をしかける風流が　とんだ天の茸をうちあげるにいたるのであります

丹念にひろい蒐めては
かけがへのない
あるばむを貼つてゐる

序章

其処には出入りする通路がなかつた。まして窓といふ窓は　すでに退化してしまつたのだらうか。黒い舌を　びつしりと忍冬が吐いてゐるのみであつた。太陽がノツクをしても蛸の嘴ほどにもひびかなかつたし　時間は　場所もなく蟋蟀のように翅をこすつて哭いた。

毛髪はたがひに愛しあふ觸角であつたから　その部分で愛し　からからと接吻をかはした。すべての骨は骨をつみあげ　椅子のかたちをした。その骨の椅子のうへの夥しい骨の渇き。嘆きは地下水の底に明滅する切紙細工の星　あるひは母の妻の恋人の幻影であつた。ときをり蝙蝠のやうに科学兵器のきしる音が迷ひこむと水母のやうにまとひついて　傷痕をいやす冷笑をした。透明な聲で陽に灼けた聲で　肺やみのやうに癩やみのやうに　せせら笑ふ骨のうすら笑ひ。月の暈が鴎がついばむ晩など　それはたがひにひしめき合ひつきあげ合つて　亀裂のわづかな間隙からもすさまじい勢ひでほとばしり出て　北極まで木魂した。海豚は鯨の胴つぱらを突き破り　氷山はうめくのであつた。

地上に青い火花の閃くごとに　殖えてゆくやうであつた。其処は埋つてゆくやうであつた。びつしりと黒い舌を吐きつづける忍冬のうへにまで　切紙細工の星が貼られ　骨のつみあげる骨の椅子は絶え間なく身をふるわせてゐるやうであつた。

漂流

一日の
疲労と街の騒音と
点火燐のやうに点いては消される
つかの間の希望と
それら種々雑多なものを詰めこんで
どさりと重い　この臓物が
何もない
裸燈の影が揺れているばかりの
夜のベッドに投げ出されると
きまつて
ぼくの網膜には
灼きついている島があるのだ

風はたしかに死んでゐる　海鳴りは防風林のむこふからくる　だんだん身をもたげながら　はだかるようにして迫つてくる　私の内部をとほりすぎる

花籠のやうに　遠くからほほゑみかけていたものが　いまはもう冷たい陰翳となつて　くだかれた貴女のトルソを撒いてゆく

Nocturne

月の出まへのテラスは月があるほどのあかるさである　草はないのに草があるほどにかげつてゐる　ずい分いぜんから貴女の眼のなかにうづくまつてゐたものが　ものの翳にとけこむほどに身をおこしはじめる　徐々に頭をかしげて眼のなかで頬笑みはじめる　拗ねるようにまとひつくけれど　薄ら笑ひと言ふのではない　頬笑みかけてくる

腹のふといしんくの蛾がとんでゐる　おもたそうな暗いしげみがその色をきわだたせてゐる　どこから来てどこへゆくと言ふのでもない　うつらうつら眠つてゐる　あるひは柩のうへに輪をゑがいてゐる　おくびような埋葬者のやうにあたりを見まはすけれど　かすかに割れて咲く花だけがしつとりと濡れて白いとりつくしまもないのである

水はきしみながら眼のくまに吸はれてゐる　にぎつてゐる部分だけ蝕のやうに冷えてくる　それがとてもこころよい　雨にうたれると言ふほどではないのでシヨールはたたまれて膝のうへにある　植物のやうに呼吸してゐる青磁の額であるけれど　体温ほどのあたたかさにも豊かなものにあふれてゐる　かぎりなく静脈に蛾の卵がかへつてゐるのである

童話Ⅰ

明るいことはじつに明るいまるで底ぬけの明るさであります　部屋の外側を廻てんしてゐる　えいごう不滅のらんぷであります　あるひはぶ厚い硝子ばりであります　ものごころついてからといふもの幾度となく　今では筋つぽくなつてゐる　あるひはかろうじて指さきにじよう欲のなごりをとどめてゐる　この手を性こりもなく差しのべるのですけれど　明るさとはこれまた思ひもよらない厳しさにさへぎられて　後ずさりするのです　乙女のきよぜつには早じゆくの桃や杏のはだざはりがあるものですけれど　これはひえびえとした量感だけがのこるのです

地球のはしに
その影はうしろ向き
岩塩のやうに親しみもうすく

童話Ⅱ

人はそれぞれにほろ酔ひきげんのちどり足であります　声たからかなぐん歌であります　あらびあんないとを背なかにぶら下げて

あなたのひとみのやうに見えるとき
わすれな草のそよぐ斜面は
わたしの内部にかたむく
階段です

XIII

わたしがささやくと
あなたはびつくりして目をみはる
今日のいとなみの終るところに
明日のいとなみが始る
私は
秒をさいだんする
鋏でありたいと思ふ

Façade

山肌はあきらかにコバルトのやうであるが晝であるか夜であるか
さだかではない　ここでは樹木までがきはめてプラスチツクで
ある　瞼のうへに瞼をかさねる生々しいものがねぶりついてい
るのである　うまれたばかりの青くさい昆虫のむれがはひまわ
り　あるひはそれらの死骸や複眼がさんらんしているのである
凹んだところはかつて見覚えのある沼沢地帯のやうであり　そ
のなかに白い苔の花でふちどられているので　それとわかるほ
どに聳えている　門である

開かれた口には暗黒がつめられてゐる　ちかちかと炎えてゐるへ
んぺいな胎盤のやうである　内部よりくる木魂はしたたる雫で
ある　あるひは触れあふ骨である　たえまなく去来する気流に
消えそうでいて消えない　幻といふのではない　スフインクス
の輪郭があらはれてゐる　揺れるたびに瞼のうへを温くしたり
涼しくしたりするのである

暗いほど硫黄のにほひのつよい軟岩帯をかけおりてくる影がある
すれちがふときの歯はたしかにほほゑんでいるときの貴女であ
る　けれどすでに肉体は気流にとけて流れ出してゐる　卵色の
セーターにつつまれて恋をする部分だけがある　不安は色にあ
る　しゆう雨のあとのしゆう恥にぬれてゐるのである　血管の
なかで小鳥がさわぐので　ふりかへると水明りに見え隠れする
のが玉虫色に青づいてゐる　VENUS のかけらを腰に光らしな
がら出てゆくのである　門である

砂丘にて

風はたしかに死んでゐる　砂丘は　さかんに受精する豆科の花で
ある　ぽつと上気してゐる黄のイルミネエシヨンである　そのな
かに一点　白い花がとぢたりひらいたりしてゐる　涙腺をあらつ
ている蝶である

風はたしかに死んでゐる　太陽は腐爛してしたたる虹である　ル
ージユはひいてないけれど　酸つぱい果汁を啜つてゐる　睫毛は
ぬれてないけれど　びつくりして眸を見はつてゐる　指さきのさ
ぐる目である

花やのみせさきで
冷えた紅茶をいただきませう
みつばちさん

Ⅳ

みそさざいがついばむ
あられの匂いがいたします
どこもかしこも
こすもすの白いふくぼでゆれています

Ⅴ

私のめのなかに
私をこえて
私でないものを
みつめるとき
あしの花がこぼれます

Ⅵ

なつのひのひようのうの思ひ出は
あらひたてのゆかたのにほひ
かんなは
はつねつしやすいおじようさんでした

Ⅶ

ひまわりがまわす日時計のめもり
いつかあなたの鼓動ではかりましたね

Ⅷ

きのこ
のような雲をせいぞうしたのはだれだ
いろいろなかなしみが
落日のなかではじけます
ほうせんかのやうにはじけます

Ⅸ

わらつて　わらつて
火をふく山も
こんな時間にはしづかです
私の死ぼうつうちがまいりました

Ⅹ

灯ろうながせ
みやまをだまきが咲きました
灯ろうながせ
はらからの魂がしようてんします

Ⅺ

とちの実
くりの実
あなたはぽけつとに
季節をしまふ

Ⅻ

みづうみが

あぢさゐの花が咲いた
恋を知つてわたくしは花のかげで待つことをおぼえた　ひすいで
もきさきでもない

或ひとのまぼろしが現れるのを　まだ若いわたくしは

期待ののちの失望がどんなに苦しいものであるかを知らなかつ
た花もわたくしに身をかたむけるようにした

あぢさゐの花が咲いた
ざつ草のはびこるに任せた庭に

玉のような花が咲いた　しよつぱい思ひ出が咲いた

今朝も私のこころの中で

今朝花屋の店先でタイルの上に花がいちりん散つた

まだ早朝のことなので誰一人として気がつくはずはなかつたし
新聞賣子か牛乳配達あるひは朝の早い通勤者以外には花をまたぐ
者とてなかつた　旅行に出るらしい母親に手をひかれた女児がウ
サギの襟巻をして通りかかつた　数歩手前で眼ざとく花をみとめ
るとつと手をのばした　すると色褪せて消衰しきつた花が不思議
にいきいきとしたやうであり　思ひなしか女児の指さきに身を寄
せるやうにもしたので　舗道は女児の周囲だけにわかに薔薇色の
ひかりが射したやうに思はれた　間もなくあたりはすつかり明け
わたり　もはや女児も花もそこにはなかつた　女児の落していつ
たキヤンデーの包装紙と置き忘れられた私だけがあつた

何と言ふ花であつたか今だに思ひ出せないし　何と言ふ名の女児
であつたか知るよしもないけれど
今朝も私にこころの中でタイルの上に花がいちりん散るのである

愛のおもひでのためのうた

Ⅰ

ばらのはちに灯をともせ

あどれすをうしなつた郵便のように
こんな夕暮れにはもどつてきます
かつてあなたの眸に逢つたとき
私のなかをとほりすぎたものが
とほい祝祭の列のやうに
こんな夕暮れにはかへつてきます

Ⅱ

花はしゆういに季節をまわす
あなたはしゆういに私をまわす
ゆめの石にさく
あをいひるがほ

Ⅲ

さんまの詩やリルケのお話をして
舗道をあるいて
湖から吹きつける霧が
プラタナスの幹をぬらして
寒い晩だった
お話が
とぎれがちになつたとき
君とぼくは交互に咳をして
通りかかつたデパートに灯が点つた
ウインドの林檎が
エジプトの宝石のやうにかがやいて
そのときだ
黒子を君の横顔に発見したのは
すると　ああ
周囲の時間が
にわかに君の黒子に吸ひよせられて
花にとまるときの蝶のやうに
つばさをとぢたり開いたりするのを
見た

一年

ラツシユアワーの雑踏のなかでも
みづうみが楡の梢にひかる坂を下るときでも
または吸ひさしのバットがリルケの詩集のうへに紫烟をただよはせる下宿部屋でも
どこででも　いつなんどきでも
眼をつむるとわたくしは大きな蝶のやうな陰翳（かげ）を瞼のうへに感じた
わたくしはそれが何であるか知りたいと思つた
が　眼をひらくと相変らずそれは
リベラルをひらいたとなりの金縁眼鏡であつたり
灯の点いたショーウインドのガーベラであつたりした
何であるかひたすらにわたくしは知りたいと思つた
そして再び眼をつむるのであつた

あれから一年ほど経つた今
みづうみの反射が葦の穂にゆれる斜面をくだりながら
ふとこんなに思ふのである
黒い蝶のような陰翳――きつとそれは遠くからほほえみかける見知らぬ運命のやうなものであつたか
或ひはそれよりもなによりも
伏目がちにわたくしと肩を並べてゐるあなたの視線ではなかつたらうかと

あぢさゐ

あぢさゐの傍にゐるとわたくしの目や眉はあおい雫でぬれるやうに思はれた　ざつ草のはびこるに任せた庭は　ひすいのやうで
そこびかりのする　ちゆうごくの古い傳説のきさきでも立ちあらはれるやうに思はれた

ガス燈がぼつとともる公園の霧に上気した笑靨をあづけて行つた
　ひとよ

遠い現実はヴエネチア硝子の天窓に澄む秋の陽射し
觸れられない愛情は大理石の蔭
四つのソナタに控目な拍手をおくつてポンチの葡萄を口にふくみ
　ました

これは可憐なコスモス　純愛のバラ
あれは厳粛なヴアイオレツト

老令のピアニストが撒きちらした花々を
丹念にあつめては髪に結へてやるのですが
なぜか色褪せて萎んでしまふ

せめてこれは狂ほしいアスター

ああそのとき
私の心がしんとしづかになつたのです
淋しさを堪へた目差しに

この世に生を享けて二十五年
音楽を聴き詩を書いて
何と言ふうかつな私でしたでせう
つまり
愛とは場所を用意することでした

瞼

シルフイールドの物語を一つして
少女を楡の木蔭に見送つた
林の奥には小さな花が白いしとねのやうに咲いていた
その中に際だつて
濃いむらさきのすみれが咲いているので
あたりはむらさきのインクを零したやうだつた
すみれには
紋白蝶がぎつしりと群れていた
わたくしが近づくと蝶はいつせいに舞ひたつて
そのあとにむすうの涙の斑点が光つていた

霧

寒い晩だつた
ぼくは
いつちよらのジャンパーの
袖のうすぎれたやつを引かけて
君は靴ずれが
しきりに痛いとうつたへた
ちやうどそれは
　おしるこの季節
　やきとりの季節
　ちよつといつぱいの季節
でもお金がないので

何を生みおとす
さより　くらげ　しやこ　さんま
支那焼の壷　阿古屋玉　サンクタマリア
海百合の牙　トルソのかけら

もえる季節
うたふ季節

眩惑の水脈
悔恨の水脈

眼を灼くひとみ

追憶の風はマストに砕け
アブサン　リキユウル　ジン

〈おまへの髪にオリーヴが稔り　ましてぼくのパツシヨンは　海
溝ふかく藻の花にひそみ　琥珀の死　をてのひらに掬ふ〉

不眠の心臓について

一日の不協和音に切りさいなまれて
喘いでいる
私はちひさな心臓
不眠の私は
さながら落下奔騰する原始の海です

海は明滅する夜光虫の瞳です
海は交尾するイルカの遠吠です
海は穴のある冷酷な胸です
海は忍冬によぢる黒い蛸です

ああ私は
時間に乾いた顔のない口
その自殺のために詰められた黒煙火薬
その虹を呼吸することのない癩者の鼻
その粘膜に溶解する一匹の精子

たとへ狂奔するオルゴールのやうに
この四つのふいごが
母の乳房のあまい追憶を呼んだとしても
足　足と足の指と　指　指と指の爪と――

おのおのが非常の距離を歎くオーロラの下
海蛇のうねりが私の葬送曲を奏でではじめる頃
一個のふやけた水母のやうに
暁ちかい
倦怠の岸にうちあげられる

黙示

昨日のやさしい日記を作つたひとよ

斜面にて

青春――そんな言葉を思つてみる　目の下は鉛色の湖　ここはいちめんに熟れる麦の香　舌でふれるくちびるはあひかはらず生臭い

どさりと身を投げ出す　すると扁平なぼくの胸の面積だけ　あれちのぎくの花が散り　青春――草色の声で絶えずつぶやく向ふの雲よ

目をつむると　青春――そんな言葉がかげろふのように顳顬に疼くので　こみあげる悲哀は　にはかに冷たい薄暮となってぼくの靴に忍びこみ　白い蹠がぼくから最も遠い位置で　しびれるような〈死〉を感じていた

白い毛物の唄

何時ごろから棲みついたのか　僕の頭蓋の縫ひ目に　むくむくとした白い毛物よ

そやつが　右の窓をひらき　伸びをし欠をすると　薔薇の媚態が身をすくめる

何のことだ　僕の片方の眼窩が　孔雀をくわへて疾駆する　豹のように光るからと言つて

そやつが階段をくだり　動脈に尿をながすと　蝙蝠が警笛を吹く

何のことだ　須臾の酩酊が闇にゑがく　絶景断崖　そのとつぱなで　僕の屍骸が　驕慢な波濤に挑むからと言つて

そやつが腹を空かして　ぶよぶよの脳髄をむさぼると　偶像は一擧に崩れ　ぶざまに僕は　漆黒の天鵞絨につつまれた　羞恥の花園に転落する

其処でああ　僕はこころぼそい異邦人なので　こみあげる郷愁は唱ふのだ　エイゴウカイキの夜の唄を　ひきつつた自嘲とともに

その安息のためでなく　その太々しい罪と悔恨のために　白いむくむくとした毛物の唄を

青い時間

握つていたものは
うねつていたものは
潮流だけではなかつた

ぐつと傾く
海の喪服に貼りついた薔薇
そのはなびらが
荊棘の光をはじくので
さ青に濡れる
眞晝のデツキ

かもめ　かもめ

のみにくい脊椎骨は　おまえの傾斜です
こんなパロデイをごぞんじですか

藻がゆれて
藻がゆれて
イマージユの舟の
解纜です
とびうをの鰭が月をたたいて
そんな銅鑼の音の
解纜です

火山帯

ぼくを呼び　おまへを呼ぶ
郭公の　筒鳥の　高原の　朝虹の
おまへ　ぼく
これら砂丘に
所在ない　左右の手の　空間の
不安が　期待が
ぼくであり　おまへである
火山灰を　掌にすくふ
〈孤独〉
なのでせうね

やまひだの　みづうみの　傾斜の
砂粒が　照りかへす
スペクトル　存在の翳
岩くぼの
イワレンゲの　キンポウゲの　ナデシコの
これらひ弱い
花たちの　かげろふの　蜜蜂の
いとなみに
ぼくが知り　おまへが知る
〈告白〉
なのでせうね

忘れていたもの　かがやきが
これら火山帯に
ぼくを呼び　おまへを呼ぶ
古いラウテの　木魂のように
目路はるかな　天際の
それは　久しい年月　用意された
ぼくであり　おまへであり
蘚苔の花が　ぬれ　こぼれ　琥珀のひかりとなる
みづうみの　やまなみの
色收巻それとも　ああ
〈喪失〉
なのでせうね

総べては愛と憎しみの　明日　の瞳孔
ほむら　芽吹く新樹に　はためき

のすたるじあ

いやはての空の紺青　色あせた昨の日のるうじゅ　そのあらべすくの片隅に　からくも息づく青春のなまぐささ
まして晩春ののすたるじあ　照りかへす渚のいさご　まさぐる野苺のいるみねえしよんは　わたくしの脳室をぬらすが

あはれ花百合に
ひしめきまつわる
ひめこがね
はなむぐり
てんたうむし

草色の拒絶は
牧羊神(ぱん)のうまいに疼くかな

また　季節のはあぷ潮騒にはじけ　めろでいの坩堝は岩むらにくだけるが　くろい日輪あまぎわの鉢をくつがへし　ふりこぼす微粒子群　すぺくたくる　その淫奔　阿古屋貝　その蕩漾――
眞晝だけがはてしないなぎさ　わたくしはしやりこうべに　七彩(ないろ)の郷愁をきざむ

解纜

たとへば　すべての色が一つに溶ける　暗い重い原始の海に呼吸して　燐光を放つ　たつたそれだけが　あのかなしい深海魚のやうに　僕らに残された　愛情の最后のあかしであるとしたら　ごらん　僕の指が描く　燐光の輪の　覗きめがねの　模細工の風景

紅いとさかはいそぎんちやく
さんごは白い象牙
碧い藻は子鹿の尾のやうに
揺れるでせう
そして
浮遊微生物のなきがらは
ああ
清潔な玻璃となつて――

觸れられない声が　觸れられない愛情を生むやうに　僕は言ふだろう　お前の眸の　オパール　くれない　僕の耳の　蝸牛　あげよう　そこで　波が常に黙らないように　單純な三つのリトムが奏でられる〈祈禱　戒律　宿命〉リトムはリトムを呼び　僕らは　そのとりこになつてしまふ

けれど僕らは　羨みはしまい　あの月明の海原に僕らが見た　雌を追ひ雄をしたふ　さんまの　かつをの　健康な齒を　おまへよ何と説明してよいか　この狂ほしい夕闇が　かへつて　束の間の悔恨を　快活なものとするやうに　僕の脳漿が　一刷毛のクリムソンでおまへの花びらを　より清潔に彩ることができるなら　僕

星野徹の未刊詩集『天の蠍』

菅野弘久

星野徹（一九二五-二〇〇九）の没後、茨城大学附属図書館に運ばれた蔵書と原稿類から見つかった詩論集の目次案については、『常磐短期大学紀要』第四二号（二〇一四年）で「星野徹の未刊行論集」として報告したが、[1] 本稿では、同じく資料整理中に発見された詩集『天の蠍』について取り上げる。この詩集は、A4版の原稿用紙六十二枚を袋綴じにして鋲でとじた体裁のもので、表紙に〈詩集　天の蠍　星野徹〉とあり、三十篇の詩が、ライトブルーのインクの万年筆で書かれている。本稿の目的はふたつある。ひとつは、星野徹の初期の創作活動（一九四〇年代後半から一九五〇年代前半）を論じる際の資料として、作品そのものを活字化して残しておくことであり、もうひとつは、現時点で手にしている関連資料から書誌情報を抽出するとともに、詩作品の特徴を整理し、詩誌『白亜紀』創刊（一九五七年）後の創作活動の、いわば予表となるものを確認することにある。

＊

天の蠍

星野　徹

新樹

ほむら　芽ぶく新樹に　はためき
蝶　花々の美酒に　よひ　くるひ　ひらく
虹となり　いのちある　皐月の虚像

めくるめく　草丘の　一木一石
悔ひ知らぬ　化粧の象徴　なほとほく
時の重み　を秤る　手と手の環

黒い苺の　血筋の　ほめき　ささやき

二〇一四年十二月二日受付
KANNO Hirohisa　キャリア教養学科・教授（イギリス文学）

報　告

保育士養成課程における実習指導の在り方
―施設実習事前指導における実践と課題―[注1)]

室谷　直子

1．はじめに

保育士は、児童の保育とその保護者の保育に関する指導を行う専門職としてその資格が児童福祉法に規定されている。保育士の職域は一般に知られているより広く、保育所において小学校就学前の子どもたちを保育するだけでなく、児童福祉法に定められた児童福祉施設の専門職員としても重要な役割を果たしている。本学科の卒業生は、その多くが出身地である茨城県内で保育士や幼稚園教諭として就職する一方、例年少数ではあるものの確実に児童福祉施設に卒業後の活躍の場を得ており、地域からの本学科に対する施設保育士養成の期待は決して小さくない。

一方多くの保育士養成校において指摘されるように[1)]、本学においても保育者をめざして入学してくる学生の多くは、児童養護施設や障害児入所施設等の児童福祉施設が保育士の職域の範疇にあることをほとんど知らず、保育士資格取得のカリキュラムにある「保育実習Ⅰ」において施設での実習が求められることに対し、当初驚きと戸惑いを示す学生も少なくない。このような状況のなか本学科では、学生が初めて経験する学外実習として、一年次の終盤に「保育実習Ⅰ（施設）」（以下、施設実習）が実施される。

現在筆者は、施設実習の事前・事後指導を行う「保育実習指導Ⅰ（施設）」の科目担当として授業を担当しているが、学外での実習自体が初めての学生を施設実習に送り出すにあたり、実習の内容から生活全般の注意点に至るまで、扱う内容が実に多岐、詳細にわたる。

そこで本稿では、この施設実習事前指導について、（１）授業で取り扱うべき内容を検討し現在の取り組み状況と工夫点について論じるとともに、（２）現在十分ではないと思われる取り組みや視点といった課題を明らかにし今後の事前指導をよりよいものとするための方策を検討することを目的とした。本報告では主に2013年９月から2014年３月にかけて実施された授業に基づいて検討がなされた。また、現在学生が実習を行う施設はすべて茨城県内の施設であり、さらに本学科卒業生のほとんどが県内で保育関係の職に就くことから、特に地域で信頼される実習生という視点を意識して本検討を行った。

2014年12月8日受付
MUROYA Naoko　幼児教育保育学科・准教授（障害児保育）

２．本学科カリキュラムにおける施設実習の位置づけ

保育士養成校において保育士資格を取得するためには、『児童福祉法施行規則第６条の２第１項第３号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法』（平成13年５月23日厚生労働省告示第198号）[2] において最低修得単位数として68単位が基準として示されており、当短大ではこれに基づき修業教科目として合計77単位以上の修得を義務付けている。

保育実習は、『指定保育士養成施設の指定および運営の基準について』（平成15年12月９日雇児発第1209001号厚生労働省雇用均等･児童家庭局長通知）[3] に示される保育実習実施基準によれば、必修科目の「保育実習Ⅰ」では保育所での実習２単位､および保育所以外の施設､すなわち乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園での実習２単位の、計４単位の修得が求められており、実習日数はそれぞれの施設で概ね10日、合計して20日とされている。これに続いて、保育所における「保育実習Ⅱ」または保育所以外の施設における「保育実習Ⅲ」のいずれか２単位10日間の実習を行う必要があり、保育実習Ⅰおよび、ⅡまたはⅢの合計２科目６単位、おおむね30日間の実習を実施する必要がある。さらに実習とは別に、実習事前・事後指導である「保育実習指導Ⅰ」（演習２単位）､および「保育実習指導Ⅱ」または「保育実習指導Ⅲ」（演習１単位）の計２科目３単位の実習指導の科目も必修となっている。先述の通り、保育士資格を申請するために本学では77単位以上の修得が必要であるが、そのうち保育実習および保育実習指導の科目は９単位と全修得単位の約12％を占めており、資格取得に関して実習が大きなウェイトを占めることとなっている。

本学科の教育課程において「保育実習Ⅰ」を行う時期は、施設実習を１年次の２月、保育所実習を２年次の６月としている。本報告のテーマである施設実習の事前指導すなわち「保育実習指導Ⅰ（施設)」は１年次の秋セメスター、９月下旬から１月下旬までの約４ヵ月にわたり週１コマ実施している。また、２月の施設実習を終えた後、３月には実習反省会として２コマの事後指導を実施している。

３．事前指導で扱う内容の検討

第１学年の秋セメスターに実施される施設実習事前指導について、扱うべき内容を改めて検討するため、次の３点に基づき授業実践を振り返った。一点めは、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知[3]の中で､授業内で扱うべき標準的内容として示されている｢教科目の教授内容｣である。この中で「保育実習指導Ⅰ」において科目担当者が参考にすべき事前・事後指導の教授内容が示されているが、そこには１．保育実習の意義および目的の理解、２．実習内容の理解と自己の課題の明確化、３．子どもの人権、最善の利益に配慮することや守秘義務といった実習に際しての留意事項、職業倫理、４．実習の計画と実践、観察、記録、評価の具体的方法、５．事後指導に

おける実習の総括と新たな課題や学習目標の明確化、といった内容が挙げられている。これらの内容は、一人ひとりの学生が自分の実習をどう過ごし何を学んでくるのかを、あるいはそのために現在取り組むべき課題は何かを明確にすることが目的であり、同時に実際の実習での動き方、記録の残し方の基本といった、実習の具体的方法を学ぶ場でもある。これらの内容はこの授業の骨格をなすものとして、基本的にすべての項目について触れるよう授業を構成している。

事前指導で扱うべき内容を決定する際考慮すべき事項の二点めとして、本学科が育成しようとする人材像と提供しようとする教育を勘案する必要が考えられた。これらは、具体的にディプロマ・ポリシー（ＤＰ）、カリキュラム・ポリシー（ＣＰ）として大学ウェブサイトにも掲載されているもので[4)]、ＤＰは「大学が教育活動の成果として学生に保証する能力[卒業時の到達目標]を定めたもの」、ＣＰは「入学した学生の学習と成長を、卒業時の到達目標まで引き上げるための戦略を定めたもの」と説明されている。

＜幼児教育保育学科のディプロマ・ポリシー＞

本学科の教育を通して獲得した豊かな人間性および高度な知識と技能を基礎にして、さらに不断に自己研鑽に励むことによって、保育・教育の現場においてコンピテンシーを発揮できると同時に、子どもたちには慕われ、保護者には信頼される保育者を世に送り出します。

１．物事を一面的ではなく、多面的な視点で観ることができる。
２．子どもたち一人ひとりの個性を把握し、保育・教育活動に反映できる。
３．人間関係調整能力を身につけ、誰とでも協働できる。
４．保護者に対して育児に関する的確な助言ができる。

＜幼児教育保育学科のカリキュラム・ポリシー＞

ヒトが人になるには教育が必要です（哲学者カントの言）。同様に、保育者になるにはそのための専門的な教育が必要です。本学科はその専門的教育を入学者全員に等しく提供して、社会的に有為な保育者を養成するための教育課程を編成しています。さらに、教育は学校教育全般を通して行われるべきとの認識から、授業以外の場面においても人間性形成につながる指導をします。

１．自分の得意な分野を拡大するとともに、不得手な分野を意識的に克服できる能力を養う。
２．授業、各種メディア、他者とのコミュニケーション等を通して自分なりの教育観を形成する。

３．教育問題等の社会的事象に関心を払い、それについての自分自身の意見を持ち、それを表現する能力を養う。
４．子どもたちの安全と幸福を第一に考え、そのためには何をすればよいかを判断して行動する判断力と行動力を養う。

保育士養成施設で課程を修了し資格を取得する場合、基本的に身についていなければならない専門的知識と技能はいずれの養成施設を修了したとしても一定の水準を満たしている必要があることは言うまでもない。しかし、教育上力点を置く内容の多様性や一定以上の水準を要求することに関して、さらには専門性を支える教養や人間性の涵養については、各養成校が独自の教育方針と目標を持ち、工夫してオリジナリティーを創出するべき部分であると考える。本学科のＤＰにおいて、当授業科目が貢献しうると考えられるのは、教授内容はもちろんであるが、授業の中で行われる学生と教員あるいは学生同士の相互作用を通して、一人ひとりの個性を尊重する態度や人間関係調整能力を身につけられるように工夫することであると考えている。具体的には、140名余りの受講者に対し、授業内で提出を求める各種提出物やレポートを読むことにより、または学生との直接のやりとりを通し、教員は各学生の能力やニーズを把握し、個別に対応していく姿勢を常に保っていることである。また提出期限や欠席に関するルールを取り決め、それが徹底されない場合のやりとりを丁寧に行い、相手がある事象に関し如何にふるまうべきかを丁寧に指導している。

ＣＰに基づく実践では、不得手な分野の克服能力や社会的事象への関心喚起を促すことを目的として、授業ガイダンス時に施設実習の意義と目的を伝えるとともに、各自の課題を考えさせそれをレポートすることを課した。また、実習配当先の決定後に学生個々が抱く様々な不安に対し、自身のこれまでの生活経験を整理して関連する課題をみつけ解決するための方策を考えレポートする、施設の意義、施設利用児（者）の理解、実習形態（宿泊か通勤か）について自ら調べ知識を得る、といった活動を行っている。

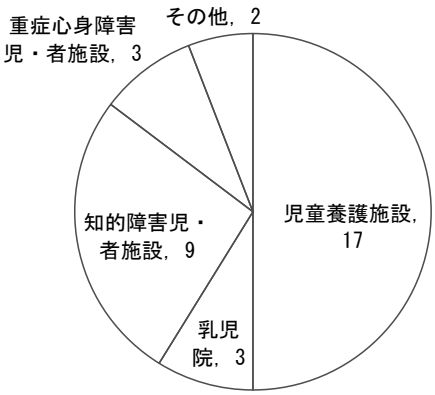

図１　2013年度に学生が実習を行った施設

事前指導で扱うべき内容を決定する際考慮すべき事項の三点めは、現場である地域の実習施設からの要望を汲む必要性

である。参考までに2013年度に学生が実習を行った施設の種別を図１に示した。141名の学生は34施設に分かれて実習を行ったが、その半数は児童養護施設、次いで多いのが障害児入所施設および児童発達支援センターであった。これらの施設からの要望を汲む方法については、実習生を受け入れている県内の施設および近隣の保育士養成校が一堂に会し、保育実習の内容や配当について確認と意見交換を行う会合である「茨城県保育士養成校連絡会保育実習打ち合わせ会」の際に、養成校全体に対して出される施設側の要望を聞き取ることを主に行った。また保育士養成校のみが集まる保育実習打ち合わせ会の際にも、他の養成校の持つ施設実習に関する情報や経験の共有を行った。このようにして収集した受け入れ施設の実習生に関する意見、要望は集約すると次のような内容であった。

・社会的養護、障害福祉といった事項の意味を理解して実習に臨んでほしい
・実習施設や利用者のことを理解してから来てほしい
・掃除、洗濯、調理、雑巾絞りなどの生活体験の不足している学生が多い
・基本的生活習慣や常識が身についていない学生が多い
・共用の道具の使用で周囲への配慮ができない学生が散見される
・日程の相談などで自分の意思を示せない学生が少なくない
・メンタル面が弱く少しの注意によりショックを受け対応に苦慮することがある

これらの内容を整理すると、（１）施設や実習についての知識や理解、（２）生活や常識に関する知識や経験、（３）自己制御や適切な意思表示など内的な成熟度、の大きく三つの要素に分けられ、これらは本科目授業を通して、意識して対応していく必要のある事項であると考えられた。

さらに、地域の実習施設が実習生に対し求める資質を間接的ではあるが知るために、「施設実習評価表」における所見欄を参照した。実習評価表とは、実習施設の担当者が、養成校で独自に定める書式と項目に基づき一人ひとりの実習生について実習の評価を行うものであり、実習の科目担当者はこれを成績評価の際参考とするものである。この評価表の所見欄は、施設における実習生指導の担当者が主に実習における態度や姿勢について自由に記述することから、内容についての客観性や評価項目の等質性は保たれないが、施設種別によらず比較的記述されることの多かった項目は次のとおりであった。

・笑顔と元気さ
・質問、指示を仰ぐこと、対象者への関わりや観察における積極性・意欲
・入所・利用児（者）に対する公平さ
・実習生としての立場の理解

これらの項目は、それが達成されていたことで学生を評価する場合にも、達成されていないことで今後の努力項目とする場合にも指摘されていたことから、施設が実習生に対し求めている資質であると考えられ、事前指導の中でも学生に積極的に伝えていくべきであろう。

このように、事前指導で扱うべき内容を決定する際考慮すべき３点、すなわち厚生労働省の告

示、学科の教育目標、実習の現場である施設の要望を照らし合わせた結果、施設実習事前指導で学生の学びをサポートするにあたり、扱うべき特に重要な項目として次の四つが導き出された。

1．児童福祉施設の社会的意義、利用者の特性、職員構成といった、実習を行う施設に関する知識、
2．意義、内容、記録の方法、職業倫理といった実習に関する基礎的な知識、
3．自己覚知や自己の課題に主体的に取り組む態度といった、人間的成長に関する側面、
4．実習に関連する事務手続きや書類に関する具体的な方法、マナー、常識、基本的生活習慣に関すること

４．事前指導の授業展開

ここで、実際に2013年度の「保育実習指導Ⅰ（施設）」で筆者が担当した 90分×14コマ、1260分について、扱った内容とそれぞれにかけられた時間を分類整理し、３．において述べた「事前指導で学生の学びをサポートするにあたり特に重要な項目」についての学びのサポートがどれほど行われたのか、検討を行った。なお当該授業の受講者は、筆者による授業以外に、施設実習の事前指導の一環として他の保育実習担当教員から保育実習全般に関する注意事項や心構えについて４コマの講義を受けた。

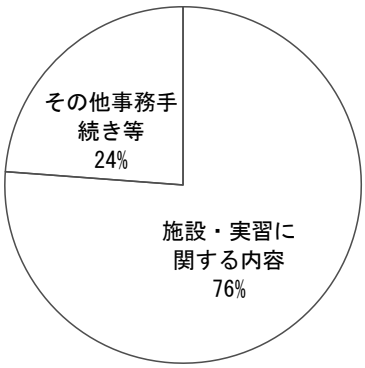

図２　「保育実習指導Ⅰ（施設）」で扱った内容

筆者が授業で扱った内容は、当然のことながらすべて施設実習に関連する事項であるが、それを「施設・実習に関する知識」と「その他の事務手続き等に関すること」に分類しそれぞれの内容を扱った概ねの時間を割合で示すと、前者が76％、後者が24％であった（図２）。限られた全授業時間のおよそ４分の１を「事務手続き等に関すること」に費やすことにやや違和感は覚えるが、その具体的内容は、身上書等の提出書類に関する指導、２月の厳寒期の実習であることから事前に集団接種を行っているインフルエンザ予防接種に関する説明、実習先に提出する身上書に貼るためこれも集団で行っている、個別の顔写真撮影に関する説明、宿泊実習のできる施設の減少および地域の特性から自家用車での通勤を行う学生に対する指導や申請書類説明、細菌検査に関する説明などであった。これは、３．で示した「学生の学びをサポートするにあたり特に重要な項目」における４つめの観点に該当するが、近年常識と思われる事柄が身についていない学生や生活体験の不足した学生の増加が教員間でしばしば指摘され、さらには人々の生活スタイルの

変化や異なる文化圏の情報が容易にもたらされる時代に「常識」自体が揺らいでいるとも思われる中、授業のなかで手続き的なものも含めた、「常識」や生活指導は必要であると考えられた。そしてこれらの指導は、実習を理解することにも大きく貢献しており、たとえば身上書の書き方指導は自身の長所や短所を振り返る機会となり、予防接種に関する説明は施設という場で集団生活をする人々を理解することにつながり、写真撮影では実習生として社会と接する際の身なりや立ち居振る舞いの整え方を学ぶ機会となっている。

残る約４分の３の授業時間を占める「施設・実習に関する知識」について、これを100として内容をさらに分類すると、「施設・実習の理解」41％、「日誌の書き方、実習計画」27％、「心構え・諸注意」13％、「事後指導」19％であった（図３）。これらのうち「施設・実習の理解」は、３．で示した「学生の学びをサポートするにあたり特に重要な項目」における１、「日誌の書き方、実習計画」は同２、「心構え・諸注意」は同２、３に該当し、「事後指導」は１～３のすべての要素を総括する内容であった。

これらのことから、「学生の学びをサポートするにあたり特に重要な項目」のすべてに触れていることが確認され、特に「施設・実習の理解」に多くの時間を割いていることが改めて認識されたが、扱う内容ごとの割合については、実習の成果を改めて評価する中で見直していく必要があるだろう。

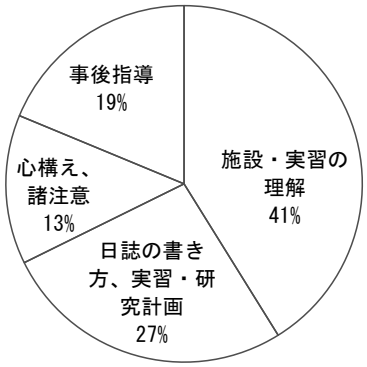

図３　「施設および実習に関する内容」の詳細な分類

５．事前指導を展開する上での課題

施設実習事前指導について、他大学はどのような取り組みをしているのだろうか。先にも述べたとおり、保育士養成系の学生の学力や特性について、量的、質的な変化が指摘されているが、それに対し各校は、アンケートにより学生のニーズに寄り添う[5)]、施設実習中のストレスに焦点を当てた事前指導の検討[6)]、研究課題や実習日誌の書き方を重点的に振り返っての授業改善の取り組み[1)]、授業内容を全般的に詳細に検討することによる授業改善[7)]など様々な取り組みを行っている。これらのどの報告にも、近年の学生のメンタル面の弱さ、施設実習に対する動機づけの低さ、生活習慣等に関する指導に時間を割かれてしまうことがほぼ例外なく記されており、そのような現状に対し、それぞれの担当者が自校の学生のニーズを探りながら施設実習事前指導の授業に工夫を凝らしていることがうかがえた。本学科も決して例外ではなく、学生のニーズをきめ

細かくとらえ、より丁寧な個別の対応が求められており、実習指導において、授業欠席時の連絡の仕方、レポートや書類を期限を守って提出するといったルールの徹底、言葉づかいや漢字の用法、敬語、挨拶や立ち居振る舞いなど、実習に直結する社会生活の基本的事項についても丁寧な指導を心がけてきた。

一方、授業で社会生活の基本事項などの指導を丁寧に行うことにより、それ以外の事項を扱う時間が圧縮されるのも事実である。近年社会の複雑化に伴い、保育士にも虐待、障害、家庭支援といった課題を理解し対応する力が求められてきていると言え、それは施設保育士ではなく保育所の保育士をめざす場合でも同様である。そのような意味からも施設実習の意義はますます大きくなってきているのに、限られた授業時間の中で実習計画や研究課題等の事前指導に十分な時間が取れないというジレンマが生じる。これは、質の保障につながる問題ということができる。このような状況の中で充実した施設実習を実施し、最終的には学科のディプロマ・ポリシーを達成し地域に貢献できる保育士を育成することにつなげるため、一授業にすぎないのではあるが、本授業科目で今後どのような工夫がなされ得るか、これまで論じてきた事前指導の授業で扱うべき内容と、実際の授業展開を照らし合わせて今後の指針について考察した。

６．課題に対する今後の指針

厚生労働省告示にある「保育実習指導Ⅰ（施設）」で扱うべき標準的な内容、本学科のディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー、そして本学科の学生を実習生として受け入れてくれる地域の施設側からの要望を踏まえ、授業の内容を質的に保ちながら同時に多様な学生のニーズを満たしていくために当該授業で今後行いうる授業改善の方向性について、先述した４つの「学生の学びをサポートするにあたり特に重要な項目」に添って以下に３つの指針を挙げる。

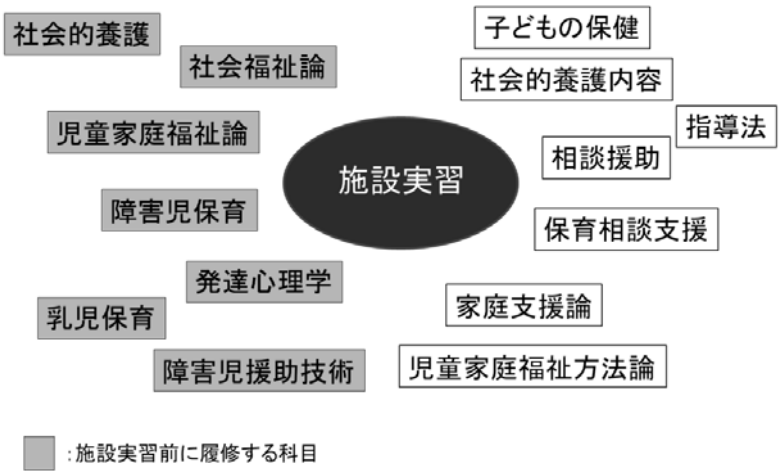

図４　施設実習と特に関連の深い開講科目

最初に、先の観点１，２に相当する「施設や実習に対する知識を身につける」という課題に対し、関連する他の専門科目との連携強化が一つの方策であると考えられた。具体例として、施設実習に関連する開講科目を図４に示す。時間的制約のある中で原理的、理論的内容を詳細に扱うことは実際的に困難でもあるが、たとえば児童養護施設で実習を行うならば最低限知っておかねばならない「社会的養護とは何か」といった内容を詳しく取り上げることは、科目の目的から考えても適切とはいえない。これに対し、現在ほとんど相互的に授業内容のすり合わせを行っていない状況である関連科目間で、互いにシラバスを確認し合うことが考えられる。その上で、別の授業で扱った内容が実習に直結していることを意図的に強調し、学生の知識に有機的なつながりを持たせることで動機づけを高め、教授内容の定着を図ることができるのではないか。また、そのために教員同士で授業参観を行うといったＦＤ活動を積極的に行うことも有効であろう。

第二に、「自己を知ること、主体的な態度を身につける」という課題に対し、授業に能動的に臨むための仕掛け、たとえばポートフォリオの考え方を取り入れるなどの工夫が考えられた。ポートフォリオとは、レポートのような学生の学修の成果をひとまとめにして一覧できるようにしたものであり、事前指導の授業の中で取り組んだ書類やレポート類を自分の学習成果として、電子ファイルにして積み重ねれば電子ポートフォリオとなる。当該授業で学生が取り組みを求められる書類として、身上書、実習施設の法的根拠や内容を調べる課題（図５－１）、自己覚知（図５－２）、通勤経路調べ（図５－３）、実習計画、研究課題の策定（図５－４）、生活技術に関する自己研修レポート（図５－５）、などがある。これらの課題を最初に提示した上で、学生自身が順に保存していけば、実習までに達成しなければならない課題や積み重ねた努力など、今現在の自分の学習の進み具合と、これから必要な努力が認識しやすくなるのではないだろうか。このように、学びの軌跡を可視化することにより、主体的な学びを後押しできると考える。この方法のもう一つのメリットは、学科内の学生間で能力の差が大きい場合に、個々の努力の跡や成長がとらえやすくなることである。これは、学生本人だけでなく教員にとっても、電子ポートフォリオにより学生一人ひとりの成長を個別に確認することができるという利点がある。

第三には、「社会人としての常識、マナー、生活習慣や日常的な手続き的知識」という課題に対し、これまでに述べた実習指導の枠組みの中での取り組みと同時に、学科の教員間で情報を共有し、連携を大切にすることの重要性である。たとえば本学科では、スマートフォンの充電を実習先の電源から行うのは基本的にマナー違反であることを学生に伝える場合、同時に大学の電源から行うことについても同様であることを全ての教員で共有し同じ方針で学生に接するといった取り組みを心がけている。学生との関係の取り方は教員により様々であり、それがまた社会の縮図として広い意味での教育的効果をもたらしていると考えられるが、短期大学の学生は2年間という短い教育期間を経て社会に巣立たなければならないことから、教員もある程度組織的に取り組む必要があると考えている。

実習交流会への参加準備（2013.11.15　5-6 限）

名列番号＿＿＿＿氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1.自分の実習先の施設名と所在地.　１班・２班	
2.「児童福祉法」上の児童福祉施設名称.（又は児童相談所）	
3.「児童福祉法」上に記された施設の目的 （第 12 条、36 条～46 条から必要部分をそのまま書き写すこと）	「児童福祉法」第　　条
4.実習先施設について、自分で調べたこと	
5.実習先施設で実習をしている自分のイメージを想像すると…	
6.施設実習に関して現在もつ心配や不安	
7.交流会分科会で質問したいこと、および聞き取った内容	

図5-1　実習施設の法的根拠や内容を調べる課題

1.「自己覚知」について

自分を知ること。自分の性格や特性について把握すること。

●なぜ必要か：（　　）を理解し受け入れるためには、まず（　　）を知る必要。

→他者と自分とは、（　　）や（　　）が異なることを理解する

（例えば）施設実習に対し不安を感じる　（ 2,3,5,6,7,9,11,12,13,15 ）

施設の利用者さんに対し不安を感じる　（ 1,4,5,8,10,12,14 ）

利用者さんに思い入れが強くなりすぎる　（ 14,16 ）

	その通りでない			その通り
・1 誰とでも話ができる				
・2 好奇心が強い				
・3 体力には自信がある				
・4 人見知りはしない				
・5 人前で話すことが得意				
・6 時間を守れる				
・7 身の回りのことは自分でできる				
・8 人を見た目で判断しない				
・9 施設のことをよく知っている				
・10 異年齢の人と行動する機会が多い				
・11 文章を書くのが得意				
・12 障害や虐待に関する知識がある				
・13 我慢強い				
・14 感情的になりやすい				
・15 親元を離れた経験がある（旅行など）				
・16 影響されやすい				

●自分の強みと弱点、および弱点を克服するために実行すること。具体的に。

図5-2　自己覚知の課題

名列＿＿＿＿　氏名＿＿＿＿

2．通勤経路調べ　～施設までの交通手段等～

・8:15 の出勤を想定し、自宅から施設までの全通勤経路（時間、交通費）を書き出す

・自家用車の使用を考えている人も、まずは公共交通で行くことを考える

→複数の経路を下に書き出すこと！

＜書き方例＞

6：00　徒歩：自宅を出発（バス停まで8分）

6：15　バス：「常磐大学前」からＪＲ水戸駅行の茨交バス（23）乗車（「水戸駅」まで２０分，▲円）

6：48　ＪＲ：「水戸駅」から常磐線いわき行乗車（「高萩駅」まで４６分，■円）

7：34　タクシー：「高萩駅」からタクシー乗車（○○施設まで約●分，××円）

8：00　徒歩：タクシー下車後、門から歩いて５分で○○施設の事務室到着

自宅から＿＿＿園＿＿＿までの行程

◎公共交通の場合

6:05 徒歩：自宅を出発（バス停まで25分）

6:31 バス：「　」から関東鉄道バス　駅行乗車（3分）

6:34 「　」着 → 　行きバス乗車のため徒歩（15分）

7:01 「　」より　行きバスに乗車（27分）

7:28 「　入口」着 → 徒歩で　園へ（20分）

7:48 「　園」到着

◎自家用車の場合

7:20 車：自宅を出発（35分）

7:55 「　園」駐車場 到着

8:00 駐車場から歩いて5分で、　園の事務室到着

＜調べ方＞

・ルート検索（自家用車）：MapFan、NAVITIME など

・バス停や運行ルート、時刻表の検索：ＪＲ等鉄道やバス会社のＨＰなど、バス停検索、時刻表（ＪＲのみどりの窓口、書店でも販売している）、駅やバス営業所で直接聞く、調べる

＊ヒント：役所や病院など公共施設は、たいていバスの路線に含まれています

図5-3　通勤経路調べの課題

1．実習に対する目標・課題は明確ですか？　＊配布資料

・実習日誌の「実習の抱負と内容」および「保育に関する研究課題」について

◎「保育に関する研究課題」（実習日誌）

研究課題①
方法（どうやって“研究課題①”を達成するのか．そのために何をするのか）
研究課題②
方法（どうやって“研究課題②”を達成するのか．そのために何をするのか）

図5-4　研究課題の設定

保育実習指導Ⅰ

お手伝い

項目	日付	内容	結果	課題
お茶を入れ、飲んでもらう。	12/29	● 急須でお茶を入れ、家族に飲んでもらう。	お茶の色が出るまで時間がかかり、渋くならないようにするのが難しかった。	今度お茶を入れるときは、もう少し時間を置く。また、飲める程度の量を入れる。
洗濯物を洗濯する。	1/5	● 色や素材を区別し、洗濯機に洗濯物を入れ、操作し洗濯機を回す。	素材によって洗い方が変わり、大変だと感じた。洗剤も種類があって一人でできるようになれてよかった。	素材によって洗い方が変わるのを分かるようになる。また裏返しにするものやネットに入れて洗うべきものを分かるようにしたい。
洗濯物を干し、たたむ。	1/5	● サイズによってハンガーを変えて干す。 ● 乾いたら、たたんで所有者別に山にする。	かたちがよれないように干すように考えながら干した。 大きい物やたたみ慣れてないものはたたむのが大変だった。	靴下の干し方に注意したい。また型崩れしないようにハンガーを選ぶ。 たたむときはしわが出来ないように心掛けたい。
雑巾縫い	12/28	● いらない布を探し、ミシンで縫う。	ミシンは使えたのですんなりできた。	水分が含みやすい物や、家庭で使うので傷つかないようにごわごわしていない布を選ぶようにしたい。
雑巾を絞り、拭く。	12/28	● 水に入れ、水分を含ませ絞り、床を拭く。	少し長く置かないと水分を含んでくれなかった。床を拭くのでものすごく絞った。 床を拭くことは楽しくできた。	汚れがついても裏にして使えるのに、わざわざ洗いに行っていたので、次やるときは出来る限り一回で雑巾全面を使う気持ちでやりたい。
食器を洗う	12/27	● 食器を洗う。	水に浸していなかったものはなかなか汚れが落ちなかった。	食器を洗う前にあらかじめ水に浸しておく。洗う時に細かいところを注意して洗う。
食器を拭き、戻す。	12/27	● 洗ったものを汚れが落ちているか確認して拭く。 ● あった棚に戻す。	きちんと洗えてない物もあり、ここできちんと確認することの大切さを知った。思っていたより元の場所に戻すことが出来た。	少し時間を置いてから拭くと水気がなくなるから少し時間を置くか、お湯で洗う。 乾いている布巾があるか確認する。

図5-5　生活技術に関する自己研修レポート

７．まとめ

施設実習は本学のカリキュラム上学生が初めて行う学外実習であり、その事前指導では多様な内容を丁寧に扱う必要がある。本稿では経験や能力が多様な学生の学びを効果的にサポートする方策を検討するため、授業で扱うべき項目を明らかにした上で、現在の実習事前指導の授業内容と方法を分析し、さらに課題と今後の指針を検討した。その結果、関連する科目同士の連携強化を行うこと、主体的な学びを促す仕掛けの工夫を行うこと、教員が連携して生活面でもサポートを行うといった改善点が考察された。今後は、得られた指針に基づきさらなる授業改善を行い、地域から信頼される実習生を育てることを通し地域から信頼される保育者を育てていくため、保育士養成校として果たしうる役割と方法を引き続き模索していきたい。

注

１）本稿は、平成25年度常磐短期大学ＦＤ研究会での講演を加筆修正した

参考文献

１）志村聡子・田畑光司（2009）保育士養成課程における実習事前事後指導－初めての「施設実習」に向けた動機形成への取り組み－，埼玉学園大学紀要（人間学部篇）(9)，305-311.

２）厚生労働省（2010)「児童福祉法施行規則第6条の2第1項第3号の指定保育士養成施設の修業教科目及び単位数並びに履修方法」平成22年厚生労働省告示第278号.

３）厚生労働省（2003)「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」雇用均等・児童家庭局長通知（平成15年12月9日）．一部改正　雇児発0808第２号平成25年8月8日.

４）常磐大学・常磐短期大学ホームページ「常磐短期大学ディプロマ・ポリシー」「常磐短期大学カリキュラム・ポリシー」http://www.tokiwa.ac.jp/about/disclosure/cp/index.html. 2014.11.28.

５）矢野洋子（2011）保育士養成における施設実習の意義と事前指導に関する検討，九州女子大学紀要（48-1)，129-138.

６）清水里美・吉島紀江・志澤康弘・藤本史（2012）保育士養成課程における実習指導上の留意点-施設実習の事前指導における教育内容の検討－，平安女学院大学研究年報（13)，19-28.

７）石山貴章・安部孝（2008）保育士養成機関における「施設実習」の現状と課題（Ｉ）－短期大学「施設実習」に向けた事前指導を通して－，VISIO（38）,157-170.

翻　訳

小説と言語の関係をめぐって
――フランク・トゥーイの場合

村松　俊子

日本においてはほとんど紹介されることのなかった20世紀のイギリス作家 Frank Tuohy（1925～1999）だが、生前に５つの大きな文学賞[1]を受賞している。その中で最後の受賞となったのがBennett Award（1994）である。

これはアメリカの季刊文芸誌*The Hudson Review*主催による文学賞で、1976年から1994年にかけて２年毎に10人の詩人や作家たち[2]に与えられている。授賞の目的を、本来受けるべき十分な評価が進んでいない作家たち――ある意味において作家としての経歴上、不当な処遇下にあるものたち[3]――を称えることにあるとしている。

ベネット賞は1994年以降廃止されたため、トゥーイにとって生涯最後の文学賞は、期せずして「ハドソン・レヴュ」にとっても最後のベネット賞授与となった。

受賞の翌年の1995年6月13日、ニューヨークで開かれた記念ディナーの席上でのトゥーイによるスピーチ〈Acceptance Speech〉が、恒例に従って同年の「ハドソン･レヴュ」[4]に掲載された。

トゥーイはその冒頭で、ベネット賞を授かったことは名誉なことであるとし、その理由を次のように述べる。それは、これまで世界の関心が低く、扱われることの少なかった文化や社会を表現する作家たちをベネット賞が評価してきたことである。トゥーイは、異なる言語文学に対する価値体系への視野を広げるためというベネット賞の趣旨に賛同し、受賞の栄誉を享受している。

さらにそれまでの受賞者たちの中でも、特に英語圏以外の文化圏を背景に持つ作家としてV.S.ナイポール（1980年受賞）やナディーン・ゴーディマー（1986年受賞）らノーベル文学賞受賞作家たちの名を挙げ、1980年代を代表して評価された作家たちと同じ賞を受ける名誉を強調するのである。これら２人に匹敵するほどの身ではないとしながらも、倫理観や価値観の異なる集団同士の衝突をテーマとする点で、そこに共通するトゥーイ自身の関心を以下のスピーチでは語っている。

2014年12月2日受付
MURAMATSU Toshiko　キャリア教養学科・非常勤講師（イングリッシュ・リテラシー）

「1994年ベネット賞受賞記念スピーチ」

フランク・トゥーイ

今年のベネット賞に選ばれたことを大変光栄に思います。これまでに選ばれた作家たちを眺めると、十分に理解されてはいなかった文化や社会、それを表現する言語・文学にまで領域を広げた人たちが含まれているからです。特にV. S.ナイポールやナディーン･ゴーディマーのことです。彼らの功績の数々に追いつこうなどと思ったことはありませんが、私はいつでも、故国からの離反や疎外によって生じる倫理観の衝突に関心を持ってきました。

幼年時代の私の周辺には、道徳的相対主義といえるものがありました。南イングランドに育ったとはいえ、私は家族からの相反する２つの影響力を感じていたのです。父方はアイルランド系カトリック、凝り固まってはいても禁欲的ではありません。母方は高潔な慈善行為を旨としたスコットランド聖公会。近年、両派は英領インドにおいて接近しつつあります。インドの影響は私の一族に限られたことではありません。当時は、東洋から移住した両親を持つ幼友達がいて、彼らは祖父母と共に東洋で休暇を過ごしたり、また家には真鍮の打ち出しや銀の食器が飾られたりしていたのです。彫刻が施された座り心地の良くない家具、ずらりと並ぶ象牙細工の象、時には崩れかけた虎の皮などもありました。

このような影響は私たちの世代では珍しいものではないのです。ラドヤード・キプリング[5]はすでに時代遅れで、学校で賞賛されたのは、やはり次々に他の大陸を小説の中で息づかせる作家たちでした。サマセット･モーム[6]、E. M.フォースター[7]、グレアム･グリーン[8]、ジョイス･ケアリー[9]、記憶にあるのはこんなところです。自分の国や階級について書かれたものを読みたければ、ロザモンド・レイマン[10]、アイヴィ・コンプトン=バーネット[11]、エリザベス・ボウエン[12]たちがいました。これらの女流小説家たちは独自の優れた手法を持ちながらも、セックスに関しては卒直さに欠けるので、いささかがっかりしたものです（意気盛んな若いヒロインたちも本音では、求めているのか、いないのか）。イングランドについて読みたければ、ジョージ・オーウェル[13]がいます。できれば小説以外のほうをお勧めしますが。しかしいわゆる「日常生活」[14]、真のモダンライフの感触といえば、その源はひとつしかありません。アメリカです。

当時は、読みたいアメリカの書物を手に入れることは極めて困難でした。ロンドン大空襲[15]でヘンリー・ジェイムズ[16]の在庫は全て焼失し、それ以降絶版のままだったのです。ある友人、彼はカナダで爆撃機パイロットとして訓練中でしたが、色あせたモダンライブラリー版[17]の『ある婦人の肖像画』[18]を持ち返ってくれました。当時の私たちは高邁な心を持っていたのです。ウィリアム･フォークナー[19]の書物もやはり入手しがたいものでした。F. L. アレン[20]の『オンリー・イエスタデー』[21]の中で、忘れかけていた作家フィッツジェラルドの名を発見しました。その後1948年になってヴァイキング版[23]の『ポータブル・フィッツジェラルド』[24]を見つけたのです。この序文でジョン・オハラ[25]が、パール･バック[26]のノーベル文学賞受賞を酷評していたので、スコット・フィッツジェラルドのような優れた作家でも、スウェーデンのイェラボリ[27]では無名だ

ということを知ったわけです。それにしても、『ポータブル・フィッツジェラルド』を買うことができたのが、そのイェラボリでだったというのは奇遇でした。当時のイングランドでは手に入らなかったのですから。『ギャツビー』[28]の１行１行が、隅から隅までたちまちのうちに私の記憶に住み着きました。

「巨大なカウチが、２人の若い女性を乗せて、まるで係留された気球のように浮かんでいた。２人とも白いドレス姿で、それは波打つようにひらひら揺れ、家のまわりを一乗りして、たったいま風に吹かれ戻ってきたようだった。」[29]

それからギャツビー邸でのパーティ招待客リスト、そのあとに出てくるシーンがこうです。

「シャツだわ、アップルグリーン、ラベンダー色、薄オレンジ色、インディアンブルーの名入りの――。デイジーは身をかがめて、シャツの中に顔を埋めると、激しく泣き出した――悲しくなってしまったの、だってこんなに、こんなに美しいシャツをこれまで見たことないんですもの。」[30]

しかしフィッツジェラルドは数年のうちに、いわゆる文学研究の対象となってしまい、花の盛りはほとんど終わってしまったのです。

第２次大戦後には、セーヌ河岸の古本屋でなら、もう１人の世間に顧みられない大家イーディス・ウォートン[31]のすり切れた本が、確かタウフニッツ版[32]で手に入りました。20年後にR. W. B. ルイス[33]の手による見事なウォートンの伝記[34]の出版をみるまで、彼女の秀作[35]のほとんどが人目を引くことはありませんでした。スコット・フィッツジェラルドと同じように、大好きな一節が記憶に残っています。『国のしきたり』[36]の中で、主人公のアンディーン・スプラッグ[37]がフランス貴族社会に嫁ぐという事態は、アメリカ作家による見事な異文化解剖です。アメリカを外側から見る者にとっては断続的なアメリカ文学の魅惑を決定づけるのが、このエピファニー[38]の手法といえます。血筋を辿ることは重要ではありません。たとえば、フィールディング[39]に始まり、サッカレー[40]、イヴリン・ウォー[41]、アンソニー・ポウエル[42]まで、あるいはスモレット[43]に始まりディケンズ[44]、H. G.ウェルズ[45]、V. S.プリチェット[46]というように。私から見ると、アメリカ文学作家たちは、ひとりひとりがおのずから輝き、燃え尽きる星の集団のようです。私にはメルヴィル[47]とポー[48]の、そしてホーソン[49]とウォルト・ホイットマン[50]のつながりは見いだせません。それはエミリー・ディキンソン[51]とウォルト・ホイットマンを比較するようなものだからです。ヘンリー・ジェイムズは、ありとあらゆるものの影響を受けて、自らを創造した作家です。どのページを開いてもアメリカ的というよりヨーロッパ的といえるでしょう。

近年ますます意外な真実が明らかになってきています。いまでは、私はヘミングウェイ[52]にあっては、初期の作品を除いては全く触れたくありません。代わりになるのが、サリンジャー[53]、アップダイク[54]、ウェルティ[55]、ポーター[56]、チーヴァー[57]、カーヴァー[58]などでしょう。それから注目すべきはウラジミール・ナボコフ[59]のとてつもない他文化移入で、そのスタイルの獣臭さはイギリスとアメリカ両方の作品に辿ることができます。（コレット[60]がどこかで書いているように、口当りの良いものは飽きるものです。）

３つの言語と４つの文化を思いのままに操るナボコフは、結局重要なのは言葉そのものだということを思い出させてくれます。イギリス英語、私が書こうとするものですが、これは穏当な中立的立場を維持するのがねらいなのです。ですからイギリス英語で書かれた研究書は、アメリカ英語によるものより平易で堅苦しくはありません。それにしても実にうらやましいのはアメリカの小説家や短編作家です。「話し言葉」が何と活気に満ちていることでしょう。おそらく彼らはいまなお、ハックルベリー・フィン[61]からその言葉を受け継いでいるのではないでしょうか。

私たちの主題や強迫観念が、たとえどのようなものであれ、共に分かち合うわれらの偉大な詩人、W. H.オーデン[62]こそがそれを要約しています。

時は（‥‥‥）たちまちのうちに無関心となる
麗しきものには

言葉を称え　許しを与える
言葉を生かす　人みなに（‥‥‥）[63]

このような立派な賞を頂いたことで、私も一度だけは許しを与えられたのでは、という思いがいたします。

〔上記は、フランク・トゥーイが「ハドソン・レヴュ」主催の1994年ベネット賞授賞式ディナー（1995年6月13日、ニューヨーク）でのスピーチである。〕

*

ベネット賞受賞スピーチにおいては、トゥーイにとっての「書く」テーマが、異文化同士の倫理観のギャップであることが明確に述べられている。それが幼年時代の家庭環境に端を発し、当然ながらそこにはイギリスの歴史も作用していることに触れるのである。トゥーイ創作の原点は作品の「場」と「その場にいる人」の対照、すなわち異境や異なる文化世界に身を置く人々の逃れられない葛藤を描くことである所以もこのスピーチに見ることができよう。

ところでトゥーイの場合、作品を通して以外に自身の言葉で文学や創作に関して論じたケースは稀少である。幸い上記のスピーチとは別に貴重な文学論の１編があり、それはトゥーイの創作への姿勢と、創造の論理を確認し、トゥーイ文学理解の助けとなるものである。各国で教壇に立つ傍ら執筆を続けた作家トゥーイにとって、フィクションとは何か、言語とは何かの答えの一部が、以下に展開する「フィクションと言語について」[64]から明らかにされる。さらには創作者としての心構えはもとより、それを支える主に英語圏の作家たちへの独自の評価を理解しえよう。

「フィクションと言語について」

フランク・トゥーイ

ここではいくつかの問題について考えたい。それは作家、研究者、文芸評論家たちが、英語で書かれたフィクションを扱う場合に共通して抱える問題である。

議論の始まりを19世紀にみることができる。それは1866年から1876年にかけて、ギュスターヴ・フロベール[65]とジョルジュ・サンド[66]が交わした書簡[67]に端を発する。フロベールの見解によれば、言語と文体は小説執筆の本質的要素である。彼にとっては、１編の小説を執筆するには何年もかかり[68]、創作とは終わることはなく、断念させられるものなのだ。一方ジョルジュ・サンドにとって小説とは、アイデアや心に浮かんだことを伝達する機械にすぎないのである[69]。

いずれの形態にせよ、この議論は継続し、ヘンリー・ジェイムズ[70]にいわせれば、「芸術こそが生命を吹き込み、興味をもたらすのである」。一方 H. G.ウェルズは、自身の小説は考えを表現する道具にすぎず、早晩時代遅れになるのだろうと考えた。イヴリン・ウォーは「書くことは人物研究ではなく、言語使用上の訓練と考えており、私はこれに取り憑かれている」と記している。C. P.スノウ[71]がこれに同意するはずもないが、作家としての知名度だけから判断すれば、ウォーの言う「強迫観念」の賛同者に軍配が上がるのではないだろうか。それにしても、ポーのような悪文家がどうして巨匠の地位についたのか、理解に苦しむところである。はじめはフランスで、のちに日本においても。（ハロルド・ブルーム[72]は近年になって述べている。ポーは神話を作ったが、神話が生まれるのは必ずしも名文だからではないと。）他にも偉大な作家とはいえない偉大な神話作家がいる。「シャーロック・ホームズ」の産みの親コナン・ドイル[73]や、『指輪物語』のJ. R. トールキン[74]などがそれに入るだろう。

もし小説の最も重要な特性がその言語にあるなら、詩と同様の方法を使って、小説を評価することも可能だろうか。しかし小説家の使う言葉は、現在の世の中、つまり生きることそのものと結びつきを持つものである。それは詩人の使う言葉の中には存在しない。たとえば、ジョン・ダン[75]の詩編「おはよう」を学生と読んでいた時のことだった。この詩編は、恋人たちが目覚めた朝に、詩人が恋人宛に極めて込み入った己の心象を告白する場面をうたっている[76]。恋人の女性は誰なのかと学生が尋ねたので、そのことは重要でないと答えた。小説作品の場合ならそうはいえなかったと思う。ヒロインの名前がわからない小説など実に退屈だし、おそらく存在はしないだろう。

もし小説が本質的に言語であるなら、翻訳小説はどうなるのだろう。翻訳によって失われるものはたくさんあるが、これは衆知のことだ。芸術作品が伝達されるには、翻訳者は文学者でなければならない。しかしそれはごくまれなことで、翻訳者が作家でもない限りあり得ないはずだ。だが幸い小説の面白さとは、芸術的価値はさておくとして、翻訳によっても発見され得るのではないか。

偉大なイギリスの批評家 I. A.リチャーズ[77]がはじめて言語を体系化し、それまで大いに混乱を呈していた文語に関する諸問題を解明した。まずリチャーズは言語を２つのタイプに分類した。科学的タイプと感情的タイプである。科学的タイプとは指示的言語､つまり実体の外側に言及し、指し示す言語である。たとえば生物の実験クラスでカエルの解剖方法を教える時、作業中に涙を流すにはおよばないというわけだ。一方感情的言語は暗示的、あるいは言外に意味を示唆するものであって､とりわけ何かに言及する必要はない。最も感情的な言語は叙情詩の言語なのだから、私たちは作品鑑賞のために詩人の恋人の名を知る必要はないということになる。

I. A.リチャーズの唱えた２つのタイプは、のちに不完全であることが明らかになった。科学的言語と感情的言語は１から10の段階でとらえたほうがよいのだろう。１番目は教本や説明書。書棚を組み立てる時や新しいカメラの使い方などを知る時のものだから、指示には正確さが不可欠である。２番、３番、４番は歴史や哲学を教えてくれる言語だ。指し示すことも重要だが、感情的要素、すなわち表現スキルや言葉の選択などがしだいに意味を持ってくる。哲学者や歴史家の中には、読まれていても時代遅れだったり、誤っている者もいる。カテゴリー５番，６番，７番が小説から短編へ、それから詩へ、そして叙情詩の10番へと移る。S. T.コウリッヂ[78]は、より単純にこう分類した。「散文とは適切な場所にある適切な言葉。詩とは最適な場所にある最適な言葉[79]。」

この種の分類は英語の場合に最もよく機能を果たす。というのも私たちは異型の文語を持ったことがないからだろう。シェイクスピア[80]は同時代の言語を用いて、より巧みに使いこなした。一方でフランス演劇のコルネイユ[81]やラシーヌ[82]は、日本の古典演劇と同様に独自の言語を用いた。英語は、書くための第一段階から次の段階へと進み、間断なくどんなスタイルでも状況に合わせて採用する。

偉大な英語の小説にこのことが現れている。デフォー[83]やスイフト[84]における簡明な指示的英語や身体の細部を描写したもの、さらにヘンリー・フィールディング[85]におけるパロディや舞台言語の要素などである。ロマン主義運動[86]は詩と散文との区別を取り除くこととなった。だから散文、韻文いずれにも詩情が込められている。たとえばディケンズ[87]やブロンテ姉妹[88]の小説には詩的イメージがあふれているが、サッカレー[89]やトロロープ[90]の平明な散文では、感情の激しさが抑えられている。

ヘンリー・ジェイムズやジョゼフ・コンラッド[91]同様に、ジェイムズ・ジョイス[92]やヴァージニア・ウルフ[93]には最高レベルの洗練された小説言語が見られる。遠大な道のりを超えた末に到達できたことだろう。

アカデミズムとは縁遠い世界では、奇妙な現象が名声ある作家の身に起きている。ヘンリー・ジェイムズ個人の逸話のほうに好奇心をそそられる人たちが存在し、ヴァージニア. ウルフの日記や手紙にたくさんの人が飛びつく。リチャード・エルマン[94]の著したジョイスの伝記[95]は、ジョイスの小説『フィネガンズ・ウェイク』[96]と格闘するよりも、もっと多くの読者の関心をつかん

だのである。

偉大な作家とおぼしきジョイスは、あらゆるものに関して、その物理的特徴を正確に記述することに心血を注いだ。一方ジェイムズ、コンラッド、ウルフにおいては現実の皮相には関心も情熱も示さない。彼らは小説家の言語が二次的な世界を描くだけではなく、また創造するということを忘れている。しかし創意あふれる小説家もおり、彼らは現実の皮相からほんの少しの着想を得て、想像力を働かせる。トロロープは「グラントレー大執事」[97]を生み出したが、もちろん大執事なるものに会ったことなどないはずだ。それに対してディケンズはといえば、広範囲におよぶ調査を行った。たとえば、政府の報告書を読み、ロンドン警察に同行してロンドンの無法地帯イーストエンド界隈を一緒に巡回したといわれている。

フィクションの言語は、教本の執筆から叙情詩へ向かう段階で、その占める位置は変化しやすい。正確な位置は、作者と外的世界との関わりによって決まるからだ。記録的か、風刺的か、あるいは空想的か、いずれの姿勢かをどうしたら判断できるだろうか。

その方法はあると私は考えている。小説家はある世界を描くのみならず、その世界の住人に名前を与える。ユダヤ教とキリスト教共通の神話で、鳥や獣に名前をつけたのはアダムだが、その後バベルの塔[98]の崩壊によって言語はばらばらになった。したがってアダムが付けた名前を私たちは知るすべがない。一方ピルグリム・ファーザーズ[99]は、アメリカ上陸後に何もかも新しい自然界に直面したが、読み書きのできる17世紀のイギリス人だったので、彼らの付けた動物、植物、樹木の名前などはどれもこれも見事に美しいものだった。

小説家たちが登場人物に選ぶ名前は、外部の世界との結び付きを確かなものにする上で、非常に興味深い。だから日本語訳ではすべてがカタカナ化され消えてしまうので、決定的な要素が、さらにそれと共に作品全体の雰囲気が失われ、曖昧になってしまう。

日本人の姓の持つ意味は固定的である。たとえば「ナカムラ」、「ヤマグチ」、「タケシタ」など。ヨーロッパ人の姓には様々な起源がある。アイスランド人はいまでも父系先祖からとった名、ジョンの息子の「ジョンソン」[100]を使用している。スコットランド人やアイルランド人なら氏族の名「マクドナルド」[101]、「オグランディ」[102]などだ。ほとんどのイングランド人の姓には指示的意味はないが、含みはある。小説家はどんな姓を借用しようが、脚色しようが、発明しようが全く自由である。

中世において姓は重要ではなかった。ほとんどの人は姓を持ってもいない。昨今見られるような状況がはじめて起きたのは、正確にいえば、シェイクスピアの『ヘンリー４世第１部』[103]上演の時である。シェイクスピアは、「フォルスタッフ」[104]と取巻き連中に実在する人物の名前を付けた。おかげで知っての通り、シェイクスピアは一悶着起こす羽目になった[105]。そのほか「ニム」、「バードルフ」、「ピストル」[106]などは創作で、ありそうだが架空の名である。命名にはもうひとつの伝統、寓話的なものがある。聖史劇や道徳劇からとる方法で、登場人物は道徳性や喜劇的要素を備えた名前が付けられる。シェイクスピアに登場する娼婦「ドール・ティアシート」[107]など

はそれに当たるだろう。

その後小説に登場する人物の名は寓話的か現実的か、いずれかの傾向を帯びるようになった。チェーホフ[108]の言葉によれば、「喜劇は離れて見える人生、悲劇は身近に見える人生である」。私たちにとっては、悲劇の人物のほうが身近に感じられるので、彼らのほうが現実の名前を持っているように思えるのだ。唯一エリザベス朝時代の悲劇で、中産階級の生活を描いた『フェヴァーシャムのアーデン』[109]だけに、実在する実名のままの「アーデン」が登場する。ベン・ジョンソン[110]の喜劇にはイタリア語で「キツネ」「カラス」「ハエ」[111]を表す人物が登場、また寓話的な意味を持つ「顔面」「狡猾野郎」「美食卿マモン」[112]なども登場する。ジョンソンの後継者ともいえる、王政復古期の劇作家たちが生み出した人物に「サー・フォップリング・フラッター」、「ミセス・フレイル」、「レディ・ウィッシュフォート」、「ミスター・ホーナー」[113]などがいる。彼らはそろって、その名の通り猥褻で、その名に恥じぬ無責任な行動をとり、読者の期待にきちんと応えてくれている。だが私たちから見る彼らの人生は、遙か彼方にある。

小説の勃興と同時に、２つのことが起きる。デフォーとスイフトは、「モール・フランダース」、「ロビンソン・クルーソー」、「レミュエル・ガリヴァー」[114]など実在しない人物の自伝物語を執筆した。架空の人物であってもまざまざと記憶に残る名前である。サミュエル・リチャードソン[115]がそのあとに続き、「クラリッサ・ハーロー」、「ラヴレース」[116]が登場する（「ラヴレース」は実在する貴族の姓だが、もちろん文字通り「女たらし」の意味も持つ）。ここでは純粋に審美的考察が働いているが、英語を母語とする人以外には理解しにくいだろう。私自身、この２人の女性の名前が入れ替わることなど想像できない。「モール・フランダース」という名は快活で、逆境に負けず生きのびる女性のように聞こえ、実際彼女は生き残る。対して「クラリッサ・ハーロー」の名はロマンティックだが、艱難辛苦という言葉がぴったりの響きなので、案の定彼女は辛い目に遭い苦しむ。

ヘンリー・フィールディング[117]はファルス[118]にリアリズムを織り込んだ。「レディ・ブービー」、「ミセス・スリップスロップ」、「オールワージー旦那」[119]などはE. M.フォスター[120]の言葉を借りれば、「精彩を欠く」発展性のない人物。一方でフィールディングに登場する「きびきびした」人物とは「トム・ジョーンズ」、「ウェスタン旦那」、「パートリッジ」[121]などで、みなありふれた普通の名前を持っている。

イギリス喜劇の伝統になじめないという日本人読者がいたら、こんなことが理解の助けになるかもしれない。もしも名前に何か意味がありそうに思えたら、作者は滑稽な意味を持たせているものと理解しておけばよい。ただしジェイン・オースティン[122]だけは例外といわざるを得ない。他の作家なら、『高慢と偏見』[123]に登場する女主人公エリザベス[124]の恐ろしく不愉快な求婚者には、とりわけコミカルな名を付けたことだろう。「コリンズ」[125]は、いかにも平凡で普通の名前だ。つまるところエリザベスには滑稽に映っていないということになろうか。オースティンの小説に登場する名前は「ダーシー」、「ド・バーグ」[126]など社会的階級を表しているから、笑うべきとこ

ろではないのだ。

19世紀に入ると、コミカルな姓が蔓延する。たとえば「ピックウィック」、「チャズルウィット」、「ポッドスナップ」、「デッドロック」[127]などだが、「デッドロック」以外には正確な意味などない。暗示的で印象的だがあり得ない名である。ロンドンの電話帳で見つかることもないだろう。小説家は往々にして、自らの資質を勘違いするものだ。アントニー・トロロープは名前の選び方が拙い。彼はコミカルな伯爵を生み出して、「オムニアム（「何もかも」の意）伯爵」[128]と名付けた。この伯爵の跡継ぎとなる甥は、トロロープお気に入りの登場人物で、「プランタジネット・パリサー」[129]という名を持つ。パリサーは爵位につくと、この「オムニアム伯」なる奇妙な肩書きを負わされる。トロロープは彼なりにこの登場人物を大真面目に扱っている。

ヘンリー・ジェイムズには風変わりで、特異な人物名を使う傾向がある。「ヴェッチ」、「シール」、「クロイ」、「ストゥレサー」[130]など、ありそうだがニューヨークの電話帳にさえ載ってはいないだろう。イヴリン・ウォーは諷刺を込めて名前を付ける。「ポール・ペニフェザー」、「トニー・ラスト」[131]など。実は昔の恨みを晴らしているだけのことで、オクスフォード大学時代の教官で、ウォーが毛嫌いしていた「ミスター・クラットウェル」[132]は、作品のあちこちに顔を出す。モーム[133]はロンドンの「タイムズ」[134]の誕生欄や訃報欄から名前を選ぶ。これは私も使う手である。

ところで「選ぶ」は、この場合適切な表現だろうか。

アメリカの大学で教えていた時に、同僚が私の短編「白い杖」[135]に関するリポートを学生に課した。意見を聞きたくて私も授業に出席することにした。彼らは奇妙な象徴的解釈を引き出した。議論が「グリフィン」[136]という主人公の姓に集中したので、これは「タイムズ」から拾った名だと告げた。だが学生の指摘によれば、「グリフィン」は神話に登場する動物[137]ということになる。私が選んだ理由はそれとは無関係で、執筆当日の新聞に載った何百という名前の中から、私は「選んだ」にすぎなかった。それから２年後のことだが、たまたまH. G.ウェルズの『透明人間』[138]を再読していた時のことだ。透明人間の名前は「グリフィン」といい、実に私の作品とテーマが合致しているではないか。40年の間、私がウェルズの小説を読むことはなかったが、おそらく頭から離れなかったのだろう。

ここではフィクションにおける固有名詞を話題にしたが、これは作家とその題材との結び付きを示している。題材は基本的な心構えとの明確な関わりを示す言語の一部である。したがってこの問題は、フィクションにおける言語の意味全体、そして外的世界とフィクションとの関連と切り離しては考えられないのである。

（訳注）

〈Bennett Award Acceptance Speech,1994〉

[1] キャサリン･マンスフィールド･マントン記念賞（1960）、ジェイムズ･テイト･ブラック記念賞（1964）、ジェフリー・フェイバー記念賞（1964）、ハイネマン賞（1979）、ベネット賞（1994）の５つの賞。

[2] 以下の作家が受賞（年代順）

1976年　ホルヘ・ギリェン（Jorge Guillen :1893-1984）スペインの詩人。

1978年　アンドレイ・シニャフスキー（Andrei Sinyavsky :1925-97）ロシアの小説家。

1980年　V. S.ナイポール（Vidiadhar Surajprasad Naipaul :1932- ）トリニダード生まれのイギリスの小説家。

1982年　シェイマス・ヒーニー（Seamus Heaney :1932-2013）イギリス（北アイルランド）の詩人、ノーベル文学賞受賞（1995）。

1984年　アンソニー・ポウェル（Anthony Powell :1905-2000）イギリスの小説家。

1986年　ナディーン・ゴーディマー（Nadine Gordimer :1923-2014）南アフリカ共和国の女流小説家、ノーベル文学賞受賞（1991）。

1988年　イヴ・ボヌフォア（Yves Bonnefoy :1923- ）フランスの詩人、文芸評論家。

1990年　ウィリアム・トレヴァ（William Trevor:1928- ）アイルランド共和国の小説家。

1992年　チャールズ・トムリンソン（Charles Tomlinson :1927- ）イギリスの小説家。

1994年　フランク･トゥーイ（Frank Tuohy :1925-1999）イギリスの小説家。

（Bennett Award Files, 1976-1994, *Hudson Review Archives1863-2009*）

http://findingaids.princeton.edu/collections/C1091/c02000（2014.11.24アクセス）

[3] “a writer of significant achievement whose work has not received the full recognition it deserves or who is at a critical stage in his or her career,”（‘Description,’ *Ibid.*）

[4] Frank Tuohy, ‘Bennett Award Acceptance Speech,1994,’ *The Hudson Review*（Autumn 1995, XLVIII, No.3）

[5] Rudyard Kipling（1865-1936）インド生まれのイギリスのジャーナリスト、小説家、ノーベル文学賞受賞（1907）。

[6] Somerset Maugham（1874-1965）フランス生まれのイギリスの小説家、劇作家。

[7] Edward Morgan Forster（1879-1970）イギリスの小説家。

[8] Graham Greene（1904-91）イギリスの小説家。

[9] Joyce Cary（1888-1957）イギリスの小説家。

[10] Rosamond Nina Lehmann（1901-90）イギリスの女流小説家。

[11] Ivy Compton-Burnett（1880-1969）イギリスの女流小説家。

[12] Elizabeth Bowen（1899-1973）イギリスの女流小説家。

[13] George Orwell（1903-50）イギリスの小説家。

[14] ‘*la vie quotidienne*’

[15] 第二次世界大戦中のナチスによるイギリスへの空襲は、1940年９月7日から1941年５月21日までの267日間に渡り、ロンドン空撃は71回におよぶ。

[16] Henry James（1843-1916）アメリカの小説家、ヨーロッパに移住し、イギリスに帰化（1915）。

[17] Modern Library：1917年創立のアメリカの出版社、現在の親会社はランダムハウス社（Random House, Inc.）。

[18] *The Portrait of a Lady*（1881）

[19] William Faulkner（1897-1962）アメリカの小説家。

[20] Frederick Lewis Allen（1890-1954）アメリカの文芸誌「ハーパーズ・マガジン」（*Harper's Magazine*）編集者、歴史家。

[21] *Only Yesterday; An Informal History of the1920s*（1931）

[22] Francis Scott Key Fitzgerald（1896-1940）アメリカの小説家。

[23] Viking Press：1925年創立のアメリカの出版社。1975年以降はペンギングループが所有。

[24] May Sarton, *The Portable F. Scott Fitzgerald*（The Viking Press, New York, 1945）

[25] John O'Hara（1905-70）アメリカのジャーナリスト、小説家。

[26] Pearl Buck（1892-1973）中国で少女時代を過ごしたアメリカの女流小説家、ピューリッツァ賞受賞（1932）、ノーベル文学賞受賞（1938）。

[27] Gothenburg, Sweden：ストックホルムに次ぐスウェーデン第２の都市。

[28] F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*（1925）

[29] an enormous couch on which two young women were buoyed up as though upon an anchored balloon. They were both in white, and their dresses were rippling and fluttering as if they had just been blown back in after a short flight around the house.

（*The Great Gatsby*, Macmillan Publishing Company, New York,1980 ）p.8, ll.18-22

[30] —shirts with stripes and scrolls and plaids in coral and apple-green and lavender and faint orange, with monograms of Indian blue. Suddenly, with a strained sound, Daisy bent her head into the shirts and began to cry stormily.

"They're such beautiful shirts," she sobbed, her voice muffled in the thick folds. "It makes me sad because I've never seen such—such beautiful shirts before."

（*Ibid.*）p.93, ll.28-32

[31] Edith Wharton（1862-1937）アメリカの女流小説家。

[32] Tauschnitz：正しくはTauchnitz と綴る。ドイツの印刷出版社。

[33] Richard Warrington Baldwin Lewis（1917-2002）アメリカの文学者、文芸評論家、ピューリッツァ賞受賞（1976）。

[34] R.W.B. Lewis, *Edith Wharton : A Biography*（1975）

[35] Edith Wharton, *The Age of Innocence*（1920）は女性初のピューリッツァ賞受賞（1921）作品。

[36] Edith Wharton, *The Custom of the Country*（1913）

[37] ‘Undine Spragg’ *The Custom of the Country*の女主人公。

[38] epiphany：単純で平凡なものや、些細なことから人間の本質が啓示されることを意味する文学用語。

[39] Henry Fielding（1707-54）イギリスの小説家。

[40] William Makepeace Thackeray（1811-63）イギリスの小説家。

[41] Evelyn Waugh（1903-66）イギリスの小説家。

[42] Anthony Powell（1905-2000）イギリスの小説家。

[43] Tobias George Smollett（1721-71）イギリスの小説家。

[44] Charles Dickens（1812-70）イギリスの小説家。

[45] Herbert George Wells（1866-1946）イギリスの小説家。

[46] Sir Victor Sawdon Pritchett（1900-97）イギリスの小説家、批評家。

[47] Herman Melville（1819-91）アメリカの小説家。

[48] Edgar Allan Poe（1809-49）アメリカの小説家。

[49] Nathaniel Hawthorne（1804-64）アメリカの小説家。

[50] Walt Whitman（1819-92）アメリカの詩人。

[51] Emily Dickinson（1830-86）アメリカの女流詩人。

[52] Ernest Hemingway（1898-1961）アメリカの小説家。

[53] Jerome David Salinger（1919-2010）アメリカの小説家。

[54] John Updike（1932-2009）アメリカの小説家。

[55] Eudra Welty（1909-2001）アメリカの女流小説家。

[56] Katherine Anne Porter（1890-1980）アメリカの女性ジャーナリスト、小説家、ピューリッツァ賞受賞（1966）。

[57] John Cheever（1912-82）アメリカの小説家。

[58] Raymond Carver（1939-88）アメリカの小説家。

[59] Vladimir Nabokov（1899-1977）ロシア生まれの小説家, アメリカに亡命し、帰化（1945）。

[60] Colette（1873-1954）フランスの女流小説家。

[61] ‘Huckleberry Finn’ Mark Twain, *The Adventures of Tom Sawyer*（1876）の続編*The Adventures of Huckleberry Finn*（1885）の主人公。物語はトムの親友ハックが使う土着の言語を交えた「話し言葉」で展開する。

[62] Wystan Hugh Auden（1907-73）イギリス生まれの詩人、アメリカに移住し、帰化（1946）。

[63] <u>Time</u> that is intolerant
Of the brave and innocent,
And <u>indifferent in a week</u>
<u>To a beautiful physics.</u>

<u>Worships language and forgives</u>

Eveyone by whom it lives,
Pardons cowardice, conceit,
Lays its honours at their feet.

Time that with this strange excuse
Pardoned Kipling and his views,
And will pardon Paul Claudel
Pardons him for writing well.

'In Memory of W. B. Yeats'（1939）

イギリスの詩人イエイツ（William Butler Yeats:1865-1939）を追悼する詩。トゥーイがスピーチで引用した部分（下線部）を含む3節目のこの3連だけは、後年作者オーデンによって削除された。

〈A Note on Fiction and Language〉

[64] 'A Note on Fiction and Language'「英語青年」第131巻 第４号（研究社1985.7）p.200-202

[65] Gustave Flaubert（1821-80）フランスの小説家。

[66] George Sand（1804-76）フランスの女流小説家。

[67]「ジョルジュ･サンドとギュスターヴ･フロベール。性別はいうまでもなく、17歳という年齢差、気質、生活、家庭事情、経済的状況、政治的信条、そしてなかんずく、作家としての芸術観や創作方法、文壇における地位――後世の評価からは考えにくいことであるが――と、あらゆるものが根本的に相違しているように見えるなか（･････）一方が死を迎える1876年までの10余年間友情にあふれ、ときには諧謔的な、だが常に相手への敬愛の念と深い思いやりにみちた手紙を交わし続けた。（･････）二人の手紙は今日、423通を目にすることができる。（･････）19世紀ばかりか、これまでに交わされた往復書簡の中で最も気品高い書簡集と評されてきた。」

持田明子訳『往復書簡サンド=フロベール』（藤原書店 1998「編訳者あとがき」）p.389-391

[68]「５，６年かかる壮大な本のために私はあらゆる種類の本を読み、ノートを取っています。それから、２、３の他の作品を考えています。以上が長い間の夢です。これが主要なことです。」

サンド宛のフロベールの手紙〔パリ、1873年3月12日、水曜日〕（上掲書）p.291

[69]「私の野心はあなたほど大きくはありませんでした。あなたはあらゆる時代のために書こうとされます。この私は、50年後には完全に忘れられているでしょうし、厳しく批判もされましょう。それが第一級でない事物の法則です。私は一度として自分が一級だと考えたことはありません。私の考えはむしろ、たとえ何人かであれ、同時代の人々に働きかけ、喜びと詩情の私の理想を彼らに共有させることでした。この目的をある程度、達成しました。」フロベール宛のサンドの手紙

〔ノアン、1872年、12月8日〕（上掲書）p.283

[70] Henry James（1843-1916）

[71] Charles Percy Snow（1805-80）イギリスの小説家、科学者。

[72] Harold Bloom（1930- ）アメリカの文学者、批評家。

[73] Sir Arthur Conan Doyle（1859-1930）イギリスの小説家。

[74] John Ronald Reuel Tolkien（1892-1973）南アフリカ共和国生まれのイギリスの文献学者、小説家、詩人。

[75] John Donne（1572-1631）イギリスの詩人、イングランド国教会の聖職者。

[76] 'The Good-Morrow' *Songs and Sonnets*（1635）

[77] Ivor Armstrong Richards（1893-1979）イギリスの批評家。

[78] Samuel Taylor Coleridge（1772-1834）イギリスの詩人。

[79] コウリッヂによる「散文と詩の定義」は、正しくは以下（下線部）の通りである。

「散文とは<u>最適な語順の言葉</u>、詩とは<u>最適な語順の最適な言葉</u>」

'I wish our clever young poets would remember my homely definitions of prose and poetry; that is prose; <u>words in their best order</u>;—poetry; the best words <u>in the best order</u>'

（'*Table Talk*,' 12 July,1827）

[80] William Shakespeare（1564-1616）イギリスの劇作家、詩人。

[81] Pierre Corneille（1606-84）フランスの劇作家。

[82] Jean Baptiste Racine（1639-99）フランスの劇作家。

[83] Daniel Defoe（1660?-1731）イギリスの小説家。

[84] Jonathan Swift（1667-1745）イギリスの小説家。

[85] Henry Fielding（1707- 54）イギリスの小説家。

[86] Romantic Movement：イギリスのロマン主義運動は、詩集『抒情歌謡集』（*Lyrical Ballads*,1798）出版から19世紀の最初の10年間に展開されたとされる。代表的詩人にワーズワース（William Wordsworth:1770-1850）、ブレイク（William Blake:1757-1827）、コウリッヂ、バイロン（George Gordon Byron:1788-1824）、シェリー（Percy Bysshe Shelley:1792-1822）、キーツ（John Keats:1795-1821）などがいる。

[87] Charles Dickens（1812-70）

[88] Charlotte Brontë（ 1816-55）イギリスの女流小説家。ブロンテ３姉妹の長女。
Emily Brontë（1818-48） イギリスの女流小説家。ブロンテ３姉妹の二女。
Anne Brontë（1820-49）イギリスの女流小説家。ブロンテ３姉妹の三女。

[89] William Makepeace Thackeray（1811-63）イギリスの小説家。

[90] Anthony Trollope（1815-1882）イギリスの小説家。

[91] Joseph Conrad（1857-1924）イギリスの小説家。

[92] James Augustine Aloysius Joyce（1882-1941）アイルランド共和国の小説家、詩人

[93] Virginia Woolf（1882-1941）イギリスの女流小説家。

[94] Richard Ellmann（1918-87）アメリカの文学者、批評家。

[95] Richard Ellmann, *James Joyce*（1959）

[96] James Joyce, *Finnegans Wake*（1939）

[97] ‘Archdeacon Grantley’ Anthony Trollope, *Barchester Towers*（1857）に登場。

[98] Tower of Babel：町と塔を建て、その塔を天に届かせようとした民に神は怒り、塔を壊し、彼らの言葉を乱し、互いが通じないようにして全地に散らせた。世界の言語が異なることの起源を説明する話とされる。（『旧約聖書』「創世記 11: 4-9」）

[99] Pilgrim Fathers：17世紀にイングランド国教会からの分離と信仰の自由を求めて、メイフラワー号で北アメリカ大陸へ向かった清教徒の一団。

[100] ‘Johnson’

[101] ‘Macdonald’

[102] ‘O’Grandy’

[103] William Shakespeare, *Henry IV, Part I*（1598）

[104] ‘Falstaff’

[105] シェイクスピアは，初演時に実在の人物名「サー・ジョン・オールドカースル」（Sir John Oldcastle:1378-1417）を使った。「臆病で大酒飲みの女好き」として描かれた先祖の不名誉に対して、子孫から「名誉毀損」（「昨今見られるような状況」）の抗議が上がり、のちに「サー・ジョン・フォルスタフ」に改名した。Falstaffも中世時代に実在した騎士Sir Johnをもとにしたといわれる。

[106] ‘Nym’ *Henry IV, Part I*に登場。

‘Bardolph’ *Henry IV, Part I* / *Henry IV, ParII* / *Henry V*に登場。

‘Pistol’ *Henry IV, Part I* / *Henry IV, Part II* / *Henry V*に登場。

[107] ‘Doll Tearsheet’ *Henry IV, Part II*に登場する。‘tearsheet’は「切り取られた広告ページ」の意。

[108] Anton Pavlovich Chekhov（1860-1904）ロシアの劇作家、小説家。

[109] *Arden of Faversham*（1592）16世紀当時の実話に基づいた、作者不詳の家庭悲劇。

[110] Ben Jonson（1573?-1637）イギリスの劇作家、詩人、批評家。

[111] ‘Volpone’（古ギツネ）‘Carbaccio’（カラス）‘Mosca’（ハエ）

[112] ‘Face’ ‘Subtle’ ‘Sir Epicure Mammon’『錬金術師』（*Alchemist*,1610 ）に登場する人物たち。

[113] ‘Sir Fopling Flutter’ George Etherege, *The Man of Mode, or, Fopling Flutter*（1676）の主人公。

‘Mrs. Frail’「不貞夫人」の意。

‘Lady Wishfort’「欲望婦人」の意

‘Mr. Horner’「ヤク中（飲んだくれ）氏」の意

[114] ‘Moll Flanders’ Daniel Defoe, *The Fortunes and Misfortunes of the Famous Moll Flanders*（1722）の主人公。

‘Robinson Crusoe’ Daniel Defoe, *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe*（1719）の主人公。

‘Lemuel Gulliver’ Jonathan Swift, *Travels into Several Remote Nations of the World by Lemuel Gullliver*（1726）の主人公。

[115] Samuel Ridhardson（1689-1761）イギリス（ロンドン）の印刷業者、小説家。

[116] ‘Clarissa Harlowe’ *Clarrisa, or History of a Young Lady*（1748）の主人公
‘Lovelace’ *Clarrisa, or History of a Young Lady*（1748）に登場。作中での性格から普通名詞で「女たらし」の意味を持つようになる。
[117] Henry Fielding（1707-54）イギリスの小説家。
[118] farce：ファルス（笑劇）。舞台で観客を喜ばせるために、誇張した性格の人物や不自然であり得ない状況を設定したドタバタ喜劇。
[119] ‘Lady Booby’「間抜け婦人」の意。
‘Mrs. Slipslop’「無駄口氏」の意。
Henry Fielding, *The Adventures of Joseph Andrews, and of his Friend Mr. Abraham Adams*（1742）に登場。
‘Squire Allworthy’「ご立派旦那」の意。
Henry Fielding, *The History of Tom Jones, a Foundling*（1749）に登場。
[120] Edward Morgan Forster（1879-1970）イギリスの小説家。
[121] ‘Tom Jones’ *The History of Tom Jones, a Foundling*の主人公。
‘Squire Western’ *The History of Tom Jones, a Foundling*に登場。
‘Partridge’ *The History of Tom Jones, a Foundling*に登場。
[122] Jane Austen（1775-1817）イギリスの女流小説家。
[123] Jane Austen, *Pride and Prejudice*（1813）
[124] ‘Elizabeth Bennet’ *Pride and Prejudice*の女主人公。
[125] ‘William Collins’ *Pride and Prejudice*に登場。
[126] ‘D’arcy’ 正しくは ‘Darcy’ と綴り、*Pride and Prejudice*に登場。
‘de Burgh’ 正しくは ‘de Bourgh’ と綴り、*Pride and Prejudice*に登場。
[127] ‘Pickwick’ Charles Dickens, *The Pickwick Papers*（1836）の主人公。
‘Chuzzlewit’ Charles Dickens, *The Life and Adventures of Martin Chuzzlewit*（1843）の主人公。
‘Podsnap’ Charles Dickens, *Our Mutual Friend*（1864）に登場。
‘Dedlock’ Charles Dickens, *Bleak House*（1853）に登場。「行き詰まり」の意味を持つ。
[128] ‘Duke of Omnium’
[129] ‘Plantagenet Palliser’ Anthony Trollope, *Palliser Novels*（1864-79）の主人公。
[130] ‘Vetch’ Henry James, *The Spoil of Poynton*（1897）に登場。
‘Theale’ Henry James, *The Wings of the Dove*（1902）に登場。
‘Croy’ Henry James, *The Wings of the Dove*（1902）の女主人公。
‘Strether’ Henry James, *The Ambassodor*（1903）の主人公。
[131] ‘Paul Pennyfeather’ Evelyn Waugh, *Decline and Fall*（1929）の主人公。
‘Tony Last’ Evelyn Waugh, *A Handful of Dust*（1934）の主人公。
[132] ‘Mr. Crutwell’ 正しくは ‘Mr. Cruttwell’ と綴り、オクスフォード大学歴史学者のC.R.M.F. Cruttwell

（1887-1941）がモデルと考えられる。

[133]Somerset Maugham（1874-1965）

[134]*The Times*：1785年創刊のイギリス随一の日刊新聞。記事の正確さと品位の高さを誇る。

[135]Frank Touhy, 'The White Stick,' *The Collected Stories*（Penguin Books,1984）
村松俊子訳「白い杖」（『フランク・トゥーイ短編集』鷹書房弓プレス 2013）

[136] 'Griffin'

[137]ギリシャ神話の「グリフィン」とは伝説上の生き物で、鷲の頭と翼と鉤爪の前足、ライオンの胴体と尻尾と後ろ足を持つ。

[138]*The Invisible Man*（1897）

業　績　一　覧

以下に掲載するものは、2013年４月から2014年３月までに本誌以外に発表した原著および著書等である。

教　　授　**宮　田　久美子**

色と色彩の心理学（共著，㈱培風館，2014.3）
多種類の単色の色彩感情（単著，日本色彩学会誌36巻SUPPLEMENT（2013），2013.5）Pp.300-301
単色の感情効果の予測式の提案（共著，日本色彩学会誌36巻SUPPLEMENT（2013），2013.5）Pp.298-299

教　　授　**髙　橋　眞知子**

「秘書の仕事」がよくわかる引き継ぎノート（編著，中経出版，2013.8）

教　　授　**菅　野　弘　久**

クラウス・ハイツマン著 合唱と独唱のためのヴォーカル・ウォームアップ200（翻訳，パムナジカ，2014.2）

准教授　**酒　巻　洋　一**

酒巻洋一展 －蜂の巣の少年－（単独，GALERIE SOL，2013.5）
展示発表 考察文（単独，東京藝術大学美術教育研究会第18回研究大会，2013.5）
「25人の絵」展（共同，ギャラリーヒルゲート，2013.11）
富士山景クラシック －正統としての伝統－（共同，GALERIE SOL，2014.2）

特任准教授　**村　上　八千世**

3－5歳児のためのプレイスペースデザイン（共同，こども環境学研究第9巻第1号，こども環境学会，2013.4）P.48
子どもと食　食育を超える（共著，東京大学出版会2013.4）
明日の保育が変わる!! 園内研修2013（共著，文部科学省科学研究費基盤研究（C）（課題番号22530883）報告書，園内研修研究グループ 東京，2013.6）
園庭環境による保育者の資質の向上-園庭づくりを通した事例より-（単著，こども環境学研究第9巻第2号，こども環境学会，2013.8）Pp.61-68

助　教 **大　内　晶　子**

年少児における自己制御能力と社会的スキル・問題行動との関連（単独，日本教育心理学会第55回総会発表論文集，2013.8）P.578

非社会的遊びが多い子どもの社会的適応-事例を用いた縦断的検討-（単独，日本発達心理学会第25回総会発表論文集，2014.3）P.125

助　教 **鈴　木　範　之**

平成25年度茨城県近代美術館ミュージアムコンサート～歌とピアノで贈るひそやかな祝祭～
（共同，茨城県近代美術館，2013.12）

助　教 **森　　慎太郎**

騎手のフィジカルトレーニングおよびコンディショニングに関する研究（共著，日本臨床スポーツ医学会誌Vol.22 No.1，2014.1）Pp.152-159

運動誘発性筋損傷による拡散パラメータの変化（共著，日本アスレティックトレーニング学会第2回学術集会プログラム･抄録集，2013.6）P.50

助　教 **成　合　智　子**

Comparative study of intensity in the speech of native speakers and Japanese speakers of English
（共著，Journal of Acoustical Science and Technology Vol.35, No.1, 2014.1）Pp. 42-49

常磐短期大学研究紀要寄稿規定

制定　昭和51.11.24教授会
改正　昭和60. 3.19, 平成２. ４.18
　　平成10. 7.14

（目　的）
第１条　専門委員会の設置および運営に関する規定第４章に基づいて発刊する研究紀要の寄稿については，この規定の定めるところによる。

（寄稿資格者）
第２条　本紀要の寄稿資格者は，次の各号のいずれかに該当する者とする。
１．本学の専任職員であって，教員資格審査規定第２条に定める教員
２．学内講師および本務校のない非常勤講師であって，委員会が寄稿資格を認めた者
３．本学の事務員であって，１～２号との共同研究者
４．その他，学問的価値などを考慮して，特に委員会が認めた論文の寄稿者　（昭和60. ３. 19改正）

（未発表の原則）
第３条　寄稿論文は未発表のものに限る。

（論文の種類）
第４条　寄稿論文は原著論文のほか, 研究ノート, 報告, 翻訳, 書評, 文献紹介などとする。（昭和60. ３. 19, 平成10. ７. 14改正）

（基準原稿枚数）
第５条　論文１篇の長さは，図・表・写真などを含め，400字詰用紙40枚を基準とする。　（昭和60. 3. 19改正）

（１人１篇の原則）
第６条　寄稿論文は１人１篇とする。但し，共同研究の場合，もしくは２つ以上の原稿論文の合計が40枚を越えない場合には，複数の論文を認めることがある。

（原稿の訂正等）
第７条　委員会は, 寄稿論文に対して必要な場合には, 加筆, 訂正, 削除もしくは, 掲載見送りを要求することがある。

（著者校正）
第８条　校正は著者校正とし，校正段階での原稿の変更は原則として認めない。

（抜　刷）
第９条　抜刷は１篇につき40部を無料とし，それ以上については希望者の実費負担とする。　（平成10. 7. 14改正）

（論文概要）
第10条　原著論文には，論文概要（例. 英文で200語程度）をつける。　（平成10. 7. 14追加）

附　則
１．この規定の改廃には，教授会出席者の３分の２以上の同意を必要とする。
２．昭和60年３月19日の改正により，第２条を削除し，第３条および第４条をまとめて第２条とし，以下２ヶ条ずつ繰り上げる。
３．この規定の改正条項は，昭和60年４月１日より施行する。
４．校名変更に伴い，平成２年４月１日より規定名称を改める。
５．この規定の改正条項は，改正の日より施行する。

常磐短期大学研究紀要　第43号（2014年度）

平成27（2015）年３月31日発行
発行者　常 磐 短 期 大 学
〒310-8585　水戸市見和１丁目430番地の１
電　話　029－232－2511㈹
印刷所　山三印刷株式会社
〒311-4153　水戸市河和田町4433の33

編集委員会
委員長　宮田久美子
委　員　菅野　弘久　　李　　精
　　名城　邦孝　　鈴木　範之
　　瀧口　泰行
（アルファベット順）

Bulletin
of
Tokiwa Junior College

No.43

Contents

Research Notes

MORI Shintaro : Usefulness of the diffusion parameters in the evaluation of the skeletal muacle …… 1

MIYAKE Mitsukazu : The preparation in advance toward "Korean Mental Structure of Grudge (恨)" — misleading and -understanding between Japan and Korea …… 7

KANNO Hirohisa : On Hoshino Toru's Unpublished Collected Poems …… 58

Report

MUROYA Naoko : Development of guidance for nursery teacher trainees preparing for practical training at welfare institutions …… 59

Translation

MURAMATSU Toshiko : Fiction and Language — in the case of Frank Tuhoy …… 75

Tokiwa Junior College
March 2015